失われた世界で得た絆

新藤 順規

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
失われた世界で得た絆

【Ｎコード】
Ｎ４６７２Ｐ

【作者名】
新藤　順規

【あらすじ】
その日、世界は今までの常識を失った。
人が人を喰らい、人が狂い絆を無くした。
人の世界は終焉を迎えようとしていた。
その日は、たまたま寝過ごした。
友人宅で映画を見ながら飲み明かした。
その翌日、彼女からもらった携帯電話がなぜか壊れ、目覚ましとして機能しなかったからだ。
だが、それが俺の命運を分けた。

この地獄と化した世界で、どう生きていくかという命運を……。
大切なものを失った主人公、藤堂厚志が終わった世界で再び大切なものを掴み、精一杯生きようとする物語。

※作者スランプ気味のため、不定期更新にします。
申し訳ないです。

プロローグ　逃げ延びた先に（前書き）

新作です。
ゾンビものは初めてですので、表現が拙いと思いますが、暖かく見守ってください。
※２０１１年６月１９日加筆改編しました。

プロローグ　逃げ延びた先に

「はぁっ……はぁっ……はぁっ！」
「はぁっ…けほっ……はぁっ」
男と女が街を走っていた。
普段なら手を繋いで走るという状況は青春の一ページとも言えるが、今はそんな事を言える状況ではなかった。
一人は右手に赤い染みが付いた金属バットを持った三十代前半の好青年。もう一人は、長い茶髪を揺らしながら走る二十代後半の女性である。
男は青木透矢、女は青木文恵。二人は夫婦である。よく見れば確かに二人の左手の薬指には同じ指輪が光っていた。
「ま、待って！　透矢……君っ、待っ……て！！」
「止まるな、文恵っ！　止まったら追い付かれるぞ！」
「……ぐすっ」
透矢は鬼気迫った様子で、文恵は涙を流しながら走っていた。
実際、危機が迫っていた。
二人の周りに人は居ない。ただ遠くから悲鳴とも、絶叫とも聞こえる声が聞こえてくる。
二人が走る街は、普段なら子供達が走り回る――親子連れが多く住む長閑（のどか）な街だった。
今は見る影も無い。
道路には血が飛び散り、至る所にミンチのような肉片が散乱している。別に今日が謝肉祭で、この地方特有の奇祭だという訳では無い。
辺りを埋め尽くす血や肉は、全て人間の物だった。
「くそ、くそくそっ！！」
透矢は悪態を吐きながら、倒れそうになる身体を無理矢理動かす。
だが、文恵は限界だった。

もう三十分以上走り回っている。普段営業回りである程度体力があると自負している透矢でさえ疲れが隠せないのである、専業主婦の文恵が走れている事自体が奇跡だった。

二人は、見通しのいい駐車場に入る。辺りに動く者が居ないのを確認すると、透矢は一休みするために止まり、地面に座った。止まると同時に文恵もへたり込む。

「はぁはぁ……もう、走れない……っ！」

「はぁ、はぁ、駄目だ……一休みしたら、行くぞ……っ」

透矢は荒くなった息を整えつつ、へたり込んだ文恵に言う。一休みとは言っているが、透矢は油断無く辺りを見回し、動くものが無いか確認している。

駐車場は入口と出口が対照の位置にあり、入場するためには駐車券を取り、帰りに金を払う典型的なパーキングだった。

「さぁ、行くぞ」

「もう、無理だよぉっ！　走れないっ！！」

非難所まで後少しだった、だから身体に鞭打ってでも動かなければならない。一分も休まないうちに透矢は立ち上がり、文恵に言った。文恵は涙を流し、両手で顔を覆う。

「静かに、奴らに気付かれる……っ。早く行かないとまずいんだっ」

「無理なものは無理だもんっ！！」

「だから、静かに――っ！？」

さらに声を上げて頭を振る文恵の口を塞ごうとした透矢は固まった。

くぐもった呻き声と共に靴を引きずる音が聞こえる。それも一つや二つでは無い。

辺りを見回すと駐車場の入口に影が見えた。

駐車場は入口以外がフェンスで囲まれていて、道路が見えなくなっている。そのフェンスの端から、その影は徐々に入口に近付いていた。必然的に呻き声も良く聞こえ始める。

「文恵急げ！　奴らが来た！！」

「……っ！？」
透矢は、文恵の手を取り無理矢理立たせた。そのまま出口に向かって走り出す。
文恵はよろけながら着いて来た。
出口も同様にフェンスで囲まれていて、向こう側は見えない。もしかしたら奴らが居るかもしれない。だが、そんな事に一々構っていられなかった。
透矢は、文恵の手を引いたまま出口を駆け抜ける。そのまま、脇目も振らず走り続け――――ようとした。
フェンスを越えた瞬間、脇から手が飛び出して来た。透矢は何とか避ける事が出来たが、その後ろに居る文恵は避けられる訳が無かった。
「いやぁぁぁぁぁぁっ！？」
「文恵！！」
手の持ち主である血だらけの男は文恵を掴むと、次の瞬間、首に噛み付いた。血が喉に詰まったようなくぐもった悲鳴が上がる。
「と……うや……く……」
「くそ、くそくそくそ！　文恵を離せ！！」
透矢は、文恵にさらに噛み付こうとする男の頭にバットを振り下ろす。頭丁部が陥没するが、男は痛みを感じてないかのように再び文恵に噛み付く。
数度バットを頭に叩き付けると、男はようやく動かなくなった。
「文恵っ！」
透矢はバットを放り出し、文恵に駆け寄る。だが、頸動脈を噛み切られたらしく、尋常でない量の血が溢れ出している。
「くそ！　血が、止まらないっ！」
咄嗟に手で押さえたが、そんな付け焼き刃が通用するわけも無く、血は溢れ出る。
「くそっ！」
透矢は悪態を吐き、文恵を抱きしめる。もはや彼女は痙攣を繰り

返すだけで、意識は無い様子だった。
透矢の目から涙が零れる。辺りから引きずる音と共に呻き声が聞こえたが、もう彼には関係なかった。
「……もう……どうでもいい……」
諦めたように文恵の目を閉じさせ、座り込む透矢。
「文恵の居ない世界なんて……」
そう呟いた時、文恵の身体が動いた。透矢は、はっとして彼女を見た。
その瞳は――――開かれていた。
「ふみ――――げぁっ！？」
一瞬笑みを浮かべた透矢は痛みに声を上げた。文恵は目を開くと、突然彼の首に噛み付いた。
透矢は暴れるように文恵を突き飛ばし、血が吹き出す首に手を当てる。
「ふ、ふみ……え……」
夢遊病者のようにゆらりと立ち上がる文恵を見て、透矢は絶望した。
文恵――――だったモノは、他の奴らと同じように手を前に突き出し、足を引きずりながら透矢に向かってくる。それだけでなく、周りを見れば同じようにして彼に向かってくるモノがいた。
老若男女問わず、透矢に向かってくる。皆文恵と同じく何処かしらに噛まれたような後があった。
「……く、そっ」
透矢は文恵に噛み付かれながら、そう悪態を吐いた。

第1章　崩壊の予兆（前書き）

２０１１年６月１９日加筆改編しました。

第1章　崩壊の予兆

『ぎゃぁぁぁぁぁぁ〜！！』
『た、助けてぇっ！！』
『や、止め、あぁぁぁぁぁぁっ！？』
何か騒がしい。しかも、尋常ではない声が聞こえる。
「……はっ！？」
何事かと男は目を覚ました。寝ぼけた頭で耳を済ますが、特に変な声は聞こえない。
「……夢か？」
頭を掻きながら起き上がり、ベッド脇にある携帯電話に手を伸ばす。開いて時間を確認しようとしたが、画面は真っ暗なままだった。
「……？」
男は再び頭を掻きつつ、眉をひそめる。
電源が切れているのかと思い、電源ボタンを長押しする。だが、携帯電話はうんともすんとも言わなかった。
「マジかよ、壊れた？　昨日電池はフルあったから電池切れなわけないしな……」
ため息を吐き、洗面所に向かう、ふと、違和感を感じて部屋を見回した。
散乱したビールの空き缶、積み上げられた洋服、やたらでかいテレビ。見慣れた部屋とはなにもかもが違っていた。
（そうか、昨日はあいつん家に泊まったのか……）
男――藤堂厚志は、昨日の事を思い出しながら洗面所を探した。
昨日はたまたま非番だったため、友人と夜通し語り合ったのだ。
そのため、厚志の住む寮ではなく、友人宅に泊まってしまっていた。
友人の部屋はワンルームなので、すぐに見付かった。ユニットバスに併設された洗面所で顔を洗い目を覚ます。
鏡の中には、二十代半ばながら幼さを残しつつも端正な顔立ちの

青年が映っていた。茶の瞳に黒髪、自衛隊に勤務しているため、身体は引き締まっている。服装は黒のTシャツにジーンズというラフなものである。

寝ぼけた頭を完全に覚まし、厚志はバスルームを出る。友人は薄情にも既に出勤したらしく、慌てて出て行ったのか洗濯された服が散乱していた。

「ったく、起こしてけよ――――なぁっ!?」

厚志は、部屋を横切ろうとして、視界に入った目覚まし時計を見て素っ頓狂な声を上げる。

「じゅ、十一時半!?」

明らかに遅刻だった。出勤時間よりもむしろ昼休みの方が近いくらいの時間だ。

「やばい、今日は合同訓練の日だった!!」

いつもなら駐屯地に近い寮ではあったが、遅刻すると後が怖いので余裕をもってアラームを鳴らしていた。しかし、今携帯電話は沈黙を保ったままだった。

「……あいつに貰った物だから使ってたが、もう限界かな……」

彼女から貰った、今は動かない携帯電話を見つめる。

「っと、思い出に浸ってる場合じゃなかった!!」

厚志は、慌ててハンガーにかけていたYシャツを羽織ると部屋を出た。鍵は掛かっていなかった上、何処にも見当たらない。焦っている厚志は悪いとは思いつつも鍵を閉めずに部屋を出た。

(後で謝るしかないな)

そんな事を思いながら、アパートの階段を下りる。

友人の家は、古い木造二階建てのアパートだった。部屋は角部屋の南向き。意外と条件は良いが、木造で古いため防音等無く、隣の声が丸聞こえだったりする。

(ま、月三万じゃ仕方ないか……)

苦笑を浮かべ、厚志は最短ルートを思い浮かべる。アパートは意外と寮から近く、走れば十分程度で辿り着ける距離である。

厚志は走りながら、妙に静かな住宅地に違和感を覚え、立ち止まった。

辺りを見回す。左手は、個人経営らしいやたら高いフェンスに覆われた駐車場なので仕方がないが、右手には普通の民家が並んでいる。周囲には人っ子一人見当たらない。まして今日は休日である。特に駐車場には車が無いため、子供達には格好の遊び場になるはずだ。だが、子供はおろか、よく散歩している老人達すらいなかった

（何だ、この静けさ……）

よくよく観察してみると、不自然な部分が多い。開け放たれた玄関。発進しかけで停まっている車。転がっている錆びた金属バット。一つ一つは田舎なのであってもおかしくないが、全ての家がそうである――または、それに近い形である――事に違和感を覚えた。

（一体何があった……？）

厚志は眉をひそめ、とりあえず落ちている金属バットを拾った。

「……っ！？　何だこのバット！？」

バットに付いていた錆のようなものはただの汚れでは無かった。一見すれば赤錆に見えるが、それは赤黒く変色した血であった。

「うわぁぁあぁぁ、た、助けてくれぇっ！！」

突然、厚志の視線の先にあるT字路に男が叫びながら走ってきた。男の慌てぶりは尋常ではなかった。

「すいません！　何かありましたか！！」

「ひ、人？　助かった」

声に反応した男が立ち止まり、安堵の笑みを浮かべた。そのままこちらに走ってきた。

「た、助けてくれ！　人が、人が襲ってくるん――――ひっ！？」

「え？　あ、これはそこに落ちてたんです」

厚志は慌てて持っていた血の付いたバットが自分の物ではないと説明する。だが、男は信じなかったらしく、後退りし始める。

「信じてください、違うんです！」

「止めろ、近寄るな！！」

男は明らかに怯えていた。
何があったのか分からないが、服は乱れ、所々無理矢理引き裂かれたように裂けている。その表情は正常な判断を無くしたように様々な感情が渦巻いているようであった。
「待ってくださ――――え？」
駐車場のフェンスの影から傷だらけの女が現れたかと思うと、次の瞬間、男に噛み付いた。
「い、ぎゃあああああああっ！？」
男の悲鳴と共に、血が噴き出る。首に噛み付かれた男は暫く暴れ、何とか引き剥がそうともがいていた。それも意味を成さず、女は喰らい付いて離さない。
やがて、男は抵抗しなくなり、ぴくぴくと痙攣するだけになった。
厚志は見ている事しか出来なかった。目の前で突然起きた事象に理解が追い付かず、呆然として立っていた。
ようやく頭が理解した頃、厚志は行動した。
「な、何をしている！　その人を離せ！」
厚志が強めの声を出して近寄るが、女は気にした様子も無く男に噛み付き続ける。
「聞こえないのか、話せといっているんだ！」
すると、女がようやく厚志の声に反応し顔を向ける。
「……うっ！？」
女の顔に吐き気を覚え、後退る。
血がよだれのように滴り、元は綺麗だったはずの白いワンピースを赤く染めていた。
女はまるで何かを求めるように両手を突き出して厚志に向かってくる。その足取りは拙く、酔っ払いのようですらあった。
「や、止め――――」
厚志は異常な女の行動に混乱し、抵抗できなかった。
肩を掴まれ、押されるままに背中から倒れ込む。
（か、噛まれる！）

何とか女の腹に足を当て、そのまま倒れ込む力を使い、巴投げを行った。日頃鍛えている筋力と技を使い投げる事が出来た。

背後でゴッと鈍い音が聞こえた。

慌てて立ち上がり振り返ると、受け身すら取れなかったらしい女が仰向けに寝ていた。

「ま、マジかよ。嘘だろ……し、死んだ？」

女の尋常でない様子に咄嗟に投げたとは言え、まさか受け身も取らず落ちるとは思わなかった。

近寄ろうとすると女がまるで胸倉を引っ張られて起き上がるようにして、起き上がる。だが、立ち上がろうとして俯せに倒れた。

見ればどうやら投げられた時に辺り所が悪かったのか、足が有り得ない方向に曲がっていた。

「な、何だこれ……」

女は立ち上がる事を諦めたのか、はいずって厚志に近付いてこようとする。

「ち、近……寄るな……」

厚志は混乱し、異常な女の行動に半ば恐慌状態に陥りかけていた。

「く、来るなあああぁぁぁ！！」

混乱したままがむしゃらにバットを振り下ろす。肩、腕とバットが当たるが女は少し怯むだけで全く痛みを感じた様子は無い。

「何だよこれ、何なんだよ！！」

もう一度振り下ろした。たまたま頭に当たり、スイカを叩き割るような感触が腕に伝わる。

「……え？」

気付くと女が動きを止めていた。

「……こ、殺した？　俺が？」

自らの行いに恐怖し、厚志は震えた。

ふと、女の持ち物らしいパスケースが落ちていた。恐る恐る拾うと、二人の幸せそうな男女が写った写真があった。裏返すと、『青木文恵』と書かれた免許証が入っていた。

「……くそっ！」

目の前に横たわる無惨な死体と、写真に写った女がどう考えても同一人物には思えなかった。血色の悪い肌にボロボロの髪や服。身体中血だらけで、自衛官である厚志ですらこんな状態の人間は見た事がなかった。

警察に自首しようかと考えていると、背後から何かを引きずるような音が聞こえてきた。

慌てて振り返ると、そこには先程女に噛み付かれた男が立っていた。

「だ、大丈夫だったんです……か」

男が生きていた事に驚きつつも、喜びながら近寄ろうとする。だが、厚志は一歩踏み出して止まった。

男は首から血を流し、白濁した目と突き出した手を厚志に向け、つたない足取りで厚志に向かってくる。

その姿は、まるで先程殺した女と同じであった。さらに、男がやってきた道からも同じような姿と歩き方でやってくる人影が見えた。

「な、何なんだこれ！！」

ただ、逃げた。いくら有事のために日頃訓練をしている自衛官でも、実際に人の死に直面する事は少ない。ましてや、映画でしか見た事の無い、残虐な死を目の前で見せられた上、さらに自らの手で人を殺した。それだけで許容量を超えているにも関わらず、死んだはずの男が起き上がり、同じような奴らが現れたのだ、逃げたくもなる。

（何だあれ、意味が分からない！）

事実に思考が追い付かず、厚志はただ混乱していた。

（あれじゃあ、まるでヤスに見せられたB級映画じゃないか！！）

友人に見せられた映画に似たようなシーンがあるのを思い出す。

それは、まさに今見た状況そのままのシーンがある映画だった。

映画の内容はこうだ。理由は分からないが死体が生き返り、生者を喰らい始める。喰われた生者は生ける死体――ゾンビとなって

生者を喰らい始める。という一般的なゾンビ映画だった。
（……ん？　映画でしか見た事がない？）
立ち止まり、思案する。よくよく思い出すと、襲い掛かった女は血だらけだった。そう、まるで女も襲われた男と同じように噛み付かれたようだった。泥酔したような歩き方もまさに、ゾンビそのものだった。
今更ながら辺りを見回すと、火事を起こしたのか煙が上がっている。映画通りの状況なら町中で先程のような事が起こっているのだろう。
俄かには信じ難い状況だった。
自衛官である厚志がまずしなければならない判断は、一斉暴動である。人が人を襲うのなら、暴動と考えるのが合理的である。人を喰うなどという状況を見て、常識で考えるなら麻薬などによる錯乱である。でなければ、そういう事を説法している新興宗教だ。
（普通ならそう考える……でも、俺は実際に見た）
散々友人にゾンビ映画を見せられたため、むしろすんなりと受け入れられた。厚志はいやに、冷静になった自分に戸惑いつつも、これからどうするか考えようとする。
「いやあああああっ！！」
「っ！？」
厚志の思案を断ち切るように悲鳴が轟いた。すぐ近くである。
バットを握り直し走り出す。がむしゃらに逃げたためどこにいるのか分からなかったが、声のした方向にとりあえず走る。
市街地の入り組んだ道を数回曲がると――いた。
「来ないで、来ないでよおっ！」
行き止まりに追い詰められ、へたり込んでいる制服姿の少女がいた。その目の前には、傷だらけの身体を血に染め、少女を求め両手を前に突き出した男。
「おいあんた何してるんだ！」
いくら先程ゾンビではないか、と自ら考えたとしてもいきなり頭

を叩き割ったりは出来ない。一応声をかけてみた。
「何してんのよ！　どう見たって話聞くようには見えないでしょ！？」
「ああもう、分かったよ！」
少女の切羽詰まった声に背中を押され、急いで男に駆け寄りバットを振り下ろす。厚志はセオリー通り頭を狙ったつもりだったが、微妙に外れ、肩にめり込む。
やはり人型をしているため躊躇してしまったのだ。しかも、ゾンビというのはまだ仮説の域を出ない。あくまで、同じような場面を映画で見た、というだけなのだ。厚志の人道的な部分がどうしても躊躇いを生む。
それが命取りだった。
気付いた瞬間には既に遅く、バットを掴まれ引き寄せられる。慌てて身体を捻るが、男に馬乗りになられる形で倒れ込んでしまう。
（やばいっ！？）
血に濡れた口を大きく開け、噛み付こうとしていた男の顔を両手で押さえる。ギリギリの所で噛まれる事は防いだが、予想以上の力で厚志に噛み付かんと口を動かしてくる。
（何だこの力！？）
先程の女――青木文恵の時はすぐに巴投げを認め分からなかったが、明らかに鍛えている自衛官以上の力があった。
徐々に男の顔が近付いてくる。吐き気を催す程の濃厚な腐臭と血の臭いに厚志は顔をしかめる。同時に人ではないのだと認識する。人はこんな臭いを放つ事はない。もし放つとすれば死体だけだ。
「くっそっ！！」
もう腕が限界だった。もう後数センチで厚志の首は噛み切られてしまう。
いくら日頃から鍛練している自衛官であっても、死してリミッターの外れた力で襲ってくる死体相手に何時までも耐えられるほどは鍛えてはいない。そもそもそんな事態を想定していないのだ。

ふと、視界を先ほど助けた少女の方に向ける。少女はすでにおらず、襲い掛かられた時に落としたバットも見当たらなかった。恐らく少女が持って行ったのだろう。

（逃げた……か、まあ仕方ないか）

そんな事を考えながら、厚志は――少なくともこの瞬間には――救えた事に安堵した。

（俺もここまでか……）

諦めかけたその時、突然男が目を見開き、掴んでいた衝撃に揺れた。そのまま力が抜けたようにぴくりとも動かなくなる。

「……何が起きたんだ？」

「私が……っ、助けたから……に、決まってるじゃない！」

厚志の呟きに荒い息遣いと共に声が答える。

動かなくなった男の死体――元から死体だったようだが――を退けながら立ち上がる。

声の主はバットを杖代わりに立つ少女だった。少女は、涙を流し、幼さの残る可愛らしい顔も少しウェーブのかかった茶の髪もぐしゃぐしゃにして、それでも気丈に振る舞うためか表情を引き締めていた。

見ればあちこち汚れている。制服らしいブレザーやスカートは血や砂で、膝にはこけたのか擦り剥いた跡があった。今は厚志から見ても分かるくらいに震えてていた。

「すまない、助かった」

「おあいこよ……私も一度逃げたもん」

「……そうか、まあ最終的には助けてくれたんだ、気にするな」

頭一つほど違う少女の頭に手を乗せ、撫でる。厚志は、何故か分からないが、そうしなければならないような気がした。

「……っ、ふぅっ、うわあああああ！！」

優しくされた事によるものか、今まで張り詰めていた緊張のせいか分からないが、少女が厚志に抱き着き、泣き出した。かなり大きな声だったのでまずいかと思ったが、もっと大きな音が市内の方で

聞こえているためか、ゾンビは現れなかった。
「……」
厚志はただ、少女が泣き止むまで背中を摩る事しか出来なかった。

第2章　新たな絆（前書き）

※２０１１年６月１９日　誤字脱字修正しました。

第2章　新たな絆

しばらく泣いた後、疲れたのか少女は少し離れた民家の塀にもたれて休んでいた。やはり死体がある傍では易々とはくつろげない。しかも、自分が殺した相手ともなれば尚更である。

「私は相良美樹。近くの高校に通う花の女子高生だよ。ちなみに学年は二年生」

「俺は藤堂厚志。近くの駐屯地に勤務してる自衛官だ」

少女――美樹が、へーと物珍しそうに厚志を眺める。

「何だ？」

「んー、自衛隊の割に弱いんだなって」

「……君、助けてもらっといてよく言えるね」

ため息混じりに肩を竦める。だが、美樹は気にした様子も無い。

「最終的に助けたのは私だもーん」

「ぐっ、それを言われたらそうなんだが……」

事実、後一秒でも美樹がバットを振り下ろすのが遅ければ厚志はこうして話など出来なかったはずだ。それを思い出し、背筋に寒気が走る。

もはや見えない場所に移動しているため、死体はないが、ふとした瞬間に思い出しそうな経験なのは間違いなかった。

「ところでさが――」

「美樹」

「は？」

「美・樹。私を苗字で呼ばないで」

「あ、ああ分かった」

いきなりの剣幕にたじろぐ厚志。先程まで軽い感じで話していた美樹の鬼気迫るような声に驚く。出会って間もないが、まさかこんな声を出すとは思わなかったのだ。

「わ、わかった。美樹。俺も厚志でいいぞ」

「ん、ありがと厚志さん」
「……」
「ん？　どうかした？」
名前で呼ばれた厚志が黙り込んだため、首を傾げる美樹。
「……いや、年上にタメ口使うわりにさん付けで呼ぶのかよ、って考えてね」
「別にいいでしょっ」
頬を膨らませてむくれる美樹を厚志は複雑な笑みを浮かべて見ていた。
「それで、君はこれからどうするんだ？」
「どうするも何も、私は友達の家に行く途中だったの、なのにあんな変なのがたくさんいたから回り道して行こうとしてただけよ」
「その途中で俺が助けたわけか」
「私が助けたんだけどね」
「……やたら引きずるなあ」
意地悪な笑みを浮かべる美樹に嘆息する。その笑みはからかっているものだったが、不思議と嫌な気持ちにはならなかった。
「それじゃ、早くその友達の家に行かなきゃな」
「え？　着いて来てくれるの？」
「当たり前だ、今は勤務中じゃないが、一応自衛官だからな国民を守る義務くらいはある」
「ふーん」
厚志は肩を竦め、言う。美樹は気の無い返事を返したが、厚志の手を取り歩き始めた。
「とりあえず急ごう。いつまたあいつらが来るかわからないし」
「『あいつら』？」
年下の美樹に手を引かれるのも癪なので、隣を歩く。高校二年だと言っていたから十六、七だろう。厚志とは七、八歳離れている事になる。さすがに年下でも女性と手を繋いでいるという事実に気恥ずかしさもあり手を離そうとするが、美樹は離そうとしなかった。

「さっきの男みたいなゾンビの事」
「ゾンビ……ねえ」
「襲われといてよく信じないわね。ほら、よく映画にあるでしょウィルスとかに感染した死体とかが歩き出して人を襲うの。私は……見たわ、人が喰われるとこ……」
その場面を思い出したのか、隣を歩く美樹が身震いする。握った手にも力が込められた。
確かに厚志も人が喰われる場面はつい先程目撃した。だが、それはあくまで仮設に過ぎず、厚志もはいそうですかとは受け入れられるものではない。
「確かにそういう場面は見たが、いきなりゾンビだと考えるのは荒唐無稽過ぎないか？」
厚志自身、先程考えていたようにゾンビであると言えばしっくり来るのは確かだ。だが、やはり常識が邪魔をして否定したくなる。
「それは……そうだけど」
「……いや、いきなり否定してすまん。俺も友人からそういう映画を見せられてるからそうかもしれない、とは思うが……とりあえずゾンビじゃなくて『感染者』って呼ばないか？　そっちの方がなんかしっくりくる」
しゅんとしょげてしまった美樹をフォローするように言う厚志。だからといっていきなりゾンビ――いや、感染者が発生したという事を受け入れられない。
「って、そういえば美樹は携帯持ってないのか？」
「あー、鞄に入ってたけどごたごたで無くしちゃった。そういう厚志さんは持ってないの？」
「俺のか？　俺のは今日天に召された」
「何それ？」
眉をひそめる美樹を放置して、思考する。
（連絡手段は無し、公衆電話を使おうにも金は無い。美樹も鞄が無いから無理だろうな。ならやはり――）

「……さん、厚志さん！」
厚志が、どうにか警察なり駐屯地なりに連絡する方法を模索している途中で美樹に強く手を引かれ、遮られる。
「ん？　なん――――っ！？」
美樹に何があったのか聞く前に気付いた。
ずりずりと何かを引きずるような音が聞こえるのだ。見れば、厚志達が向かおうとしている道の先に先程の男と同じように身体中血や噛み傷でボロボロになった人間がいた。それも一人や二人では無い。ざっと見た限り、数十人はいる。
老若男女問わず皆一様に一心不乱にとある家の塀に群がっていた。家は、周りを容易には登れそうに無い高い塀に囲まれ、そのお陰で侵入を防いでいるようだった。かなり大きな家である。
「あれ、香奈ん家だ」
「……あそこに行くのか？」
厚志も少し及び腰になりながら聞く。あの中に突っ込んでいくのは自殺行為である。重火器でもあれば話は別だが、生憎今厚志達が持っている武器はバットのみである。さすがにあの数を相手に出来る装備では無い。
「でも、中にはいないみたいだから無事かも……」
「って言ってもなあ」
美樹も自信が無いのか、その言葉は尻窄みになっている。
厚志は頭を掻きながら、考えたが、やはり名案は浮かばない。
「あっ、あそこ伝っていけないかな？」
「……んー」
美樹が指差す方を見て渋った。そこにあるのは隣の民家から延びた屋根である。だが、そこに行くためには中を通るか、どこかしらから上る必要があった。
上っている間に襲われては元も子も無い。そんなリスクを考え、厚志は少し渋った。
「かなり危ういが……」

「……だよね」
「ま、それが一番堅実な案か。急がないと奴らこっちに気付いたみたいだし」
美樹が笑顔になるが、すぐに引き攣らせた。
何に反応しているのか分からないが、厚志達に近かった感染者達が何かを求めるように手を前に突き出し向かって来ていた。まだ数体しか向かって来ていないが、すぐに他の感染者達も気付いて群がってくるはずだ。
「急ぐぞ！」
「うんっ」
恐怖から強く握られた手を握り返し、厚志は民家に侵入した。
一応玄関のドアノブを捻るが、やはり開いていなかった。他に登れる場所は無いかと探したが、めぼしい場所は見当たらない。
もう門を潜って来ている血だらけの者達を見て、厚志は意を決した。
バットを振り上げ、庭に面した天井から床までである大きな窓を叩き割る。こんな時に雨戸も出さず、補強もされていないため、誰もいないと決め付けて割ったのだ。
「うわ……」
「……何だよ」
「厚志さんってほんとに自衛隊？」
「緊急事態だ。こっちには守るべき国民がいるだから仕方がないのさ」
言い訳のように呟くと渋い顔の美樹を引っ張り、急いで二階に向かう。
外から見た隣に延びる屋根がある部屋を探す。外から見たのと中から捜すのでは勝手が違い、少し迷ったがようやく見つけた。
鍵を開け、窓から屋根に出る。すでに先程の破壊音を聞き付けたらしい感染者達がアイドルに殺到するファンのように厚志達がいる家の庭に入って来ていた。

屋根は、香奈の家の方が塀ギリギリまで迫り出し、厚志達の方は逆に塀から離れている。つまり、着地し損ねるとこちら側の庭に落ちるという事になる。一度落ちれば確実に奴らの餌食になるだろう。

「先に行くぞ」

「え？　やだ、置いていかないでよ！」

厚志の言葉に置いていかれると思ったのか美樹が追い縋る。今にも泣きそうな美樹はわざとなのか、厚志を落とさんばかりの勢いだった。

「危ないな！　違う、向こうで受け止めなきゃお前が落ちるかもしれないからだ。俺は確実に飛べるが美樹は分からないから、それが確実に助かる方法なんだよ」

「で、でも……」

厚志は、尚も渋る美樹の頭に手を置いた。

「大丈夫だ、俺を信じろ」

「……っ」

「ま、今日会ったばかりの奴を信じろとか無理かもしれないがな」

苦笑しながら頭を撫でる。途端に美樹が吹き出した。

「何よそれ、締まらないなぁ……ちょっとかっこよかったのに」

「ん？　何て？」

後半が聞き取れず、聞き返したが美樹は首を振って何でもない、と答えた。

「んじゃ、行くぞ。もう時間が無い」

階段の方から呻き声が聞こえてくる。先程開けた――というよりは割った――窓から入って来たのだろう。厚志達がいる屋根の下は血だらけの者達がひしめき合っていた。塀と家の隙間にアイドルのライブでも開くのかというくらい集まって手を伸ばしている。

厚志はそちらを一瞥すると、助走をつけて飛んだ。屋根と屋根との幅は二メートルほどしかないため飛ぶのに支障はないが、瓦から瓦に飛び移るためなかなか着地がし辛い。

「よっと、美樹早く来い！」

「わ、わかった……っ」
美樹がかなり危なげに飛ぶ。案の定、着地を考えていなかったのか、瓦を踏み外した。
「馬鹿！！」
慌てて手を伸ばし、すんでの所で美樹の手を掴む。いくら塀を挟んでいるとは言え、いつ家の中から奴らが出て来るとも限らないため、急いで引き上げる。
「ったく、これくらい飛んでくれよ……」
「……ごめん」
引き上げた勢いで美樹を抱きしめるような形になっていたが、厚志は何となく離す気に離れなかった。一歩間違えば奴らの中に落ち、喰われていた。それを考えるともう少しだけ美樹が生きている実感を得たかったのだ。
「あの～」
妙に間延びした声が厚志の耳に届く。辺りを見回すが、それらしき人物は見当たらない。
「あ、後ろですよ」
「……うおっ！？」
いきなり肩を叩かれ、身体を跳ねさせる。美樹を抱きしめているため、顔だけで確認する。
そこには今まで張り詰めてきた緊張の糸が緩んでしまうほどの柔らかい笑みを浮かべた少女がいた。
「早く入っちゃってください。下手に来られるとまずいですし」
雨戸を開け、戸惑う様子も無く促してくる。厚志は底抜けな好意に戸惑いながら、美樹から離れ、落ちないように手を貸して室内に入った。
「……美樹、大丈夫か？」
ふらふらする美樹を案じて厚志が声をかける。
「へ？　あ、大丈夫、大丈夫！」
美樹は耳まで真っ赤に染め、両手を激しく振りながら言う。挙動

不振な美樹に心配した厚志がさらに問い掛ける前に少女が割り込んだ。
「あれ？　美樹ちゃん？」
「うぇっ！？　……香奈っ！」
少女の問い掛けに美樹は肩を震わせるが、たっぷり数秒後突然抱き着いた。
「香奈～無事でよかった～！」
「わっ、ちょっと、美樹ちゃんっ」
ほとんど倒れ込む勢いだったため、支えきれなかった少女――――香奈がひっくり返る。だが、美樹はそんな事などお構いなしに頬を擦り付ける。
「あー、感動の再会中すまんが、彼女を紹介してくれないか？」
「なっ！？　香奈は渡しませんよ！！」
がばっ、っ起き上がると香奈を庇うように立ちはだかる美樹。
「ど、どうしてもと言うなら、わ、私を……」
「いや、意味わからないから」
「あうっ」
顔を真っ赤にして混乱する美樹のおでこを軽く弾く。
美樹はようやく正気に戻ったのか、自分の言動を思い出し、さらに顔を赤くしていた。悶えている美樹を放置して、厚志は香奈に向き直った。
「君が香奈ちゃんでいいのかな？　俺は藤堂厚志。これでも自衛官だ。よろしく」
「あ、私は佐草香奈です。美樹ちゃんと同じ高校に通ってます」
厚志が差し出した手を律義にお辞儀しながら握る香奈。しかも照れたのか、はにかむおまけ付きである。一々和む挙動をする少女であった。
「わ、私は相良美樹！」
「……いや、知ってるから」
割り込むようにして二人の握手を解いた美樹が叫ぶ。厚志もどう

対応していいか分からず苦笑いしか浮かばない。
「あの、お二人は恋人なのですか？」
「は？」
「うぇっ！？」
香奈が首を傾げながら言った言葉に、厚志と美樹が同時に驚く。
「えっ？　あっ、そ、そんなわけな、ない！」
「ああ、ただの行きずりの関係だ」
「はぁ？　何よそれ！！」
ある意味間違っていないのだが、美樹が過剰に反応するため厚志はからかってみた。
「美樹ちゃん、不純異性交遊は駄目ですよ」
「か、香奈！？」
香奈はどうやら真面目に受け取ったらしく、腰に手を当てて注意している。美樹が親友な言葉に、あわあわと涙目になりながら、違うよ、と弁明している。
（からかうのはこれくらいにするか）
美樹の反応の良さについ悪戯心を出してしまったが、さすがに可哀相になり訂正する。
「彼女をたまたま助けらたから、その流れでここに来ただけだ」
「……助けたのは私だけどね」
ぼそりと呟く美樹を無視して話を進める。
「それで、ここは安全なのか？　出来れば今起きている事が知りたい……テレビを見せてもらってもいいか？」
「あ、はいこの家は安全ですよ。テレビは居間にあるので、こちらへどうぞ」
香奈に着いて部屋を出る。美樹も唇を尖らせながら渋々と言った様子で着いてくる。
今更ながら部屋を見ると、明らかに香奈の部屋のようであった。全体的に淡いピンクで彩られ、ぬいぐるみや文庫が目立つ。しかし、今は天戸が閉じられ、部屋は暗くどこか物悲しいものがあった。外

から聞こえる呻き声がより物悲しさを引き立てる。
「どうかしましたか？」
「……いや、何でもない」
いつの間にか立ち止まっていた。不思議そうに首を傾げる香奈に答え、一階に向かった。
案内された居間には三人の人間がいた。世話しなく動く香奈の母親らしき妙齢の女性。ソファに寝転んだ青年に寄り添うように座る若い女性。母親以外の二人は香奈の兄弟というわけではないようだった。恐らく厚志達と同じく逃げ込んだ者達だろう。
厚志は母親らしい女性が持っているものを見て慌てて青年を見る。青年は肩から血を流し、呻いていた。それが噛まれたものなのか、単なる怪我かは分からないが、あまりいい状態とは言えない。
母親が真新しいタオルを持って青年の患部を押さえていた赤く染まったタオルと交換する。だが、血は一向に止まる気配はない。
「あ、厚志さん……これまずいんじゃ」
美樹が小声で言う。どうやら美樹も知っているらしい。
確かにまずい状況に違いない。外にいる感染者が本当に映画などで見るゾンビならば、この青年はいずれ奴ら仲間入りするはずだ。ここに立て篭もるつもりなら危険要素である。
「止血するなら患部を押さえないといけません。血を吸わせるだけでは意味がないです」
「厚志さん！？」
驚く美樹を余所に手当を開始する。
まず、ゴム手袋を貰い、血に触れないようにする。次にタオルを取ると傷口を確認した。
確かに噛み切ろうとしたような歯型がそこにはあった。すぐに患部が見えなくなるほどの血が溢れ出す。
「厚志さん……」
不安そうに美樹が近付いてくる。
厚志はとりあえず無視して患部を新しいタオルで押さえる。傷口

が左肩であり、心臓からも近いため出血量も多い。だが、位置が位置のため縛って血流を一時的に止めるわけにもいかない。

とりあえずタオルを多めに患部に押し当て、その上から包帯を巻いていく。一時凌ぎにしかならないが何もやらないよりはマシだった。

「後はベッドに寝かせておきましょう、ここよりは休まるはずです」

「……すま……ない」

謝る青年に首を振り、怪我をしてない方の肩に手を回し、立ち上がらせる。

「寝室は何処ですか？」

「あ……こ、こっちです」

厚志の行動を呆然と見ていた香奈が案内する。

「あ、お母さんは床やソファの血を拭いて、服も変えてください」

「え、ええ」

同じく呆然としていた母親に指示すると厚志は香奈に案内されて二階にある寝室に向かった。後ろから若い女性も着いてくる。

案内された寝室のベッドに青年を寝かせる。

「一体何があったんですか？」

酷とは思いつつも状況の把握のため少しでも情報が欲しかった厚志は聞いた。

「……彼女……英子と……今日は……ゴホッ」

「駄目！　和臣は喋らないで！」

咽せて血を吐いた青年――和臣の口を慌ててタオルで吹きつつ女性が代わりに話し始めた。

「彼は山田和臣。私は今野英子といいます」

厚志は、とりあえず名乗った女性――英子に自己紹介しつつ先を促す。

「今日はたまたま二人とも休みが取れたから出掛けようって事になって……アパートを出たらフラフラしてる人がいたんです……私は近寄らないほうがいいって言ったのに……和臣が近付いていっ

たらいきなり噛み付いてきたんです……」
「わかりました。とりあえず今は和臣さんは休ませておきましょう。あなたも食事でも摂らないと倒れてしまいますよ？」
「いいです。私は和臣と一緒にいます」
「ですが、寝かせた方が体力も戻りますし、あなたも疲れているでしょう？」
英子に居間に戻るよう言う。だが、英子は頑として和臣の傍を離れないと言う。
「嫌、絶対和臣から離れない！」
「英……子……」
厚志は渋ったが、譲る気は無いのか、和臣にしがみつく英子を見て肩を竦めた。
「……分かりました。何かあったらすぐ呼んでください」
努めて笑顔を浮かべ、部屋を出た。先に廊下に出ていた香奈が首を傾げていた。
「あの……何で二人を離そうとしたんですか？」
「……意外と鋭いね」
肩を竦めてため息を吐く。
厚志は和臣を隔離しようとしたのだ。下手に予想が当たって彼が外の奴らの仲間入りしてしまえば、美樹や香奈達に被害が出てしまう。それだけは避けたかったのだ。
「とりあえず着替えをもらえるかな？　その辺りの事を話したいし」
「あ、はい。こっちに父の着替えがまとめてありますので好きなのを着て下さい」
「……ありがとう」
案内された部屋は倉庫のような場所だった。そんな場所に服がある理由を少し思案したが、下手に掘り下げるつもりもなかったので好意に甘えた。

第3章　感染経路（前書き）

※２０１１年６月１９日　誤字脱字修正しました。

第3章　感染経路

数分後、着替えと簡単に血を洗い流した厚志は居間に皆を集め、簡単に自己紹介した。もちろん怪我人の和臣と彼に付き添っている英子はいない。

香奈の母親――香織というらしい――も着替えを済ませ、血もあらかた拭き取られていた。

「とりあえず、現状分かっている事は外にいるのは人ではない事、それだけです」

一応年齢的には香織が一番上なのだが、自衛官という事もあり、厚志がこの場を仕切っていた。

今分かっている事を話してはいるが、まだ情報は殆ど無い。分かっている事といえば、奴らが人ではない事。そして、厚志の力で殴っても怯まなず、異常に力が強い事位である。

「はい、頭叩いたらやっつけられるのが抜けてるよ」

美樹が何故か手を挙げて意見を言う。

「ああ、そうだったな。まだ試してないので分かりませんが、どうやら頭部への攻撃のみ有効のようです。これは映画などと同じですね」

そこで一拍間を置く。

「あと、これは未確認情報ですが、外のゾンビ――感染者と呼ぶ事にしますが、感染者に噛まれたり引っかかれたりすれば感染者になる可能性があります。映画等と同じなら、数分から数時間で仲間入りしてしまうでしょう」

言い終えると三人の顔を見る。美樹以外の二人は苦虫を噛んだような渋い表情をしていた。やはり美樹はその手の映画を見ているらしい。抵抗なく受け入れている様子だった。

「ねえ、そこまで分かっているなら何でさっきあの人の治療をしたの？」

「それは……」
美樹の質問を一度噛み潰し、どう答えたものかと考えたが、厚志は自分に偽らない事にした。
「俺はこの壊れた世界で『人間』でありたい。人間なら怪我した人を助けるのは当然だ」
例え助からなくても、と厚志は心の中で付け足した。
美樹は厚志の答えに唖然とし、口を開けたまま固まってしまった。そのまま数秒ほど固まっていたかと思うと、ぷっと吹き出し笑い始めた。
「……何がおかしいんだよ」
「いや、厚志さんって意外に熱い人なんだなって思って！」
厚志が今更ながら自分の答えに照れて頬を少し染める。美樹はそんな厚志をお構いなしにバシバシ叩いた。
「美樹ちゃんいいなあ、藤堂さんっていい人みたいだし」
「そうみたいねえ、美樹ちゃんもいい人捕まえたじゃない！」
佐草親子がからかいなのか本音なのか分からない事を言う。
「な、なな、何を言ってるんですか！　捕まえたんじゃなくて助けただけですって！」
「……痛いって」
さらに強く叩く美樹に小さく文句を言う。顔を真っ赤にした美樹は気付いた様子もなく、叩いていた。
「ま、美樹ちゃんをからかうのはこれくらいにして、いい時間だしお昼にしましょう。こういうときだからこそ、食べないとね」
香織が思い付いたかのように言うと、タイミングよく美樹のお腹が鳴った。
恥ずかしそうにお腹を抱きしめるように隠す美樹。
「わ、私も手伝います！！」
ただでさえ真っ赤だった顔を耳まで赤くし、台所に向かう香織に着いて行った。
手持ち無沙汰になった厚志は何の気無しにテレビを点ける。

まだテレビ局は無事なのか大半の番組が放送されていた。だが、どこもニュースしかやっていない。

とりあえず、目に付いた番組で止めてみた。

何処かの病院なのか、多数の怪我人らしき人達がひしめいているロビーにレポーターが立っていた。

朝のニュースでよく見る少し童顔気味のレポーターが緊張した面持ちでレポートし始める。

『――こちら現場の九大病院ロビーです。本日未明、謎の暴動が起こり、ここ九大病院にも多数の重軽傷者が運び込まれています。既に手術室が溢れてしまっているため、ここロビーでも治療が行われている状況です！』

レポーターの後ろでは医者や看護師が忙しく動き回っている。既に医者達の服は血に染まり、マスクすらも赤く染まっていた。

その時、レポーターの後ろを今しがた運び込まれたらしい患者が担架に乗せられて運ばれていく。その首には明らかに噛み付かれた痕があった。

（映画通りならまずいぞ……）

厚志の予想通り、先ほどの患者が突然起き上がり、治療を行おうとしてた医者に噛み付いた。

『暴動は未だ続いており、負傷者は増える一方で――』

『おい、あれ見ろ！！』

突然画面に太い手が現れ、カメラマンらしき男の声が聞こえてくる。

『ちょっと、今レポート中なんだから喋っちゃ駄目でしょ！！』

『いや、それ所じゃないって！　後ろ後ろ！！』

レポートを邪魔され苛立った様子のレポーターを無視するようにカメラマンが後ろを指差す。

ようやく惨劇に気付いたらしい医者や負傷者達から悲鳴が上がる。

ロビーは一早く逃げようとする者達で大混乱に陥った。

『何？　ちょっと、何よあれ！！』

事態に気付いたレポーターが口に手を当てて後退る。
その頃には医者を食い終えたのか、その患者はレポーター達の近くにいる動けない負傷者に襲い掛かっていた。
『た、助け……ぎゃあああああああ！！』
襲われた負傷者がレポーターに手を伸ばすが、首筋に喰い付かれ血しぶきを上げる。それがカメラのレンズに飛び散り、画面半分近くが血の赤に埋め付くされる。
『おい、逃げるぞ！！』
『え、ええ！！』
カメラマンに手を引かれ、逃げようとした瞬間、先程まで倒れていた最初に襲われた医者が起き上がった。
『おいおい、マジかよ！！』
『え？　い、いやあああああっ！！』
医者は見えているのか分からない白く濁った目をレポーターに向けると襲い掛かった。
『ちくしょう！　あい――――』
そこで映像が切れ、『しばらくお待ちください』と書かれた、何処かの自然が映し出された映像が流れ始める。
「……っ！」
香奈が耐えられなくなったのか、台所に向かって走っていった。
厚志は重い空気の中、まだ何か情報を得られないかと思いテレビを見続けた。
すると画面が変わり、椅子に座ったキャスターらしき男性が映し出された。
『どうやら、事故があった模様です。新しい情報が入り次第、お伝えしたいと思います。続いては暴動に対しての総理からの――――』
少し動揺したような仕草は見せたが、キャスターはまるで何事も無かったかのようにニュースを続け始めた。
これ以上得られるものは無いと思い、厚志はテレビの電源を切る。
「やはり……か」

厚志はため息混じりに肩を落とした。そして、これから行わなければならない行動を頭に浮かべ、肩を落とした。

「あの、何かあったの？　悲鳴みたいなのが聞こえたし、香奈はなんか怯えてるし」

「んー、予想が大当たりだったって事かな」

「……分かるような分からないような答えね」

美樹が渋い顔をして厚志を見つめる。厚志は具体的に答えていいか分からず、苦笑するしかなかった。

これで良くない予想ばかりが当たっている状況になる。厚志自身見た目には出さないようにしているが、動揺していた。

外にいる感染者は文字通り『ゾンビ』なのだろう。噛まれればやがて死に、感染者になる。最悪引っかかれただけでも仲間入りするかもしれない。

分かっている有効な攻撃手段は、美樹が倒した一体目と同じように頭を攻撃する事だろう。もしかすれば、ゲームのように一定以上のダメージを与えれば倒す事が出来るかもしれないが、現状それを試す手立ては無い。

美樹の力でも倒せる事から耐久力は無いに等しいようだが、囲まれれば一巻の終わりである。

現在、佐草家の高い塀に守られているためここは無事だが、いつ食料が切れたり、あまりの数に耐え切れず崩壊したりするか分からない。しかも、あの青年が感染者化する可能性が限りなく高い事を考慮に入れなければならない。

「……問題は山済みだな」

「何はともあれ、今は腹ごしらえしましょう。難しい話はそれからでいいでしょう？」

香織が有り合わせで作ったらしい野菜炒めを持って現れる。大皿に盛られたそれは豪快で、男料理を思わせた。

厚志は先ほど見た光景を思い出し、吐き気を覚える。だが、香織は柔らかく微笑み、告げた。

「これくらい食べるでしょう？」
「……まあ、四人いれば食べれると思いますが……」
こんな状況にもかかわらずのほほんとしている香織に呆れ――内心救われ――ながら、食事の準備を手伝いために立ち上がる。しかし、美樹によってコップや箸などは運ばれていたためほとんどする事が無く、やった事といえばご飯を装った人数分の茶碗を運んだくらいである。
「たまの休日にいきなり手伝いする気になった父親みたい」
「……うっさいな」
美樹にそんな事を言われながらも、厚志がご飯を配り終える頃には全員――といっても、和臣と英子はいないが――席に着いていた。
お決まりの挨拶をして食事をはじめる。よくよく考えれば、昨日の夜から食べていないのでほぼ半日ぶりの食事である。意外とコチュジャンや山椒などを入れ、香り高く仕上がっている野菜炒めは胸に染みた。
「そういえば、聞き忘れてましたが上の二人とはどういう関係なんですか？」
「え？　ああ、あの二人は近所に住んでいる子達なのよ。あまり関わりはなかったけど、怪我してる所を見つけて保護したの」
そういえば大丈夫かしら、と顎に手を当てて二人がいるであろう二階を見る香織。その顔には本気で心配する感情が浮かんでいた。
厚志は言い出し難かったが、意を決して声を出した。
「そうなんですか、あの申し上げ難いん――」
「うわっ！？」
「わっ！？　美樹ちゃん！？」
美樹の声と共に何かが倒れる音がした。同時に香奈が驚き、飛び上がる。
ぼうっとしてたのか、どうやらお茶を零してしまったらしい。
「何やってんだか……」
厚志が呆れて、香奈に出された布巾で机を拭く美樹を見る。幸い

にも服にはかからなかったらしく、机だけを拭いている。
「うう、ごめんなさい……」
「気にしないで、服汚れてない？」
香奈がまるで母親のように甲斐甲斐しく美樹の服を確認する。明らかに同い年には見えなかった。
「っと、それより先程の話なんですが……あれ？」
特に問題ないことを確認して、香織に視線を戻したが、そこに彼女はいなかった。布巾でも取りに行ったのかと思っていると、二階から悲鳴が聞こえてきた。
「っ！？　まずい！！　美樹、香奈ちゃんここでじっとしてて！！」
慌ててバットを掴み、二階に向かう。
先程の悲鳴が香織のものか英子のものか分からないが、明らかに何かあった事は間違いなかった。恐らく予感が正しければ和臣が感染者になったのだろう。
あの傷では助かるわけが無かった上、和臣は噛まれていた。先程のニュースで確信はしていたものの、厚志はまだ人間である彼を『殺す』という考えに至る事が出来なかった。
その光景を見て、厚志は後悔した。
「……っ」
開け放たれた寝室のドア。血に塗れた室内。既に殺していたか、首を噛み切られ痙攣する英子の姿があった。ベッドの上には口元を血に染め、まるで涎のように垂れ流している和臣の姿があった。
香織は何とか抵抗したのか、まだ腕に噛み付かれただけのようだ。だが、今この世界に蔓延しているモノには噛み付かれただけでも感染してしまう。
「くそ！！」
厚志は自らの愚かさに悪態を吐くと、和臣に向かって走った。これ以上被害を出すわけにはいかない。
「うおおおおお！！」
つい先程手当てし、会話した相手にバットを振りかざし、叩き込

む。
　ゾンビになって知能が低下したためか、やわらかいベッドの上でバランスが取れず、ふらふらしてた和臣の脳天にあっさりとバットは吸い込まれた。
　スイカを叩き割ったような感触が厚志の腕に伝わってくる。嫌悪感を覚えつつも、そこで安心せず一度距離を取る。
　しばらく待ってみたが、和臣――だったものはピクリとも動かなかった。
「くそっ」
　もう一度悪態を吐くと英子の頭にもバットを叩き込む。噛まれた和臣が感染者になったのだ、その彼に噛まれて死んだ英子もまた感染者になる事は必至である。
　そして、和臣に噛まれた香織もまた感染者になるはずだった。
「藤堂さん……ありがとうございました」
「いえ……」
　どうやって声をかけようか迷っていると、香織の方から声をかけてくれた。
「ご飯を持ってきたんだけど返事が無かったので、ドアを開けたら、いきなり……」
「すいません、こうなる事は分かってたのに和臣さんが噛まれていたのを伝えなかったばかりに……」
　悔しさでバットを握り締める。今はまだ死に至っていないため会話出来ているが、いずれ香織も感染者になる事は避けられない。
　その事実をどう伝えていいか迷っていると香織が何もかも分かったような笑みを浮かべて話し始めた。
「分かってます、私もああなっちゃうんですよね？　『噛まれたり引っかかれたりすれば感染者になる可能性がある』……でしょう？」
「……っ！」
「いいんです。藤堂さん――――」
　香織が何を言おうとしている厚志には分かった。聞きたくは無か

ったが、止めるわけにもいかず、ただ聞くしか出来なかった。
「私を人間のまま死なせてください」
この事態を招いたのは自分だ。他の誰でもない、一番早くにその情報を仕入れたにもかかわらず、周りに流されて伝えなかった自分の落ち度なのである。
「……わかり、ました」
血が出るほど歯を噛み締め、俯きながら厚志は答えた。そんな事を言わせてしまう状況に追い込んだ自分を責めた。
（俺は、また守れないのか……！）
自分の無能さに絶望し、厚志は香織を送った後、死のうと考え始めた。目の前の女性も助けられない自分が下にいる二人も守れる訳が無いのだ。美樹達も一緒に送ろうとさえ思ってしまう。
そんな絶望に飲まれつつあった厚志に香織が話しかけた。
「あの……最後にわがままを言っていいですか」
「はい、いくらでもどうぞ」
「うちの娘と、美樹ちゃんを守ってやってください」
「……っ！　でも、俺はっ！」
まるで厚志の考えている事を見抜いたかのように香織が言った。条件反射のように反論しかける厚志。
「大丈夫です。あなたなら守れる」
「目の前の人すら救えない自分にですか？」
「ええ、今日初めて会ったけど、分かるわ……見ず知らずの美樹ちゃんをここまでちゃんと連れてきてくれたんでしょう？」
「それは……自衛官だからですよ……」
消え入りそうな声で答える。だが、香織は頑として引く気は無いのか、続ける。
「違います。あなただから出来たんですよ。いくら自衛隊の人でも、誰でも出来ることではないです」
「……」
「偉そうな事を言ってすいません……でも、私にはもうあの子しか

いないから」
　涙を流し、頭を下げる香織。彼女だって出来るなら自分で香奈を守りたいはずである。だが、もう出来ないからこそ、死の恐怖よりも先に厚志に頼んでいるのである。
（そうだ……何を弱気になっているんだ。この人だって香奈ちゃんを守りたいはずだ。俺だけが守れなかったわけじゃないんだ……）
　香織の本心を理解し、厚志は気を引き締め、彼女を真っ直ぐ見た。
「分かりました。俺が責任もって守り抜きます」
「……ありがとう」
　そう言うと香織は少し虚ろになった瞳で微笑んだ。この状況で笑みを浮かべる彼女の強さに感嘆し、バットを握り締める。
「もう……意識が飛びそうなの……お願い」
「……はい」
　厚志は唇を噛み締め、バットを構えた。
「ごめん……なさい、あなたに……全部背負わせること……なってしまって」
「いえ、気にしないでください。むしろ恨んで頂いて結構です」
「ふふ、大丈夫……むしろ……感謝……し……て……」
　香織の身体から力が完全に抜ける。
　人として死なせてほしいと言われたが、生きている状態で送れるほど厚志は割り切れなかった。そのため、完全に死ぬのを待った。
　自分の弱さに呆れつつ、厚志は香織が望まない目覚めをする前にバットを振り下ろした。
　再び手に伝わる嫌な感触に眉を寄せる。何とかある程度原形を留めた香織の遺体に近付き、目を閉じようとした。
「え？　嘘……い、いやあああああああ！？」
「っ！？　香奈ちゃん！？　待っててくれって言ったのに！」
　いつの間にか厚志の後ろには香奈と美樹がいた。美樹は何とか声を出すのをこらえていたようだが、香奈は悲鳴を上げ、母親の遺体に近付こうとした。

厚志はそれを止めた。大丈夫だとは思うが、当たり所が悪く感染者になって襲い掛かられては香織とした約束が守れなくなってしまう。残酷とは思いつつも暴れる香奈を止めた。

「何で、何で何で何で何で何で！？　離してよ！　この人殺し！！」

「……っ」

厚志は香奈に頬を叩かれたが、離さない。下手に血に触れて、感染しては元も子もないからだ。

「離して、離してよ！！　お母さん！！」

涙を流し、顔をぐしゃぐしゃにして叫ぶ香奈。見ていられなくなり、厚志は腹に一撃を入れて気絶させた。このままでは心が折れてしまうからだ。

ぐったりとした香奈を彼女の部屋に連れて行き、ベッドに寝かせた。涙を拭こうとしたが、自分の手が血に汚れていることに気付き、何もせず部屋を出た。

「……噛まれたんだ」

「……ああ」

外で待っていた美樹が尋ねてくる。下手に知識があるため、状況がなんとなく想像できたのだろう。香奈のように責めてくる事は無かった。

「大丈夫？」

「……ああ」

美樹が心配そうに頬に手を当てるが、頬を叩かれた痛みよりも『人殺し』と言われた方が痛かった。心にズシリの圧し掛かり、押し潰されそうになる。

「……とりあえず、着替えよう」

「……その前に、あの三人をあのままにしておけない」

厚志は重たくなった身体を引きずり、自らが止めを刺した和臣と英子の遺体を彼が寝ていた部屋に並べていく。もちろん、人と同じようにベッドに寝かせて、だ。

「なあ、香織さんの部屋はどこだ？」

「こっちだよ」
最後に香織の遺体を抱き上げ、彼女の部屋のベッドに寝かせる。
さすがに血に塗れた服までは変えられなかったが、それでも廊下に放置するよりはマシだった。
胸の前で手を組ませ、普通の遺体と同じようにする。綺麗なタオルで目立った血を拭い、綺麗にする。頭だけはどうしようもないので、新しい白いタオルで覆った。他の二人も同じようにしていく。
「これくらいしか出来いないんだ……すまない」
「……」
美樹は厚志の行為を何も言わず手伝った。最後に三人それぞれに手を合わせ、黙祷する。
自らの不甲斐無さと、これから少しでもこういう人を出さない事を胸に誓いつつ、厚志は黙祷を終えた。
そこに居続けるのが辛くなり、廊下に出る。香奈の部屋の前に行くと、壁に背を預け、ずるずると座り込んだ。
「……これから先もずっとこうやって弔っていく気？」
厚志の隣に座ると、美樹はようやく口を開いた。
「もちろんだ」
「そんなんじゃいつか死んじゃうよ」
「それでも、俺は人間でありたいから……止めない」
「……そっか」
美樹はそう言うと、厚志の頭を撫でた。
「……っ」
押さえ込もうとしていた感情が一気に浮上してくる。
「助け……たかったんだ……！」
「……うん」
「死なせたく……なかったんだ！！」
「……うん」
涙を流し、厚志は溢れ出る感情を吐露する。
美樹はただ頭を撫で、聞いていた。

「自惚れているつもりは無かった……でも、俺が伝えてれば……！」

「……厚志さんだけが悪いんじゃないよ」

「でも、俺はみんなを……守らなければならなかったんだ……！！」

涙が止まらない。余計な体力を使うわけにはいかないのだが、一度堰を切った感情は止まらなかった。

「何言ってるのよ。厚志さんはスーパーマンじゃないでしょ？」

「それでも……守りたかったんだ！！」

美樹が悪いわけではないのは分かっていたが八つ当たり気味に叫ぶ。

擁護してくれるのは嬉しいが今の厚志にそれを受け入れる余裕は無かった。

「俺は……俺は……っ！！」

「……厚志さんは気負いすぎだよ。今日は色々あったんだから、もう休んでもいいんじゃないかな？」

「……それでも……俺……はっ」

何故か分からないが、強烈な睡魔が厚志を襲う。美樹に触れている部分はじんわりと温かく、それがさらに睡魔を強め、身を委ねてしまいそうになる。

「いいから、今は休んで……それからまた私達を守って……今度は後悔しないように」

「……美……樹……」

美樹の優しい言葉に抗えず、張り詰め続けた緊張の糸が切れた厚志は眠りに落ちていった。

第４章　罪悪感と弱さ（前書き）

※２０１１年７月１０日　誤字脱字修正しました。

第４章　罪悪感と弱さ

「……つっ」

目頭に痛みを覚え、厚志は目を覚ました。景色が傾いて見えたが、どうやら床に寝ているらしく、やけに床が近い。ただ、その割には側頭部に固い感触は無く、むしろ柔らかいくらいである。

（枕か何かか？）

美樹が気を利かせてくれたのだろうと思い、その柔らかな物体に触れてみる。だが、それは明らかに枕ではなかった。

「んっ……ぅんっ」

妙に艶めかしい声が聞こえた。しかも、枕だと思ったそれは触れるとビクリと震えた。

ここまで来るとさすがに厚志も気付いた。

どうやら今、膝枕をされているらしい。確かに寝てしまった大の大人を美樹が動かせる訳が無く。また動かせたとしても寝かせられる場所は埋まっている。仕方なかったのかもしれないが、何故膝枕なのかが分からない。

一度意識するとスカートのため直に当たる生温かい肌も、その中を流れる血液の音も妙に気になってしまう。

厚志が動こうかこのままでいるか考えあぐねていると美樹に動きがあった。

寝起き特有のとろんとした表情の美樹と目が合う。

「んん……あ、厚志さん起きたんだ」

「あ、ああ。おはよう」

動揺して変な答えをしてしまう厚志。今は採光用の窓から外を見るかぎり夜である。

「うん、おはよう」

美樹は気にした様子も無く、柔らかな笑みを浮かべて答えた。

その笑みに厚志の胸がドキリと跳ねる。頬も熱くなってきたので

慌てて顔を背けた。
「よく寝れた？」
「あ、ああ……」
「そっか、よかった」
妙に大人びた雰囲気を出す美樹に戸惑いを覚える。厚志の印象では歳相応の少女だったのだが、今は母親を相手にしているような印象を受ける。
「っと、いつまでも膝借りてたら辛いよな」
「んーもうちょっとそのままでもいいよ？」
「……へ？」
まさかの答えに固まる厚志。
「なんか慌てる厚志さん可愛いしね～」
「……からかってるだろ」
「あはは、バレた？」
厚志が目線を美樹の顔に向けると、舌を出しておどけていた。
「もう起きる！」
「あーあ、残念」
勢いよく起き上がり、美樹から顔を背ける。おどけた美樹が可愛いと思い、顔が熱くなっているのを感じたからだ。気取られる訳にはいかなかった。男としても、大人としても恥ずかしかったからだ。
（意外と怖いなこいつ……）
小悪魔な一面に辟易（へきえき）しつつ、足が痺れたらしい美樹に手を貸して立ち上がらせる。
「ったく、大人をからかうなよな」
「んーまあまあ、気にしない気にしない」
「……はぁ」
肩をバシバシ叩いてくる美樹にため息しか出ない厚志。
ふと、今更思い出したかのように厚志の腹が鳴る。次いで美樹の腹も鳴った。
照れたように腹を押さえて、俯く美樹。膝枕を平然とする割には

腹が鳴るのは恥ずかしいらしい。乙女というべきなのか微妙な所である。

「そういや昼食途中だったんだよな」

「そだね、もうあれから六時間以上経ってるし」

「は！？　六時間！？」

うん、と事もなげに頷く美樹。六時間も人の頭を乗せていたのだから痺れて当たり前である。

厚志は呆れつつ、美樹の行為に好感を覚えた。もしかしたらただ誰かの体温を感じていたかっただけかもしれないが、厚志の気持ちが軽くなったのは確かだった。

「ったく、その痺れた足でキッチンに立たれて怪我されても困るから俺が作るわ」

「うぅ……お願いします……」

まだ少し痺れが残っているのか、時折足をひくつかせる美樹に手を貸してやりながら一階に向かおうとする。

その前に確認しなければならない事を思い出し、美樹を待たせて廊下の突き当たりにある出窓に向かう。

（まだ大丈夫そうだな）

塀の外に群がるゾンビ達を見て、一安心する。まだ門を壊すまでには至っていないらしく、少し軋む程度に収まっていた。ただ、ここもあまり安心できる場所ではないのは確かだ。

いつ門が壊されるか分からないし、食料の問題もある。一年持つ分の食料や水があるならともかく普通の家なら一週間分あればかなり良い方である。

むしろ問題なのは電気や水、ガスといったライフラインだ。ライフラインは人間が管理している以上、安定した供給を維持するためにはどうしても人間が必要になってくる。しかし、人が人を襲い、襲われた人がまた人を襲う。そんな鼠算式に死人が増えている今、ライフラインを維持している人間にもすぐに被害が出始めるだろう。

自衛隊は有事の際はライフラインの確保と復帰を最優先に行う。

国民の生活を維持するためだ。
だが、それでも限界は出て来るはずである。優先順位の関係で原子力発電所等はすぐに安全確保されるだろうが、動員できる人数の関係でどうしても切り捨てる物もあるはずだ。加えて自衛官とはいえあくまで人間、それが仕事だと割り切れず大切な人の元へ走る者も少なからずいるはずだ。
テレビでは情報を得られなかったが、恐らく政府高官は既に洋上空母や沖縄など感染者が来る可能性の少ない土地に避難しているはずである。ただ、それで国として『生きている』とは言えないかもしれない。
加えて、この地獄が果たして日本だけの事なのか分からない。もしかしたら世界中で起こっているかもしれない。
厚志はテレビを最後まで見なかった事を今更ながら後悔した。
「ま、あまり気にしても仕方ないか、今は目の前にいるあの子達を守るだけだ」
そんな事を独りごち、厚志はまだ階段で待っていた美樹の元へ向かった。
「どうかしたの？」
「いや、なんでもない」
不安にさせないように答えながら一階に向かう。
キッチンに行き冷蔵庫の中身を確認する。ようやく痺れが取れてきた美樹は近くの戸棚を探り、インスタントラーメンや缶詰を探す。
意外にも食品は多く、三人くらいならば一週間生き延びられる量の食材があった。ただ、インスタントラーメンはあまり食べる習慣がないのか、ストックされていなかった。ライフラインの事を考えるとあった方が助かるのだが贅沢は言えない。
厚志はなるべく消費期限の早い物から消費し、電気が無くなっても大丈夫そうな物は後に回す。
とりあえず肉ともやしを使い、簡単な炒め物を作る。ご飯は炊いてあったので、お椀によそい、居間に運ぶ。奇しくも香織の作った

物と似た物になってしまったが、材料の関係で仕方が無い。いくら量があるとは言っても計画的に使用しなければすぐ無くなってしまうからだ。

「よし、こんなものかな」

「うわー厚志さんって料理できるんだ」

「んーまあそれなりには、寮は飯出るからな、たまにしか作らないから味は保証しないぞ」

「私が作るよりは絶対マシだよ、うん」

美樹は何故か誇らしげに腕を組んで頷いた。

「……女子としてそれはどうなんだ」

「今は主婦ならぬ、主が夫と書いて主夫の時代なのだよ」

「……はあ」

「うわ、何そのため息!?」

「別に……とりあえず飯食うぞ」

厚志の大きなため息に食いついて来た美樹をいい加減になだめ、テーブルにつく。一応香奈の分を含めて三人分の皿が並ぶ。

「香奈ちゃん呼んで来て、食べたくないってごねるかもしれないけど、食べられる時に食べないといつ食べられなくなるか分からないから」

「ん、わかった」

美樹が二階に向かったのを見て、厚志はため息を吐く。ついさっき――といっても六時間前だが――あんな事があったのだ、なるべくならば顔を合わせたくはない。だが、今は緊急事態である。自分の都合を押し付けるわけにはいかなかった。

「ほら、今は食べないと……」

「……」

階段を下りて来た香奈はかなり雰囲気が変わっていた。柔らかく、誰もが癒されるような和やかさは無く、憔悴しきり、ただ憎悪によって生き永らえているような雰囲気が漂っている。

香奈は厚志を一瞥（いちべつ）したが、まるでそこに何も無いかのように視線

が素通りする。厚志も見ていられなくなり、視線を逸らした。
言いようの無い空気が居間を包み込む。
「……と、とりあえずご飯食べよう。ねっ？」
「あ、あぁ……」
何とか居間に流れる暗い空気を吹き飛ばそうと美樹が無理矢理笑って声を出す。厚志もなんとか返事をした。だが、香奈は特に反応せず、テーブルについた。
暗い空気が全く拭えぬまま食事は続いた。
「……」
「……」
「……」
三人が三人とも何も喋らず食事をしているため、外の感染者達が出す呻き声や壁を叩く音がやけに大きく聞こえた。それがさらに厚志の気分を落ち込ませる。
「……藤堂さん」
「は、はいっ！？」
突然香奈に名前を呼ばれ、傍から見れば笑えるほど飛び上がる。何とか声をかけようと悶々と考えを巡らせていた時に不意打ちされたため、異常な反応になってしまった。
とりあえず厚志は動揺で荒くなった息を調え、香奈に向き直る。
「……外の……」
厚志は黙って香奈の言葉を待った。勇気がいる言葉なのだろう、正座した膝の上に置かれた手が白くなるほど握られる。
香奈は何度か詰まりながら、言葉を続けた。
「……外の人達の事を知ってるんです……よね？」
「……ああ」
「なら、詳しく教えてください。私は……お母さ――――母の分も生きなきゃいけないですから」
感染者達の事を知るという事は必然的に香織の死に話が及ぶという事だ。厚志が実例を交えて話す上で、唯一の実際に『見た』感染

例は和臣だけである。噛まれたらしい傷を持った感染者は外を見れば沢山居るが、実際に感染し、感染者になったのを見たのは彼なのである。という事は和臣に噛まれ、死んだ香織の話もしなければならない。

香奈がどれほどその話を聞くために自分を奮い立たせたかは厚志には分からない。

厚志は香奈の強さに感服し、逃げようとさえ考えていた自分を恥じた。

「わかった」

厚志は自らも覚悟を決め、頷いた。

「あくまで俺の推察を含むが……それでもいいか？」

「……はい」

「なら、まず感染経路からだ」

香奈が頷くのを見て厚志は感染者に対する推察を話し始めた。

まず外の感染者は、死人に間違いない事を前提として話した。

感染経路は分かっているのは一つのみ。それは感染者に噛み付かれた場合だ。これは初めに説明はしていたが、それはあくまで映画やゲームなどからの情報で予想でしかなかった。しかし、ニュースや和臣のケースを見れば明らかだった。

映画にもあるように感染者に噛まれれば、致命傷で無くともやがて死に至り、感染者として復活する。もしかしたら、噛まれなくとも引っ掻かれたり、奴らの体液が体内に入るだけでも感染者になるかもしれない。

それは人としての『死』であり、感染者としての新たな『生』なのかもしれない。だが、感染者は人を喰らう。人が生き残るためには感染者を他人、友人、家族関係なく殺さなければならない。

感染者を『殺す』。唯一の方法が頭を潰す事だ。むろんゲーム等にあるように頚椎の破壊やナイフなどで脳を刺しても大丈夫かもしれないが、今の所確実に倒せる事が分かっているのは潰す事である。

「ここまでが今分かっている感染者の簡単な情報だ」

「……」
美樹と香奈は押し黙り、厚志の言葉を聞いていた。美樹はまだ元々持っていた知識や実際に倒した経験があるため、見た目に変化は無いが、香奈は眉をひそめ唇をきつく結んでいた。
この後話さなければならない事を考えると厚志は気が重かったが、話さないわけにもいかないため続けた。
「感染者になった奴はもう家族でも友人でもない……ただの人を喰う化け物だ」
「……っ」
香奈の身体がビクリと震える。美樹が彼女に近寄り、抱き寄せる。
美樹がもう話さない方がいい、と目で訴えていた。だが、厚志は続けた。
「たぶんここにずっとは居られない。近いうちにここより安全な場所に行くために出ていかなければならない。もし移動中、俺や美樹が噛まれたら即座に頭を潰せ、いいな」
「……」
美樹が仕方が無いな、と呆れた様子で肩を落としていた。彼女は、厚志は相手が死んでからでしか殺せない事を知っているから呆れているのだ。
自分が出来ない事を人にしろなどおこがましいのは分かっていたが、厚志は自分のやり方がどれだけ危険か分かっていた。だから香奈には危険な事をさせるわけにはいかなかった。もちろん今の言葉は美樹にも向けて言っていた。美樹なら理解できるだろうという信頼を持っているから厚志は明確には告げなかった。
（全く、十歳近く離れてる子なのにな……責任を押し付けているなんて）
厚志は自嘲しながら香奈を見た。
香奈は美樹に抱きしめられたまま黙っていた。見れば握り締められた手が震えている。
それもそうだろう。たかだか十六歳の高校生の、それもついさっ

き母を亡くした子に、今度はいざという時は親友を殺せと言っているのだ。受け入れられるわけがない。

「……それは……人として……死にたいからですか」

「……ああ、そうだ」

「……なら、母は……母は人として……死ねましたか？」

「……」

香奈の質問に厚志は押し黙る。確かに感染者として蘇る前に頭を潰したため人として死ねたかという問いの答えには頷く事が出来る。ただ、厚志の我が儘で死ぬのを待ったため、本当に人として死ねた――とは断言出来なかった。

厚志が俯き黙っていると、香奈が口を開いた。

「すいません。意地悪な質問でしたね。母が人として死ねたのはあの顔を見ればわかります」

「……え？」

厚志が顔を上げる。

「さっき、戻ってくる前に香奈がどうしても見たいって言うから香織さんの部屋にいったの」

「……そう、だったのか」

確かに弔うために綺麗に整えたのは事実だが、はっきり言って厚志の自己満足以外の何物でもない。自分が救えず、殺すしかなくなってしまった。その罪悪感を少しでも拭うための行為だ。

香奈の目にどう映ったかは分からないが、厚志は後ろめたさから香奈の顔を真正面から見ている事が出来なくなり、視線を下に向ける。

「……藤堂、さん」

「……」

「ありがとう……ございました。母を人として……母として送っていただいて」

「……っ！？」

厚志は香奈の言葉に驚き、視線を戻した。

香奈は美樹から離れ、涙を流し、厚志を見ていた。そして、頭を下げた。

「そんな……俺は君にお礼を言われるような事はしてない！！」

厚志は思わず叫んでいた。

「いえ、さっきは取り乱しましたが、今の話を聞いて分かりました。確かに気持ちの整理はつきませんが……それでも、言わせてください。母を死後も救ってくれてありがとうございました」

「違う、違うんだ！　俺はただ、守れなかった罪悪感を拭うためだけに……殺して……その事実を認めたくないから、弔ったみたいに見せ掛けただけだ！！　いつもそうだ俺はいつも守れない！　あの時だって、今回だって！！」

八つ当たり気味に叫ぶ。だが、香奈はただ真っ直ぐ厚志を見つめる。

「藤堂さんがどう思ったかは知りません。『あの時』というのも知りません。ただ、私は母の死に顔を見てお礼を言いたかっただけです」

「……だがっ」

「いいんです。私は藤堂さんをまだ許せません……ですが、母があなたによって救われたのは事実です。私では、母を……母を救えなかったはずですから……」

溢れる涙を拭い、香奈は無理矢理に笑い、言った。

「ありがとう……ございました」

最後のお礼だというように、香奈は深々と頭を下げた。

「すまない……すまないっ！！」

厚志は自らも涙を流しながら、謝った。

救えなかった香織達に、母を守ってやれなかった香奈に、そして弱い自分を恥じて謝った。

香奈は強い。母の死を乗り越えきれてはいないかもしれないが、乗り越えために立ち向かっている。

そんな強さを感じ、厚志は涙を流し、美樹に香奈共々抱きしめら

れるまで謝り続けた。

第5章　理解と目的地（前書き）

※２０１１年7月１０日　誤字脱字修正しました。

第5章　理解と目的地

「えっと、とりあえずテレビつけよっか」
厚志と香奈が落ち着いたのを見計らい、美樹が努めて明るい声を出す。彼らは涙で腫れた目を擦りながら、テーブルに座り直した。
美樹がリモコンを操作して電源を入れる。
「ん？　あれ？　真っ暗だ」
「……まさか」
厚志は嫌な予感がした。美樹がチャンネルを変えるが、どこも同じような黒一色か砂嵐のみだった。
ただ一局だけ違った。
背景は他と同じく黒一色だが、他の局とは違いテロップが流れていた。
「えっと、なになに……『現在原因不明の感染症により放送が行えない状態にあります。放送が再開されるまでお待ち下さい』？」
「……情報すら流れていないのか」
美樹が読み上げるより先にテロップを読み、厚志は肩を落とした。
「あれー？　おかしいなー」
「……いや、おかしくない。二人ともこれから俺が話す事を落ち着いて聞いてほしい」
厚志は美樹と香奈が自分に注目したのを確認すると話し始めた。
恐らくテレビ局は全滅、もしくは職員が撤退したのだろう。どこかのタイミングで真実を追い求める熱血な報道関係者が現れるかもしれないが、今は期待しないほうがいい。公共放送ですら政府からの通告が流れていないところを見ると、最悪政府関係者がもう全滅している可能性すらある。
むろん、本来なら事が起こった時点で政府高官は優先的に保護されるはずだが、もし関係者に感染者がいれば保護など関係無い。いくらボディーガードや自衛官が着いていようが関係なく感染は広が

るだろう。
　あくまで守られるのも人なら守るのも人だ。もし家族や親友が感染し、人を襲うと分かっていてもそう簡単に割り切れるものではない。そうした躊躇が被害を広げる可能性は高い。
　厚志もそうだったのだから分かる。人の形をした者の、しかも頭を潰すなどいきなり出来るわけがないのだ。だからこそ、ゾンビというものは爆発的に感染する。
　政府が全滅した、というのは想像の域を出ないが、それでもテレビ局が全滅しているのは事実だった。やはり、この現象は日本だけでなく世界中で起きている可能性すらあった。
「……あくまでもその可能性がある、というだけだが期待はしないほうがいいだろう」
　厚志はそう締め括り、軽くため息を吐いた。
「……嘘でしょ」
「そんな……」
　美樹と香奈は驚愕し、不安そうに厚志を見る。二人の不安を拭い去るだけの判断材料が無いため、厚志は押し黙るしかなかった。
　何とか暗くなった空気を吹き飛ばすために今後のプランを提示する事にした。
「……とりあえず俺はこれから寮に向かおうと思う。あそこなら多少の事では感染者に入られるような作りはしてないし、何より武器があるからな」
「武器？」
　美樹の問いに強く頷く。
「ああ、演習場が近くにあるんだが、倉庫の鍵が壊れたとかで今銃なんかが寮に集まってるんだ」
「へー」
　厚志はさすがに内部情報なのでまずいとは思いつつも、状況が状況なので話した。倉庫の鍵が壊れていては、武器の管理が出来ていないなどとマスコミが叩くには恰好の的になってしまう。確かにマ

スコミに知られれば厄介だが厚志の上司は自らの保身のために直すまでの間、あろう事か自衛官の寮に武器を置いたのだ。
「ま、不祥事はこの際置いておいて、そこなら安全なはずだ。食糧もかなりあるしな」
「厚志さん、そこって遠いの？」
「というか、まずここがどの辺りなんだ？」
恥もてらいも捨てて聞く。初めて感染者に会った際にがむしゃらに走り、香奈の家までは美樹の案内で来たため、厚志は自分がどの辺りにいるのか理解できていなかった。
「うわ、厚志さん迷子なんだ！」
「うっさいな」
「迷子、迷子、ごーまい～」
「……で、香奈ちゃんここはどの辺りなんだ？」
「スルーっ！？」
美樹が大袈裟に驚き、厚志をバシバシ叩く。
「これは、迷子と迷子を逆にしたごーまい。そして、今から寮に向かう……ゴーマインドを――」
「家の前の道を行くと国道に出ますよ。あと、国道の近くに最近出来たスーパーがあります」
「香奈までっ！？」
必死に構ってもらおうとギャグ――にもなっていない――を説明しようとする美樹をさらに無視して香奈が続けた。ついに美樹はいじけ、床にのの字を書き始める。
香奈が慌てて謝り、厚志は肩を竦めた。妙にいじりがいがあるため、普段ならまずしない意地悪をしてしまう。
「すまんすまん。たぶん、それなら国道に出て数分歩けば着く近さだぞ」
「全く……でもそれなら、大丈夫かな？」
立ち直ったらしい美樹は頭の中で地図を描いているらしく、視線を上に向いたまま答える。香奈は近さよりも感染者がいる可能性に

対して不安がっている様子だった。
「あの……大きな通りは危ないと思うんですが」
「……確かにな。ある程度は遠回りしたほうがいいと思う」
厚志は香奈の意見に頷き、腕を組んだ。
やはり大通りは車を使って逃げる人間が多かったはずだ。乗り捨てられた車は遮蔽物になり、ただでさえ動きの読めない感染者達を見えなくする。加えて移動の邪魔にもなってしまう。
さらに厚志には一つ懸念事項があった。
「あと、感染者が何に対して反応するか分からない」
「どういうこと？」
美樹の問いに厚志は渋い顔をして立ち上がった。
「どうせすぐに見る事になるから、見た方が早いな……二人とも着いて来て」
キョトンとする二人の意志を確認せず、二階に向かう。二人が後ろから着いてくるのを足音で確認しつつ、廊下の突き当たりにある出窓に向かう。
「見てみて」
一度下を確認し、厚志は美樹達が見えるように脇に退く。
「……うわ」
「……っ」
門前に集まっている感染者達を見て、美樹は渋い顔に、香奈は口に手を当てて恐怖していた。二人の反応を確認し、厚志は続けた。
「見ての通り、奴らはここに集まって来ている。それが何故か分かるか？」
「え？　私達が家の中にいるからじゃないの？」
「それはその通りだが、よく見てみろ……奴らの目を」
離れているため分かりづらいが、よく見れば分かる。感染者達の目は白く濁り、白内障のようになっている。あれで見えているとは思えない。
事実、厚志達が隣の家に入る前は突っ立っていても奴らはほとん

ど気付かなかった。それでも数体が気付き始めると後は雪崩のように集まった。

つまり、少なくとも視覚以外の何かを判断材料にして感染者は人を襲っているという事だ。

「予想では二つ、一つは聴覚。もう一つは嗅覚だ」

「……その根拠は？」

感染者を見ていられなくなり、俯く香奈の肩を抱きながら美樹が問う。

「推論でしかないが、まず聴覚。こちらは隣の家に入る時、奴らが俺達に気付いた順番が気になった」

「……順番？」

「……ああ、これは嗅覚にも言える事なんだが、奴らは俺達から近い順に気付いただろう？」

「んーそうだったっけ？」

美樹が曖昧に答えるが、厚志は覚えていた。しかも、あの時は生温い風が頬を撫でていたから風上ではなかったはずだ。

「だが、風下ならともかく、あの時は確か風上だった。なら視覚でなく嗅覚でもない判断材料、それは――」

「……聴覚」

美樹が厚志の代わりに答える。

「そういうわけだ。あの時俺達はそれなりに大きな声で会話してたからな」

ため息混じりに肩を竦める。あくまで推論の域を出ないが、ある程度の判断材料が揃っているため、絶対に違うとも言い切れない。

「ちなみに嗅覚はどんな理由があるんですか？」

ようやく落ち着いたらしい香奈が顔を上げ、聞いた。

「こっちもあくまで推論だが、今のこの状況だ」

「……この状況って？」

美樹が訳が分からないというように首を傾げる。

「あ、家の中……」

「そうだ、香奈ちゃんの言う通り。見えていなくて、音もあまり出していない……むしろ街中の方が爆発や悲鳴が聞こえる今、奴らが何故ここに集まっているのか、それが答えだ」

こちらもまだ推論だが、用心するに超した事はない。

むろん異常聴覚が発達して中にいる厚志達の会話が聞こえるから集まっているのかも知れないが、下手に外れて襲われては意味が無い。なるべく危険だと思う事は避けておいた方が得策だ。

厚志は沈んでしまった空気を払うように努めて明るい声を出す。

「さ、今はとりあえず休むぞ！　いつ電気や水なんかが止まるか分からないから今のうちに風呂に入っておこう！」

「うわ、厚志さんのえっち」

「な！？　な、何でエッチなんだよ！」

「だって、『水を節約するために一緒に入るぞ』とか言うつもりなんでしょ」

美樹がにやけながらじりじりと下がる。明らかにからかっている目だ。

「ん、んなわけあるかぁ！！」

「はっ、あえて覗くことに興奮を……」

「もっとないわ！！」

美樹のからかいに我慢できなくなり、逃げ出した彼女を追い掛ける。きゃー、と棒読みで声を上げながら美樹が逃げる。

「ぷっ、あはは」

厚志のものでも、美樹のものでもない笑い声が上がる。

二人がピタリと止まり、声のした方を見る。

「あ、ごめんなさい。何だかおかしくて」

香奈がうっすら涙を浮かべて笑っていた。

つい先程まで悲壮感を漂わせていた少女とは思えない歳相応の笑み。

厚志は美樹に目配せをする。彼女は厚志の意図を察したのか微妙に歪んだウインクをした。

「いや、いいんだ。美樹が馬鹿なだけだから」
「なっ、厚志さんがえっちぃだけだよ！」
「何だと！」
「何よ！」
額を突き合わせ睨み合う。再び笑い声が聞こえた。もちろん笑い声の主は香奈だ。
「あはは、美樹ちゃんも藤堂さんも息合い過ぎですよ！」
ついにはお腹を抱えて笑い始める香奈。それを見て厚志と美樹はホッと胸を撫で下ろした。
「あ、そうだ。お風呂ですよね、今沸かしてきます」
香奈が思い出したようにポンと手を打つと階段に向かって歩き始める。しかし、もう階段に足がかかるという所で振り返った。
「厚志さん、美樹ちゃん……ありがとうございます」
深くお辞儀をすると、香奈はすぐに踵を返して階段を下りていった。
「……香奈ちゃんには敵わないな」
「うん、だから私の一番の自慢は香奈の親友だっていうことだよ」
「……そうか」
厚志は返事をしながら未来の頭を撫でた。香奈の手前我慢していたのだろう。美樹はくしゃりと顔を歪め、涙を流し始める。初めて会った時のような事はないが、厚志の胸に飛び込み、小さく嗚咽を漏らす。
悲しいのは香奈だけではない。香織の態度からも分かるが美樹は佐草家とかなり親しかったのだろう。彼女もまた悲しんでいないわけがなかった。
「……なぁ、美樹」
「……ぐすっ、なに……？」
「もうウインクはしないほうがいいぞ。あの顔は見てられなかった」
「～～っ、大きなお世話よ！！」
美樹が耳まで真っ赤に染めて厚志から離れる。落ち着くまで泣か

せたままでもよかった。だが、香奈が階段を上がる足音が聞こえたため、あえてからかった。むろん、美樹も分かってるのだろう、涙を拭うと少し無理をしながら笑った。

「美樹ちゃん、藤堂さんもうすぐ入れるので先に入っちゃってください」

「了解、んじゃ一緒に入るか」

「な、ななぁ！？」

いくら無理矢理笑ったとしても赤くなった眼はごまかせないため、からかう振りをして美樹の背中を押しながら階下に向かう。

「あ、私は食器を洗ってますから、何かありましたら台所に来て下さい」

「え？　香奈、何でスルーなの！？」

「香奈ちゃん、ありがとう。よっしゃ、合法的に女子高生の裸が見れる！」

変態～、と叫ぶ美樹を無視してとにかく背中を押して風呂場に向かう。風呂場は居間に続く廊下の途中にある。ドラム式の洗濯機や洗面所のある脱衣所に入り、厚志は美樹の背中を押すのを止めた。

「……はぁ、ほんと厚志さんは優しいね」

「ま、泣きたくなったら何時でも胸くらい貸すさ。何なら本当に風呂も一緒に入ってやるぞ？」

「……うわ、さっきの本気だったんだ」

「いや、冗談だから……」

「……ほんと、変態」

そう言いつつ、美樹は目を少し潤ませながら小さく笑った。

厚志は先程より力の戻った美樹を見て胸を撫で下ろす。世界が最悪の状況で、親しい人が亡くなれば落ち込むのは仕方が無い。だが、人は落ち込めば落ち込む程咄嗟の行動に影響が出やすい。

具体的には、突然感染者と遭遇した時だ。気がそぞろで警戒していなければすぐにやられてしまう。

美樹達を守ると誓っても、厚志も人間である以上限界はある。だ

から、なるべく生きる気力を持って、生きる努力をする状況を作らなければならなかった。例え、周りから道化と見られてもだ。

幸い、美樹は理解してくれているため、厚志は救われていた。恐らく香奈も美樹の変化に気付いているはずだが、変わらず接していた。

（ほんと、この子らは強いな……）

自己犠牲しか思い付かない自分の弱さを感じながら、厚志は苦笑した。

ふと、美樹を見ると腰に手を当てて、じと眼で見ていた。

「ん？　どうかしたか？」

「厚志さん、いつまでいるつもりなの？　まさか、本当に私とお風呂に入るつもり？」

「へ？　あ、すまん！」

慌てて脱衣所を飛び出し、後ろ手で引き戸を閉める。

この家の風呂は脱衣所があるにはあるが、それは洗面所を兼任しているため、廊下からすぐ入れる位置にある。そのため、明確に脱衣所という空間が無い。美樹が風呂に入るためには、厚志の目の前で服を脱ぐしかないのだ。

「……あー振り回されでばっかりな気がする」

独りごちながら、廊下と脱衣所を繋ぐ戸に背中を預け、床に座り込む。

今日一日あった事を思い出し、苦笑した。

戸が薄いためか、衣切れの音が聞こえる。よくよく考えれば戸一枚挟んだ向こうでは美樹が今まさに裸になろうとしている。

厚志はゴクリ、と生唾を飲み込んだ。

早く離れればいいのだが、いくら自衛官だといっても所詮厚志も男である。美樹の女子高生にしてはかなり良いスタイルを思い出し、どんな裸か勝手に妄想が走り出す。

（いやいや、相手は守ると約束した子だろ！？）

何とか妄想を止めようと頭を抱える。

どうやら美樹は服を脱ぎ終えたらしく、ドアの開く音が聞こえ、やがてシャワーの音が聞こえてきた。そんな音を聞かされて、妄想がさらに加速しそうになる。

「何してるんですか？」

「ぬおぅっ！？」

突然かかった声に驚き、厚志は意味の分からない言葉を発してしまう。

恐る恐る振り返ると荒いものを終えたらしい香奈が首を傾げて立っていた。

厚志の背中に冷や汗が一気に吹き出した。脱衣所に繋がる戸の前で悶えるている状況で言い訳できるわけがない。とりあえず平静を装い、何事もなかったかのように立ち上がった。

「これはだな……」

「男の人なら仕方が無いかも知れませんが、ちゃんと美樹ちゃんに同意を得てからにして下さいね」

「……へ？」

香奈に何を言われたのか理解できず、厚志は馬鹿みたいな顔で固まっていた。

「少なくともちゃんと美樹ちゃんに許可を取れば見せてもらえると思いますよ。美樹ちゃんも満更でもないみたいですし」

「え？　あ、いや、香奈ちゃん？　何を言って……」

「ま、美樹ちゃんはスタイルも性格もいいですから、男の人は放っておけないですもんね。私なんてずん胴の童顔で運動も出来ないし、私なんて、私なんて……」

「え？　え？　えええぇぇぇっ？」

厚志はいきなりいじけ始めた香奈を美樹が風呂から上がるまで延々慰め続ける羽目になってしまった。

第６章　脱出と生存者（前書き）

※２０１１年７月１０日　誤字脱字修正しました。

第6章　脱出と生存者

美樹が香奈と一緒のベッドで寝ると言い、二階に向かってから数時間後、厚志は一階のソファに寝転がっていた。

時刻は日を跨ぎ、すでに四時を回っている。初めての感染者が何時出たのか分からないが、地獄が始まって一日が経とうとしていた。

何とか一日生き延びた事に安堵し、同時にこの地獄が始まって以来初めての一人の時間を過ごしていた。

「ヤスは無事なのか……」

ゾンビ映画が大好きな友人の事を思い出しながらため息を吐く。

一人になり、今まで考えなかった――考えようとしなかった友人達の安否が気になり始めた。電話は通信会社が潰れたらしく、そもそも繋がらない。人がいなくてもある程度は動くと思うが、すぐにエラーなど対処しなくてはいけない事項が発生し、止まってしまう。こんな状況では誰も彼もが家族や友人の安否を確認するために電話やメールをするはずである。そのため、通信はすぐにパンクし、対処する人間がいないため使えなくなってしまう。

事実、美樹達が寝た後この家にある電話を使ってみたが、うんともすんとも言わなかった。どうにか寮か駐屯地に連絡が取れれば助けには来てもらえなくとも安全かどうかは確認できる。

「やっぱり自力しかないか……」

少し期待していた分落胆も大きい。

ため息混じりに立ち上がると厚志はまだ出る水をコップに注ぎ、一気に飲み干す。

眠るわけにはいかなかった。厚志には見張りという大事な任務がある。

万が一門が耐え切れなくなり、感染者が庭に入って来ては逃げられなくなる。無論、その時のために隣の家にかけるための梯子を用意してはいるが、それでも安心は出来ない。

天戸を締め切って内側から多少なり補強はしているが、数十人の体重を支えられるわけが無い。

「さて、どうするかね」

厚志は暇を持て余していた。日が昇り次第出られるように、すでに日持ちする食料や水、武器などは揃えている。もちろん美樹達の物は軽めにしてある。

さすがに何も無しで出て行き、もし寮が感染者に襲われ、安全でなかった際は目も当てられない。備えあれば憂い無しというわけだ。

「しかし、減らないな」

二階の出窓に向かい下を見る。今だ門前には数十人の感染者が蠢き、開くのを今か今かと待っているバーゲン時によく見る開店前のデパート入口のような状態だった。

ずっと見ていても気が滅入るため、窓から離れ美樹達が寝ている部屋を見る。完全に締め切るのは恐ろしいのかドアは開いていた。

（無防備にもほどがあるだろ……）

苦笑しながら中を覗くと美樹と香奈が抱き合うようにして寝ていた。美樹のほどよく豊満な胸に顔を埋めて香奈が安らかな寝息を立てている。

少し羨ましく思いつつも下手に目を覚まされても面倒なので居間に戻った。

再びソファに寝転がり、天井を眺める。

何となくここにいると思い出してしまう。今まで幾度となく再生されてきた記憶。薄れないように、忘れないように何度も何度も思い出した思い出。

「……未果」

彼女の名前を呟きながら、厚志の意識は暗い闇に落ちていった。

◆　◆　◆

「ねぇ、厚志さん」

「んー？」
ソファに寝転がり、ハードカバーの小説を読んでいた厚志は、名前を呼ばれ生返事を返す。
「私の事、好き？」
「ぶっ！？　な、何だよいきなり」
「んー、ちょっと気になって」
小説を退けると、厚志の視界にからかうような笑みを浮かべた可愛らしい顔があった。
篠部未果。厚志の彼女であり、看護学校に通う看護師を目指す女性。
二十歳とは思えない幼い容姿に茶の長い髪、少しつり目な同色の瞳が可愛い。背は低く、厚志の胸辺りまでしかない。そのため、今だに中学生に間違われたりする。未果はそれが嫌らしいが、厚志には愛しい一面でしかなかった。
（顔に見合ったスレンダーな身体がまたいいんだよな）
「今失礼な事考えたでしょ」
「ほ、ほんなほほないほ」
いきなり鼻を摘まれ、否定の言葉が変な声になってしまう。
「本当ー？」
「ほんほ、ほんほ」
「よし、なら聞かないでおいてあげる」
そう言いながら快活な笑みを浮かべる未果に見惚れる。
厚志と未果の出会いは何でもない、ただ女友達と遊んでいた際にたまたま街で出会っただけだった。女友達に高校時代の友人と紹介され、その時はそれでおしまいだった。
だが、以来他の友人などと遊んでいる際にばったり出会う事があり、やがて未果の方からお誘いがあったのだ。未果の事が気になり始めていた厚志は二つ返事で了承し、デートを重ねて今に至るというわけである。
「で、結局私の事好きなの？」

「な、何でいきなりそんな事聞くんだ？」
「質問を質問で返さないの。ま、女は改めて確認したい時もあるって事よ」
「何だそれ……」
厚志は呆れながら、うりうりと頬を突いてくる未果に苦笑した。
最初は清楚なお嬢様のようだったが、今の印象は違う。歳相応――下手をすればかなり年下にすら思える未果の行動や言動。厚志はそんなある種破天荒な振る舞いに惚れ直していた。
「で、どうなの？」
「……す、好きだよ」
「ふふ、ありがと。私も厚志さんのこと大好き！」
「……っ！」
突然未果の顔が視界一杯に広がったかと思うと、厚志の唇に柔らかな感触が当たった。
「厚志さん……」
「な、何だよ」
厚志は照れと嬉しさで頬が赤くなるのを感じながら、努めて毅然と返事した。
「これからもずっと……しょ……よ」
「！？　未果！？」
未果の身体が、二人の部屋が突如としてブレた。
慌てて起き上がるが、すでに彼女の身体は幽霊になったかのように透けていた。
「未果！！」
手を伸ばすが、届かない。空を切った手をそのままに、厚志の視界は闇に包まれていった。

◆　◆　◆

「……さん……しさん！　厚志さん！！」

誰かが呼んでいる。
ゆっくりと目を開けると、視界が大きく揺れていた。
訳が分からず何とか状況を確認すると、誰かが厚志の身体を揺さ振っていた。
「厚志さん、早く起きて！！」
「――――！？　未果！！」
揺さ振っていた誰かの顔を見た瞬間、厚志は抱きしめていた。
「はぇっ！？　ちょ、ちょっと、厚志さん！？」
「未果、よかった。無事だったんだ……な？」
「何寝ぼけてんのよ！　私は美樹よ！！」
抱き心地の違いに首を傾げていると、抱きしめた相手はするりと腕から抜け出した。
目の前に立っていたのは不満げな未果――ではなく、美樹だった。
美樹はいつの間に着替えたのかTシャツにミニスカート、さらにはニーソックスという動き易そうなものになっていた。
「あれ？　美樹？」
「『あれ？　美樹？』じゃないわよ！　早く支度しないとまずいの！！」
「……何がまずいんだ？」
まだ少し寝ぼけている厚志は頭を掻きながら欠伸をした。
「だから、もう門が破られそうなのよ！　急いで離れないと奴らが入って来ちゃうの！」
「……何だと！？」
たっぷり数秒停止し、ようやく理解できた厚志は慌てて起き上がった。ソファにかけていたシャツを引っつかみ羽織る。
二階の出窓から確認すると、確かに門の留め具が歪み、今にも壊れそうな状態だった。急いで一階に戻り、支度を始める。
「すまん、俺が寝てしまったから」
「今はそれよりも逃げる事が先でしょ」
「……そうだな」

美樹に内心感謝しつつ、台所の方から何かゴトゴト音がするので、視線を向けると、香奈が前日厚志がまとめておいた荷物を背負っている途中だった。

香奈も着替えたらしく、清楚な白いワンピースに薄いカーディガンを羽織っている。今から逃げるというのにどこかの避暑地に涼みに来たお嬢様のような服装だった。だが、今更着替えろとも言えず、放置するしかない。

「とりあえず隣の家に移ろう、後はぶっつけ本番だがやってみる」

「う、うん！」

「はい、お願いします」

美樹と香奈が返事し、荷物を背負ったのを確認すると厚志は自らも荷物を背負う。

もちろんバットも忘れてはいない。美樹達には気休め程度だが果物ナイフを持たせておいた。包丁よりは使い勝手がいいからだ。ただ、本当に気休めにしかならない可能性は高かった。

美樹はまだ戦えるかもしれないが、香奈はまず戦えないだろう。もし襲われれば厚志自身が犠牲になってでも助けにいかなければならなくなるはずだ。

（何がなんでもこの二人は生き残らせる……）

そんな決意をしながら、二階の香奈の部屋に向かい、内側に建て付けられた板を外していく。あらかじめ部屋に置いておいた梯子を持ち屋根の上に出る。靴でも滑る上、重量も増しているので慎重に移動していく。

厚志、香奈、美樹の順で屋根を歩く。

脱出経路は厚志達が香奈の家に入る際に侵入した隣の家ではなく、裏側にある家だった。

無論、隣の家ほど屋根は近くはなく、飛び移る事は出来ない。そこで梯子の出番だった。梯子を屋根から塀に向かって架け、とにかく奴らがなるべくいない経路を伝っていくつもりだった。

距離は二メートル程度。普通に歩けば数歩程度の距離である。

厚志が梯子を架け、押さえる。先ずいざとなれば戦える美樹が梯子を移動する。風で美樹のミニスカートがはためいた。ちらりと中身が見えたが短パンを履いているのが見えた。

（ま、当たり前か）

厚志は少し残念に思いつつも、美樹が到着したのを確認すると、厚志は香奈に振り向いた。

「さ、次は香奈ちゃんだ」

「は、はい！」

ガチガチに緊張しているのかありありと分かるほど声は裏返っていた。

「……香奈ちゃん、大丈夫だ。俺が命に代えても押さえてるから、絶対に落ちたりしない」

「……分かりました。い、行きます」

香奈が四つん這いになり、ゆっくりゆっくりと渡っていく。たった二メートル程度にもかかわらず、香奈の歩みは遅々として進まない。

その時、大きな音が響いた。どうやら門が限界を迎えたらしい。しばらくすると、呻き声と引きずるような音と共に感染者が家の影から現れた。

「ひぃっ！？」

血だらけの感染者を見て香奈が身を固くする。そのまま梯子の中頃で止まってしまった。

「何かあったの！？」

「……何でもない！　美樹はとりあえず安全を確保してくれ！！」

塀に遮られているため、音しか情報源がない美樹が尋ねてきた。厚志はしばし悩んだが、彼女を危険にさらすわけにはいないため離れさせるための言葉を発した。

美樹の分かった、という答えを聞きながら厚志は迫り来る感染者を見た。

感染者達の手は、目算だがギリギリ梯子には届かない。だが、服などを掴まれれば即座にあの異常な力をもって引きずり落とされるだろう。

感染者はもうすぐそこまで来ていた。もはや一刻の猶予も無い。

「香奈ちゃん！」

「と、藤堂さん……わ、私……怖くて動けません……」

香奈は震えながら、何とか顔を厚志に向けた。すでに恐怖から涙を流し、本人は何とか体を動かそうとしているようだが、その意志に反するように彼女の身体はぴくりともしない。

「……分かった。香奈ちゃん、今から言う事に従って」

「は、はい」

「じゃあ、先ずリュックサックを捨てて」

「え？　で、でも……」

厚志は、渋る香奈を諭すように努めて優しい声で話す。

「いいんだ、今はここから助かる事が先決だ。食糧は後からどうとでもなるから」

「……はい。ごめんなさい」

もはや感染者は梯子の真下までたどり着き、皆一様に救いを求めるかのように香奈を掴まんと手を伸ばしている。

香奈はなるべく下を見ないようにしつつ、リュックサックを外し放り投げた。

壁に辺り、ガシャンと音が鳴る。すると近くにいた感染者が一斉にリュックサックに群がっていく。

これで貴重な食糧が失われた。

香奈には大丈夫と言ったが、実際は食糧を得るのは難しいだろう。人は食べ物無しには生きられない。故に、まず食糧の確保を第一に考える。ならば、コンビニやスーパーは例に漏れず、個人商店なども狙われるだろう。まず間違いなく食糧は得られない。厚志自身こんな事態になったらそうするからだ。

だが、同時に一つの情報を得られた。

感染者が聴覚を頼りにしていることだ。特に何かを区別しているのではなく、音に反応しているらしい。事実香奈のリュックサックが当たった音にすら反応していた。目の前に香奈がいるにも関わらずだ。ただ、香奈や厚志の近くにいる感染者達に反応が無いため、厚志の予想通り嗅覚でも判断しているのだろう。

音に対する一時的なものらしく、先程リュックサックに群がっていた感染者達はすでに香奈に手を他の感染者達の輪に入っていた。

厚志は自らも背負っていたリュックサックを外し、屋根に置く。梯子を渡ってから出すつもりだったバットをリュックサックから抜き、刀のようにベルトに差し込んだ。準備を整えると、厚志はリュックサックを持ち、音が立つように思いきり――屋根の下に向けて投げた。

香奈達の物より重かったリュックサックは、派手な音を立てて窓ガラスを割る。同時に音に反応した感染者達が家に入っていく。

雀の涙ほどだが感染者が減ったのを確認すると、厚志は梯子を渡り始めた。

「と、藤堂さん!?」

押さえが無くなりグラグラと梯子が揺れ始めたため、香奈が声を上げる。厚志は人差し指を唇に当て、静かにするように示す。

香奈は口を紡ぐがそれでもいつ落ちか分からない恐怖から泣き出していた。

厚志は何とか宥めたいとは思ったが、今は一刻の猶予も無い。

二人の体重に梯子が弛み、届かなかった感染者達の手が少し触れ始めていた。

(……くそ、行くしかないか!)

厚志は意を決し、走った。

「きゃあ!?　と、藤堂さん!?」

香奈の元まで走ると、厚志はさらに揺れる梯子から落ちまいとしがみつく彼女を抱き上げ――ようとした。

「香奈ちゃん、手を離して!」

「む、無理です……無理ですよぉ！！」
「……ゆっくり、ゆっくりでいいから一本ずつ外していくんだ」
厚志は不安定な梯子の上で何とかバランスを保ちながら香奈の手に自らの手を添えた。
「香奈ちゃん、君は強い子だ。俺も手伝うからゆっくり外していこう」
二人が一カ所に固まったため、梯子がさらに弛み、すでに何度か厚志の靴に触られた感触があった。ゆっくりなど出来る状況ではなかったが、下手に焦ってはさらに時間がかかってしまう。厚志は内心焦りつつ、なるべく表に出さないようにして優しく話しかけた。
香奈がゆっくり頷くのを見ると、厚志は香奈の指をゆっくりと梯子から外していく。彼女はやはり強い子だった。数本ほどで両手を離し、厚志に抱き付いた。
時間がかからなくてよかったが、危うくバランスを崩しかける。何とか体制を立て直すと、香奈を抱き抱え梯子を渡っていく。
気味の悪い呻き声と鼻を突く腐敗臭に顔を歪める。それでも自衛官として身体を鍛えていたため香奈の体重にふらつく事もなく何とか梯子を進んでいく。
「あと少――っ！？」
あと数歩で美樹の待つ裏の家にたどり着く、という所でそれは起きた。
梯子がグラリと揺れ、水平から垂直に傾いていく。
どうやら背の高い感染者がいたらしく、たまたま弛んだ部分を掴んだらしい。あとはリミッターの外れた怪力で掴んだものを引き寄せようとしていた。
「くそ！　間に合え！！」
咄嗟に傾いていく梯子から飛ぶ。
香奈を下敷きにしないように抱きしめ、横に転がりながら着地した。
「何とかいけたか」

「う、うぅ……」
突然の展開に少し目を回している香奈を見て厚志は安心した。
そのまま立ち上がろうと顔を上げた。
すると――
「――っ!?」
目の前に感染者がいた。
厚志から数十センチの場所に口を開けた感染者がいた。香奈の家に集まった感染者達が出す音や腐敗臭で気付けなかった。何とかバットを抜こうとしたが、ベルトに引っ掛かって抜けない。
「いやぁぁぁ!」
「くそ!」
咄嗟に香奈を庇うように抱きしめる。
(くそ、ここで終わりなのか!?)
香織との約束も果たせず、不様に死に行く姿が頭を過ぎる。香奈だけでも噛まれないようにするため、厚志は目を瞑り、強く強く抱きしめた。
「……?」
だが、いくら待っても痛みは訪れなかった。ただ感染者の呻き声と壁を叩く音が聞こえるだけである。
「……で、いつまで抱き合ってるのかな?」
「……へ?」
目を開け、暗かった視界に入ってきたのは、腰に手を当てて青筋を浮かべた美樹だった。
「はいはい、離れて離れて!」
「うおっ!?」
美紀が厚志が抱きしめている――というより抱き合っている――香奈との間に割り込む。
引き剥がされるようにして離れたため、たたらを踏んでしまう。
「み、美樹ちゃぁぁぁぁぁん!」
香奈が美樹を認識して涙を流して抱き着いた。ただでさえ恐怖を

感じていた所にさらに死の恐怖を感じたためか、彼女の身体はガタガタと震えていた。
「はいはい、美樹ちゃんだよー」
背中を撫でながら香奈をあやす美樹を見て厚志はホッと息を吐いた。
つい先程厚志達を襲わんとしていた感染者は地面に倒れていた。その後頭部には美樹に渡したはずの果物ナイフが刺さっていた。
また美樹に助けられたらしい。厚志はまたいじられるのが確定し、軽くため息を吐いた。
「美樹、ありがとう」
「ほんとびっくりしたよ、偵察から戻って来たら襲われてるんだもん」
そうあっけらかんとした感じで言いながら笑う美樹の手は震えていた。
厚志は今更ながらに美樹もまた香奈と同じ高校生なのだという事を思い出した。彼女もまた怖かったのだ。
いくら見た目感染者がいないといってもいきなり家の中から現れる可能性もある。そんな場所で一人で偵察させていたのだ。
厚志は美樹のふとした時に出る大人びた態度から頼りにしてしまった自分を恥じた。美樹はあくまで一般人なのだ。国のために死ぬ覚悟でいる自衛官とは全く違う。自衛官である厚志でさえ気を張っていなければ潰れそうな、異常な事態に対応できるはずが無いのだ。
申し訳ない気持ちで一杯になり、美樹の頭を撫でた。
「あ、厚志さん……？」
「すまない、美樹も普通の高校生だったんだよな」
「ど、どういう意味よそれ、私だってれっきとした女子高生なんだからね……」
「……そうだよな」
厚志は苦笑しながら少し鼻声になった美樹の頭をもう一度撫でた。
「さ、グズグズしてるとまた襲われるから移動するぞ」

「うん！」
「……は、はい」
元気よく返事する美樹とまだ少し震えながらも頷く香奈。二人が立ち上がるのを待ちつつ、厚志は感染者から果物ナイフを抜き、たまたま干してあった白いシャツをかけた。
美樹のリュックサックを担いだ。
「あ、私が持つよ」
「いや、美樹は香奈が歩くのを手伝ってやってくれ」
「……ん、わかった」
美樹に肩を借りて立ち上がり、申し訳なさそうな表情の香奈の頭を一撫し、厚志はバットをベルトから引き抜いた。
バットを構えながら慎重に家の表側に向かう。
道路には二体だが感染者がいた。厚志達に気付いたらしく、向きを変えて歩いてくる。だが、二車線の広い道路だったためすぐに襲われる心配はなかった。
「いくぞ、あまり近くに来ない限りは倒さないで行こう。体力の無駄になる」
「うん」
「……はい」
二人が頷いたのを確認すると歩き始める。
まずは大通りに出ない事にはどうにもならないため、家の中から感染者が出てこないか慎重に確認しつつ移動する。意外にも感染者は少なく、香奈の家の前に何故あんなに集まっていたのか疑問に思うほどさくさく進めた。
特に何も無く、感染者もほとんどが遠くにいたため、簡単に大通りに出る事が出来た。
厚志は立ち止まり、左右を見回す。
「えっと、郵便局に行く道はどっちだ？」
「右です。あっちのスーパー方とは逆のほうです」
「了解、いくぞ」

何とか歩けるくらいに回復した香奈に教えられ、移動を再開する。
大通りは片道二車線の田舎にしては大きな道で、いつもなら渋滞とまではいかないが、それなりの交通量がある。だが、今は事故車で塞がれていた。
恐らくいきなり発生した感染者に正常な判断が出来ない者達が事故を起こし、その車に後続車が追突してさらなる事故を呼んだのだろう。かなり破損した車が多かった。そこだけがかなりの事故車で埋め尽くされているが、それ以外は乗り捨てられた車がせいぜい十台くらいあるだけだった。
車で道が完全に見渡せるわけではないため車の陰から感染者が現れないか注意しつつ寮に向かう。
厚志達が向かおうとしている歩道上に感染者が一体いるのだ。美樹達と同じ高校生くらいの少女だった。
「……美樹、周りに注意しながら待っててくれ」
美紀が頷くのを確認すると、慎重に近付いていく。足音を極力立てないようにして近付いたのだが、数メートル手前で気付いたのか、厚志に向かって手を伸ばしながら近付いて来た。
「すまんっ！！」
バットを少女の頭に向けて振り下ろす。厚志は嫌な感触に眉をひそめたが、即座にバックステップして一度距離を取った。
しばらく待ってみたが、少女が起き上がる様子は無かった。
「……」
「大丈夫？」
安全だと判断したらしい美樹が近付きながら聞いてきた。
「……大丈夫だ」
「……そう」
まだ心配そうにしている美樹の頭を撫でる。くすぐったそうにしている彼女を見て厚志は少しだけ心を癒された。
リュックサックの中からハンカチを取り出し少女の顔に乗せる。
これくらいしか出来ない自分にジレンマを感じつつ厚志は立ち上が

った。
「さ、行く――」
「きゃあああぁぁぁぁぁぁ！！」
「……っ！？」
突然悲鳴が上がった。
急いで悲鳴が聞こえた脇道に向かう。そこは大通りから直接入れる一車線の小さな道だった。
「藤堂さんあそこ！」
香奈の指差す方を見る。
五人の大学生くらいの男女が三体の感染者に近寄られていた。どうやら事故車で退路を阻まれているらしく、一人の男ががむしゃらに土木用のスコップを振っていた。
「美樹達は待ってろ！」
厚志は直ぐさま走りだし、一番近い感染者に近付く。
（くそっ！）
中年らしい男の感染者の頭にバットを振り下ろす。再び手に伝わる感触に嫌悪感を覚えるが、無理矢理押さえ込み、次に近い感染者に向かう。
振り上げる時間が惜しかったため、バットで足を薙ぎ、こかせる。そのまま倒れた主婦らしい感染者の頭を潰した。
（あと……一人！）
振り向いて相手を確認しようとした。そこにはすでに倒れた老人の感染者と美樹が立っていた。感染者の後頭部には果物ナイフが刺さっている。さすがに引き抜くのは気が引けるのか、そのままにしていた。
「一人で行くなんて危ないよ、厚志さん」
「……そうだな、ありがとう」
少し震えながら笑う美樹に苦笑してしまう厚志。まだ慣れたわけではないだろうが、強い子だった。
「あ、そうだ大丈夫ですか？」

「……あ、ああ……ありがとうございました」
男女の代表らしい先程スコップを振り回していた男が頭を下げる。
男は黒髪黒目に清潔そうな服装。まさに好青年と呼ぶに相応しい青年だった。
彼らは、好青年を含めて男が二人、女が三人だった。スコップを持っていない方の男は髪を茶に染め、いかにもチャラい感じの雰囲気を出していた。そのチャラ男に縋り付いているのが特に特徴の無い女。他の二人は、一人が眼鏡をかけた真面目そうな、中肉中背の女。もう一人は肩甲骨まで伸ばした長い髪の胸の大きな女だった。
「私は新橋康太。近くの大学に通う者です。この四人はサークル仲間です」
スコップを持った男――康太の話では、今までは大学近くのコンビニに隠れていたのだが、感染者の襲撃で脱出を余儀なくされた。コンビニから脱出した後、次の隠れ家を探していたら感染者に遭遇し、逃げている時に行き止まりで感染者に囲まれてしまったらしい。
「そうか、助けられてよかった。俺の名前は――」
「おおーい、あんたらそこで何やってるんだ！」
厚志の言葉を遮るように野太い声が上がる。
振り返ると大通りから警官の制服を着たがたいのいい男が手を振っていた。男はそのまま手を下ろすと厚志達の方へ走ってくる。
「今この辺りでは伝染病のせいで危険区域に指定されているんだぞ。早く避難所に行くぞ」
「避難所？」
警官の言葉に美樹が反応する。
「ああ、大通りにあるスーパーに皆避難しているんだ、君達も早く避難するんだ」
「避難所！？」「やったぁ！」
康太達が顔を輝かせ抱き合う。だが、厚志だけは渋い顔をしていた。
「さあ、私について来てくれ」

警官が歩き始める中、厚志は考えながら着いていく。
普通のスーパーに高い塀や武器があるとは考えられない。確かに食料面では有利かもしれないが、防御面での不安が残る。
武器も無しに美樹や香奈を守る事が出来るわけがない。すでにバットはさっきの戦いでかなりボコボコに歪んでいた。
今は新しい武器が、強力な武器が必要だった。それを手に入れるためには、警官達に着いていくわけにはいかなかった。
大通りに出て、調度反対側にあるスーパーに行くための横断歩道に差し掛かったとき、厚志は決心した。
「すみません、私はそこには行けない」
「……なんでだ？」
警官が心底不思議そうな表情で振り返る。
「私は自衛官です。うちの寮にいけば武器がある、今の装備ではとてもじゃないが生き残れません」
「だから、立て篭もるんだろう？」
警官は生来の性格なのか、厚志の意見を頭から否定せず聞いてくれる。だから、厚志は続ける。
「ええ、そうです。ですが、スーパーは大量の感染者に襲撃されても大丈夫なようには設計されていません」
「た、確かにそうだが食糧はどうなるんだ」
「確かにうちの寮では不安が残ります。そこは否定しません」
厚志は嘘偽りなく答えた。確かに寮には保存食があるにはあるが、スーパーに比べたら明らかに少ない。
「……でも、俺は美樹を……この子達を守らなければならない。そう……約束しましたから」
「……約束か。だが、君達はそれでいいのかね？」
警官は今度は美樹達を見て言う。
「私は元々厚志さんに着いていくつもりだったし」
「私も美樹ちゃんと同じです」
美樹達は迷わず答えると、厚志の傍に歩み寄る。

「はあ、そうか。まぁ、約束は大事だからな……私も今週末に彼女とデートの約束をしていてな、そこでプロポーズするつもりなんだ。その前にこんな事態になってしまったがね」

「わあ、素敵ですね！」

すかさず女性陣が口々に褒めたり羨ましがったりした。警官は照れ臭そうに鼻の頭を掻いていた。

「ごほん、それは置いておいて、君達はどうするんだ？　別にスーパーに来いと強制するつもりはないぞ」

「んー私は彼に着いて行こうと思います。別に武器を取った後戻ってくるなとは言わないでしょうし」

康太が厚志の顔色を伺いながら言う。厚志がそんなつもりはないと肯定するとスコップを担いで隣に立った。

「わ、私も新橋君に着いていく！」

眼鏡を掛けた女が新橋につられるように手を挙げる。だが、他の三人は渋っている様子だった。

「俺は止めとくぜ、目の前に安全な場所があるんだ、わざわざ危険冒していく意味はねぇよ」

「し、信ちゃんが行かないなら私も行かない……」

チャラ男はやる気の無い様子で答えた。特徴の無い女もそれに続く。

どうやら二人は付き合っているのか、特徴の無い女はずっとチャラ男の腕に縋り付くようにして寄り添っていた。ただ、チャラ男の方はチラチラと美樹の胸やミニスカートから出た足を見ていた。

「……私も、トロいからスーパーに行くわ。どうせ康太は戻って来るんでしょ？」

「ああ、幼なじみの奈穂を置いて行くわけにはいかないからな」

髪の長い女――奈穂はどこか気怠い雰囲気を醸し出しながら康太に視線を向ける。康太はもちろんだ、といわんばかりに頷きながら答えた。その後ろで複雑な表情で二人を見る眼鏡をかけた女がいた。

（……んー複雑そうだな）

厚志は苦笑しつつ、こんな状況でも普通にしていられる彼らを見て少し安堵した。

そして、厚志達は寮に行く組とスーパーに行く組に分かれた。

「……それじゃ、ご武運を」

「あんたらもな、正直言うと仕事上は行かせたくはないんだがな」

苦笑しながら握手を交わす厚志と警官。

「そうだ、自己紹介がまだだったな。私の名前は――」

その時、突然遠くの方から爆音が聞こえてきた。

「おいおいマジかよ！？」

「な、何でこっちに向かってきてんのよ！！」

大学生達が叫ぶ。

爆音の正体は車を巻き込みながら厚志達に走ってくる大型トラックだった。

「とにかく避けろ！！」

厚志は叫び、その場から離れる。

「何だってん――うわっ！？」

警官の声が聞こえ振り返る。

すると警官が足を感染者に掴まれ、動けなくなっていた。今はなんとか噛み付かれないように腰にかけていた警棒を噛ませていた。

「くそ！　こんな時に！！」

厚志が駆け寄り、感染者にバットを振り下ろす。

だが――

「うそだろ！？」

感染者の頭に当たったバットが曲がってしまった。かなり固い音がしたため恐らく手術か何かで金属プレートが入っていたのかもしれない。

まともに振れなくなったバットを捨てる。もはや警棒もほとんど噛み砕かれ、意味を成していない。

「どけ！　どけよ！！」

「君、もういい！　早く逃げないと君まで巻き添えを喰らうぞ！！」
「んな事出来るか！！」
「いいか――うわぁぁぁぁぁぁ！！」
ついに警棒が完全に噛み砕かれ、警官は足に噛み付かれてしまった。
「やめろぉぉぉぉぉ！！」
厚志は警官に噛み付いた感染者の頭を持ち、思いきり捻った。ゴキリ、と嫌な音が響き感染者が首を有り得ない方向に回したまま動かなくなる。
「くそ！　くそ！！」
「噛まれてしまったな……私はもう助からない。行け！！」
「で、でも……」
「いいから行け！　君には守るものがあるんだろう！！」
「……っ！？」
厚志は拳を握り締め、立ち上がる。
「厚志さん！！」
「……えっ！？」
声に振り向くと美樹が駆けて来ていた。彼女の後ろでは香奈が口に手を当てて泣きそうな表情を浮かべていた。
意味が分からないまま厚志は横を向く。そこには先程爆音を上げていた大型トラックがもう目前に迫っていた。
「厚志さん！！」
ドン、と身体を押された。そのまま道に背中をしたたかに打ち付ける。
直後、トラックが厚志の目の前に突っ込んだ。
今のは明らかに美樹の声だった。つまり、厚志を押した美樹がいたのはトラックが突っ込んだ位置という事になる。
「……み、美樹ぃぃぃぃぃぃぃぃ！！」

第7話　救うための別れ（前書き）

前回までのあらすじ‥

美樹がピチューンした。

第7話　救うための別れ

「くそ！　守るって約束したのに！！　美樹ぃ！！」
厚志はマンションに突撃しひしゃげたトラックを叩きながら叫んだ。
だが、返ってくるのは厚志がトラックを叩く音だけ。
「俺は……俺はまた守れなかったのか……」
地面に伏し、溢れる涙を拭おうともせず厚志は呟いた。
「藤堂さん……」
香奈が涙を流しながら背中を撫でる。その手は震えていて、泣き叫びたいのを我慢しているようであった。
「すまない……すまない！」
厚志は誰に向けてか分からないまま謝り続けた。その謝罪は、今ここにいる香奈に向けてなのか、今はいない香織に向けてなのか、自分を庇った美樹に向けてなのか厚志自身理解できていなかった。
ただ、溢れ出る感情を涙と一緒に吐露しているだけだった。
「おーい、厚志さんー！」
「……？」
厚志は誰かに呼ばれて頭を上げた。どこか聞き覚えのある声。
「美樹！？」
「よかった。無事だったんだね」
「美樹……本当に生きて……？」
厚志は美樹が生きているという事実が理解できず、夢や幻覚ではないかと思った。香奈などは呆然として口をパクパクさせている。
トラックに阻まれているため姿は確認できない。だが、その声は確かに美樹のもののように思える。
「当たり前じゃん、ほら下からなら見えるから」
「……本当だな、確かに美樹だ」
トラックのタイヤによって持ち上げられた空間を覗くと、少し擦り傷はあったが笑顔の美樹が手を振っていた。

「でも……どうやって」
「あの警察の人が助けてくれたの……」
「……そうか。美樹、よかった……本当によかった……！」
厚志はさらに溢れる涙を拭いながら笑った。美樹も少し苦笑しつつ笑っていた。
あの警官にどれだけ感謝してもしたりないほど感謝した。
守るはずが守られ、しかもそのせいで失いかけた。
自分には出来なかった事をやってのけた警官を弔いたかったが、トラックの下敷きになったのか遺体の姿は無い。探そうにも今は難しかった。厚志はせめてもの償いから黙祷を捧げた。
「はっ、み、美樹ちゃん。無事でよかった！」
「香奈、私は大丈夫だから。厚志さんをよろしくね」
「……えっ？　美樹ちゃん？」
香奈は一瞬何を言われたのか分からなかったのだろう。キョトンとして聞き返す。
「やべぇ、奴らが集まってきたぞ！」
「早くスーパーに！」
美樹の背後から怒声が飛ぶ。チャラ男と奈穂の声である。
「ごめん、トラックの音で感染者が寄ってきたみたいなの……逃げなきゃ」
「……わ、分かった」
香奈が美樹の微笑みに答えるように笑う。その笑みはぎこちなく、まるで笑い慣れていない者が笑ったような歪みかただった。
「お、おい美樹！　駄目だ一緒に――」
「無理だよ厚志さん。この隙間は通れないし、道路はこのトラックのせいで通れなくなってる」
厚志の言葉を遮るように言う美樹。だが、諦めるわけにはいかなかった。せっかく助かっている事が確認できたにも関わらず、離れ離れになどなれるわけがなかった。
「な、なら俺が――」

「香奈はどうするの？」
「……っ！」
美樹に指摘され二の句が続かなくなる。確かに美樹を守ると約束したが、同時に香奈も守ると約束したのだ。
どちらも大事で、どちらか一方が欠けていいわけでも無い。押し黙った厚志を見かねたのか美樹が一つの提案をした。
「なら、私を迎えに来て。スーパーで待ってるから、自衛隊らしくかっこよく迎えに来てよ」
「……分かった。迎えに行くから待ってろ」
「うん、待ってる」
そう言うと、美樹の姿が消える。
「……絶対に迎えに行くから」
駆けていく足音を聞きながら厚志は静かに決意を口にした。
立ち上がり振り返る。そこには溢れ出そうな涙をなんとか我慢している香奈と不安そうな康太達がいた。
（俺が守らないと……）
気を引き締める。武器が無くなった今は鍛えた身体だけが頼りだった。
さすがに康太からスコップを借りるわけにもいかない。いざとなれば彼に香奈達を守ってもらわなければならなくなるからだ。
「行こう、とにかく一秒でも早く迎えに行かなければならないんだ」
「……はい！」
皆が頷いたのを確認すると厚志は先頭に立って歩き始めた。そのすぐ後ろに香奈、康太は眼鏡の子に縋り付かれながらスコップを構えて着いてきていた。
とりあえず黙視できる範囲に感染者はいない。
（美樹は無事に辿り着けたのか……）
悲鳴などが上がっていないため大丈夫だと思うが、不安は拭い切れない。厚志は頭を振り、今はとにかく一刻も早く寮に向かうために歩を進める。

道すがら今更ながらに自己紹介をしあった。
康太の名は知っていたが、眼鏡の子は田嶋佳子というらしい。人見知りらしく、康太達以外とはあまり話す事が出来ないのだそうだ。
佳子は終止康太の影に隠れていた。どうやらそこが普段の定位置らしい。厚志は少し苦笑しながら康太と佳子、奈穂を含めた三角関係にため息を吐いた。
（面倒な関係だな……）
そう思い、肩を竦め歩く。
幸い寮までの道中は特に感染者に遭遇する事はなかった。いたとしても遠くにいたため早足で移動するだけでよかった。
「ここを曲がったら寮だ……」
あと一つ角を曲がれば寮の前に出る。厚志ははやる気持ちを押さえ、角から寮の前の道を見る。
ここさえ大丈夫ならすぐにでも美樹を助けに行ける。
だが――
「……ここまで来て……」
目の前には絶望が広がっていた。
前には香奈の家の前にいたのとは比べものにならない寮の感染者がいた。明らかに厚志達の装備では突破できない。
幸い寮の周りは堅牢な城塞のように二メートル近い壁が囲い、門は鉄扉が備え付けられていたため、侵入はされていないようだった。
「……ひっ――」
厚志が止まったのを不審がり角から道を覗いた香奈が悲鳴を上げかける。
慌てて彼女の口を塞ぎつつ、厚志は康太達に道を見るように促した。
「……マジかよ」
「……っ！？」
康太が絶望したような表情を浮かべ、眼鏡の子は顔を引き攣らせて彼に縋り付いた。
「さて、どうやって入ったものか……」

「他に入口は無いんですか？」
厚志達のいる場所と一番近い感染者との距離は約百メートルほど。
感染者の足なら数分はかかる距離である。
ただ、今いる場所は直接寮の周りを囲んでいる塀ではなく、その隣の家の塀なのだ。つまり、少なくとも十メートル近くは感染者に近付かなければ塀を登っても意味が無いのだ。
香奈の家に入った時のように隣の家から塀に入る案も考えたが、何を考えているのか分からない上司のせいで民家と寮の間にある塀はやたら高く作られていた。そのため民家の屋根から移動する事は出来ない。
ただ、寮の入口側の塀は厚志が台座になり持ち上げれば何とか越えられる高さである。いつ気付かれるか分からない今の状況でいるよりはマシである。
何より厚志は一刻も早く美樹を助けに行きたかった。
「無い。何故か分からないがうちの量の出入口はあそこしかないんだ。そこでだ皆……聞いてくれ、今から俺が台座になるから俺を足場に塀を越えるんだ」
「……え、でもここはまだ寮の塀じゃないんでしょう？」
すかさず佳子が聞いてくる。厚志は頷きながら自らの案を話始める。
「ああ、だからギリギリまで近付く事になる」
「い、嫌よ！　私はあんな奴らの近くになんか行きたくない！」
佳子がヒステリーを起こしたように自らの体を抱きしめ後退る。
「……俺は藤堂さんの案に乗ります」
「新橋君！？」
康太が震える佳子の肩に手を置きながら答えた。まさか賛成するとは思っていたらしい彼女は驚愕していた。
だが、康太の決意は固いらしく、縋り付くように服を掴む佳子を半ば無視するように話を続けた。
「もし奴らが俺達に気付いたら、佳子ちゃん達が上る間俺が皆を守ります。俺も少しでも早く奈穂を助けに行きたいですから」

康太は厚志の焦りがどこから来るものか理解しているらしく、少し震えながらもスコップを構えた。
助けた際の取り乱し方を見ているため少し不安だったが、スコップを構える康太の目は紛れも無い『漢』の目だった。ただの『男』ではなく『漢』である。
「……頼んだ」
厚志は康太の肩を叩き、彼が頷くのを確認すると香奈に顔を向ける。
「佳子さんから先に上らせてくださいね」
香奈は厚志が口を開く前にそう言った。その瞳に恐れの色は感じられない。
「……ああ、了解」
まるで厚志が何を言おうとしているのか理解したような言葉に、苦笑しながら頷いた。
唯一佳子だけがまだ渋るような顔をしていたが、康太が行くと言った辺りから特に明確に渋りはしなくなっていた。
「いいか、奴らは多分音や匂いに反応する。匂いはどうにもならないが音はなるべく立てないようにしてくれ」
三人が頷くのを確認すると厚志は走り出した。
塀との境に到着すると直ぐさま膝まづく。
目だけで合図して佳子が厚志肩に足を乗せる。完全に体重がかかったのを確認すると一気に立ち上がった。
「っ、きゃあっ」
「馬鹿っ」
いきなり動いたためか佳子が悲鳴を上げた。康太も思わず声を出してしまう。
厚志は視界を感染者に向ける。何体か今の声に気付いたらしくこちらに向かって移動を始めていた。
康太がスコップを構え、厚志を庇うように感染者との間に立つ。
「急げ！」
佳子をさらに手を使って持ち上げる。彼女はバランスを少し崩しな

がらも何とか塀の上に登る。
「次、香奈ちゃん！」
「は、はい！」
膝まづくとすぐに香奈が乗ってくる。佳子と同じ要領で塀に登らせる。
「新橋君！　次は君の番だ！！」
「先に行っててください！　後から行きますから」
「馬鹿か君は！　どの道この高さを一人で登れるわけないだろう！！　君はあの子を助けに行くんじゃないのか！？」
「……っ、分かりました！」
厚志は再度膝まづき、康太が乗るのを待つ。体重がかかった瞬間立ち上がる。
さすがに女の子二人とは違い、わざわざ持ち上げなくても塀の上に登った。
「藤堂さんも早く！」
「スコップをくれ！　それで上がれる！！」
「どうぞ！」
康太が持っていたスコップを受け取り、少し塀から離れる。
「と、藤堂さん！？」
離れた厚志を見て香奈が悲鳴にも似た声を上げる。だが厚志は別に映画みたいに、後は任せたぜ、みたいな事をするつもりでは無い。助走を付けるために離れたのだ。かなりボロいスコップを見て少し不安になる。
（……頼むから折れるなよ）
神にでも祈るように拝むと走り出した。すでに感染者との距離は十メートルも無い。
失敗すれば死を意味する。
「何するつもりなんですか藤堂さん！」
「早く！　奴らもうそこまで来てますよ！！」
「……っ！」

塀に向かって走り出した厚志を見て香奈達が声を上げる。
塀の手前でスコップを地面に突き立て、次の瞬間スコップが立っている間に柄に足をかけて飛ぶ。
「いっけえぇぇ――――っ！？」
突然、足場が無くなる。飛ぶための勢いをそのままに足場を失った足が空を切り、塀に激突してしまう。
「～～～っ、嘘……だろ……」
スコップは真ん中からポッキリと折れていた。予想が大当りしたが、全く嬉しくはなかった。
「藤堂さん、早く捕まって！！」
「早く上がって！」
香奈と康太が手を伸ばしているが厚志は首を振った。
感染者は、もう数メートルの距離まで近付いていた。香奈達に持ち上げられている間に掴まれ、下手をすれば香奈達ごと落ちる可能性がある。厚志も危険だと分かっていて助けてもらおうとは考えられない。
「いい、先に入っててくれ」
折れたスコップの掘る側を広い上げながら言う。
「駄目ですよ藤堂さん！」
厚志は折れたスコップを構えながら香奈の声を無視した。
（美樹……すまん）
声に出さず信じて待っているだろう美樹に謝る。
厚志の前には十数体の感染者の壁が迫っていた。

第7話　救うための別れ（後書き）

はい、結局美樹はピチューンしませんでした。
グレイズ（かすり判定）とってたんです♪

次回予告：
厚志祈祷中・・・・・・

人間って汚いんだＺＥ☆

第8章　一時的な安全（前書き）

祝１００００ヒット！！
ありがとうございます！！
意外に好評で本当にうれしいです。
前回はちょっと混乱していたので、今回からは普通の事を書きます。

第8章　一時的な安全

「なら、私を迎えに来て。スーパーで待ってるから、自衛隊らしくかっこよく迎えに来てよ」
「……分かった。迎えに行くから待ってろ」
「うん、待ってる」
そう言うと、美樹は立ち上がった。
厚志の姿が見えなくなると途端に不安が広がった。震える体を押さえるために自らを抱くように腕を回す。
振り返るとすでにチャラ男と特徴の無い女はスーパーに向かって走り出していた。
「あなたも早く！」
いつの間にか髪の長い女――奈穂が美樹の傍にいた。彼女は手を取ると引っ張るように走り出す。
名残惜しいからかトラックを見るが、厚志の姿も香奈の姿も見られるわけがなかった。
何とか奈穂に歩調を合わせながら走る。　ただ引っ張られるだけではいつかバランスを崩してしまうからだ。
トラックがある道とは反対の道を見ると数体の感染者が美樹達に向けて歩いて来ていた。何とかなる数には思えたが、いかんせん今は武器が無い。
美樹は奈穂達を助けた際にナイフを感染者に刺しっぱなしにした事を今更ながら後悔した。
何とかスーパーの入口にたどり着いたが、そこには十数体の感染者が集まっていた。
「ちょっと、どうやって入るのよ」
奈穂が絶望した表情で入口を見つめていた。
見れば入口だった自動ドアには机や棚などでバリケードが組まれていた。それにより感染者の侵入を防いでいるらしい。

それは同時に、美樹達が中には入れない事を表していた。
武器も無い、逃げ場も無い。奈穂達だけでなく美樹自身も絶望しかけていた。
その時――
「おい君達！」
頭上から声が聞こえた。慌てて見上げると、屋上で少し後退した頭の男が手を振っていた。
スーパーは一階建てなので意外と耳を澄ませなくとも男の声が聞こえた。
「た、助けて下さい！　警察の人に言われて逃げてきたんです！」
奈穂がすかさず返事をした。警察と聞いて思い当たったのか、
「分かった。裏に回るんだ！　従業員用の入口から入れる！」
「あ、ありがとうございます！　さぁ、行きましょう！」
頭を上げるとすぐに走り出した奈穂にそのまま着いていく。手を握られているのだから振りほどきでもしない限りは着いていくしかない。
「やったぜ！　助かった！！」
チャラ男達が我先にと駆けていく。
男の言う裏とは、食材などの搬入口であり、かなり分厚いシャッターが下りていた。そこは明らかに入れないので脇にある従業員用の出入口に向かう。
すると先に行っていたはずのチャラ男達が何故か叫んでいた。
「だから俺達は奴らじゃないって！　早く入れろよ！！」
「お願いします！　死にたくない！！」
チャラ男達が出入口のドアを必死に叩いていた。今は辺りに感染者の姿は無いが、これだけ声を出していればいずれやってくる。
美樹はチャラ男達に近付く奈穂の手を自然にほどき、辺りの警戒をする事にした。
「信二君、沙苗ちゃんどうしたの？」
「奈穂ちゃん、中の人が開けてくれないの！！」

「くそっ、意味分かんねぇ！　さっきのオッサンが嘘吐いたのかよ！？」

ガン、とチャラ男――信二がドアを蹴る。

『……君達が噛まれてないって保証は……無いよ』

くぐもったような声がドア越しに聞こえた。

「ふざけんなよ、てめぇ！　さっさとここを開けやがれ！！」

再びドアを蹴る信二。苛々しているのが目に見えて分かる、いつ八つ当たりされるか分からないため美樹は絡まない事を決めた。

どうやら中にいる男は美樹達が感染者に噛まれているのではないかと思っているらしく、頑として開けようとしないつもりのようだ。

「さっさと開けろよ！！」

（……このままじゃさらに入るのは難しくなるのに）

信二の考え無しな行動に呆れつつ、美樹は思案した。

「信二君落ち着いて、あの私たち警察の人に言われてきたんです。どうか開けてもらえませんか？」

奈穂が何とか信二を宥めるようにして、前に出て話す。話し方や立ち居振る舞いからかなり育ちの良さが滲み出ている彼女ならば――少なくとも信二よりは――話を聞いてもらえるだろう。

「このままじゃ、私たちは本当に噛まれて死んでしまいます。どうか、お願いします」

『……じゃあ、鹿田さんは……どうしたんだ？』

「そ、それは……」

奈穂が返答に詰まる。

鹿田とはおそらく先程美樹を助けて亡くなった警察官の事だろう。

美樹も唇を噛み締める。

『……殺したんだろ』

「ち、違います！　そんな事する訳ありません！」

奈穂が慌てて否定する。どうやら鹿田はかなりこの男の信頼を得ていたらしい。ただでさえ開ける気のなかった雰囲気がさらに濃くなる。

『何やってるんだ早く開けてやれ！』
聞き覚えのある声がドア越しに聞こえる。どうやら屋上にいた男が降りて来たらしい。
『でも……こいつら鹿田さんを……』
『いいから開けろ！　事情は後で聞けばいいだろうが！！』
中から揉めている声が聞こえる。
そんなやり取りに信二苛々し、沙苗は祈るように手を合わせ、奈穂はただ一人落ち着いていた。
あと少しで開くという所であの音が聞こえてきた。
何かを引きずるような音と何かを求める赤子のような呻き声。
見れば、美樹達が通って来た道から感染者が数体現れた。
「感染者が来ました。なるべく早くしてください！」
『わ、分かった！　大介、退け！』
美樹は近くに積み上げられていた角材を拾うと正眼に構えた。一応学校の授業で剣道があるため、ある程度様になっているが、それ以上ではない。
角材の強度は十分とは言えない上、角が立っているため握りが甘い。はっきり言って戦えるわけがなかった。
それでも――
「早くしろよ！　そこまできてるんだ！」
「早く開けて、お願い、早くしてよぉ！！」
「あ、あなた何してるの！？　敵う訳無いでしょ！」
取り乱す奈穂達よりは戦えるはずである。扉が開くのが間に合えばそれでいいのだ。
美樹だって戦いたいわけではない。
（厚志さんが来るまで絶対死ぬわけにはいかない……これ以上あの人に背負わせるわけにはいかないんだから……）
ギュッと角材を握り締める。角が食い込み痛みが走るが、死ぬよりはマシと自らに言い聞かせる。
一番近い感染者があと数メートルの所に差し掛かったとき、待ちに

待った音が聞こえた。
「よし、開いた！　早く入れ！！」
信二と沙苗が男を押し退けるようにして中に入っていく。
「あなたも早く！」
「はい！」
奈穂の声に答え、じりじりと後退りながらドアに向かう。
感染者は普段は動きが鈍いが、人間に襲い掛かる時は素早い。美樹は厚司と出会うまでにそういう光景を見ていたため、今の距離で下手に背を向けて逃げるのはかなり危ない。そのため、どうしても確認しながらになってしまう。
「早く！！」
十分に距離を取った所で走る。
ドアまで数メートルの距離のはずだが、何故か全く近付いていっている気がしなかった。美樹はただ足を動かし、走る。
ようやくドアまでたどり着く。
「た、助かっ――――っ！？」
いきなり肩をすごい力で引かれた。いつの間に近付いていたのか、美樹は背後にいた感染者に肩を掴まれていた。
何とか噛み付かれる事だけは避けるために無理矢理身体を捻り、角材を噛ませた。だが、それも付け焼き刃に過ぎず、ミシミシと音を立てて角材が砕けていく。
（こんな所で……死ぬわけにはいかないのに！）
助けを求めるわけにもいかず――求めても無駄だと思うが――美樹は諦めかけていた。すでに他の感染者達も近付いて来ている。
涙が流れる。それが死に対する恐怖によるものか、厚司との約束を守れなかった事に対するものか美樹自信にも分からなかった。
（……助けて、厚志さん！！）
頭の中で助けを求めた次の瞬間、美樹に組み付いていた感染者の頭にハンマーが振り下ろされた。
スイカが砕け散るような音が聞こえ、美樹の顔に血が掛かる。

「……あ、厚志さん……？」
「君、早く中に行くわよ！！」
崩れ落ちた感染者の後ろにいたのは厚志――――ではなく、奈穂だった。彼女は肩で息をしていたが、唇を引き締めると美樹の手を取り駆け出した。
そのまま男が開けていたドアに滑り込む。背後で鉄扉の閉まる重い音が聞こえた。
「はぁ、はぁ……危なかったわね」
「……あ、は、はい」
美樹はしばし自分が助かった事実を理解できず、呆けていた。
「うわ、ごめんね……うまく倒せなくて」
「い、いえ……」
奈穂がポケットからハンカチを出して美樹の顔に付いた血を拭き取る。その手が震えている事に気付き、美樹は思わずその手を握り締めた。
「……もう大丈夫よ」
「……っ、ありがとう……ございます！」
「うん、私も助けられてよかった……」
美樹はようやく助かったのだと理解し、涙を流しながらお礼を言った。奈穂もまた涙を流し、震えつつも美樹を抱きしめた。
その時、感染者がドアにたどり着いたのか強い力で叩く音が響いた。
「よっと、お嬢ちゃん達悪いけど少し脇によけてくれるかね？」
奈穂に抱きしめられたまま脇に避けると、押さえていたものなのか鉄製の箪笥や机などを屋上にいた男が積み上げていく。
「これでよしっと、ま、鉄扉なんで大丈夫なはずなんだが念には念をな」
「あ、ありがとうございました。入れていただいて」
奈穂がまだ泣いている美樹の代わりにお礼を言う。
「いいって、むしろこの馬鹿がごねたせいでそこの子を危険に曝してすまんかったな」

屋上にいた男は、近くにいた痩せた根暗そうな男の頭を叩いた。
「俺は太田多五郎、このスーパーの店長をしている」
「あ、私は尾井奈穂といいます」
奈穂が少し頭の後退した多五郎と握手を交わす。
多五郎は五十代くらいの顔付きだが、よく見ると典型的な中年のオヤジというわけではなく、かなり鍛えたプロレスラーのようながたいをしていた。快活そうな笑みとこんな状況で助けてくれた事から考えてかなりいい人なのだろう。
「こいつは大槻大介。俺の甥っ子なんだが、うたぐり深い上に根暗でな。さっきは悪かった、代わりに謝る……すまん」
多五郎は自分の影に隠れていた大介の頭を無理矢理押さえて一緒に頭を下げた。
「い、いえ最終的には助かったんですから謝っていただかなくても大丈夫ですよ」
奈穂が一回り以上差があるはずの多五郎に頭を下げられ、慌てて頭を上げさせていた。美樹はそんな二人よりも大介の方に注意を向けていた。
大介は未だ疑いを晴らしていないのか、奈穂や美樹の身体に視線を這わせていた。チャラ男こと信二の舐め回すような視線も気持ち悪かったが、大介の視線も美樹にとっては気持ちの悪いものだった。
「ところで、こんな事を聞くのは嫌なんだが……あんたら本当に噛まれていないんだよな？　いや、大介が噛まれた奴は外の奴らみたいになるって聞かなくてな」
「は、はいもちろん噛まれていません。あなたも大丈夫？」
突然話し掛けられ美樹は一瞬固まってしまう。
「あ、だ、大丈夫です」
いぶかしむ三人の視線を受けて、慌てて頷く。
知り合いのいないこの場で下手に疑わしい行動をしては最悪外に放り出されるか、食料すら与えられなくなる可能性がある。美樹はよかった、と言い笑う奈穂を見て何とか納得してくれたのだと安堵し

た。
「あと、君達を放置して中に入って行った二人は大丈夫なんだろうな？」
「ええ、昨日からずっと一緒にいたので大丈夫のはずです」
「そうか、ならいいんだが……しかし私も咄嗟に出られなかったから人の事は言えんが友達が危ないってのに自分らの安全を優先するとはな……」
「もう、あの子達は！　ちょっと行ってきます、こっちでいいんですよね？」
奈穂が呆れた表情言い、従業員用のドアとは反対側を指差す。多五郎が頷いたのを見ると、走って行ってしまった。
美樹は言われて初めて信二達がいない事に気付いた。辺りを見回してみても搬入されたらしい大量のダンボール箱が積み重ねられているだけだった。音といえばすぐ傍にある従業員用のドアを叩く音くらいである。
「さ、そのドアは鉄製でそう簡単には破られないから、俺達も中に入ろう」
ドアを見ていたのが、不安から来るものだと勘違いしたらしい多五郎が声をかけてくる。
確かに鉄製らしいドアは、数体の感染者に叩かれてもびくともしていない所を見ると多五郎の言う通り頑丈らしい。美樹自身、感染者がすぐ傍にいてドアを叩いている音だけ聞かされては気が滅入りそうだったので彼の提案に従った。
「僕はここにいるから……」
「……いいのか？」
「……また誰か来ても面倒だし……」
「分かった」
大介は近くにあった椅子に座るとそれ以上喋るつもりは無いと言うようにドアに身体を向けた。
「さ、着いてきてくれ」

多五郎がドアとは反対側に歩き始める。先程のやり取りが日常的に行われているのか特に気にした様子は無い。
「そういえばお嬢ちゃんの名前を聞いてなかったな」
「あ、そうでした。相良美樹といいます。柿崎高校に通ってます」
「おう、よろしく！　柿崎ってことは大介と同じ高校か。確か二年のB組だったはずだが」
「え？　そうなんですか？」
握手を交わしながらそんな会話をする。
同じクラスだったので、大介の姿を在りし日の学校内で探すが、全く記憶になかった。
「んーちょっと分からないです……すいません」
「いや、いいよ。俺も認めるくらい影が薄からなー」
「あ、あはは……」
言葉が出ず、美樹はただ苦笑するしかなかった。
叔父にすら影が薄いと言われているのだから、同じクラスでも本当に気付かない存在だったのだろう。美樹は少し申し訳ない気持ちになりながらも、とりあえず大介の事は思考の隅に置いておいた。
「そういえば、ここには何人くらいの人がいるんですか？」
「君達を除けば、俺と大介、後は店員が一人と鹿田さん……君達をここに案内した警官が連れて来た三人だけだ」
「そう……ですか」
警官――鹿田の名前が出て、俯く美樹。
脳裏に、先程感染者に噛まれてなお美樹を救った鹿田の顔が浮かぶ。
唇を噛み締め、何とか涙を流すまいと耐える。
「なあ、悪いとは思うが、鹿田はどうなったんだ？」
そんな美樹を見て何かを感じ取ったのか、多五郎が眉を寄せて聞いてくる。
「……鹿田さんは……私を庇って……」
「そうか……あいつらしいな……その先は言わなくていい……すまんな、辛い事を思い出させて」

「いえ……私が今生きているのは鹿田さんと尾井さんのお陰なんです」

少し無理をしながら笑みを浮かべた美樹を見て、多五郎は複雑な表情を浮かべていた。

「と、もう店内だし湿っぽい話は終わりにしよう」

「は、はい」

美樹が零れそうになった涙を拭うのを見て、多五郎は笑みを浮かべた。

その笑みには、厚志が見せるものとは違う頼もしさが感じられた。

「他の皆は思い思いの場所で休んでる、紹介はしたいんだがいかんせん俺も自己紹介されてないんでな……紹介できるのはうちの店員くらいなんだ」

「いえ、置いていただけるだけで十分ですよ」

「そうか？　じゃあ俺はまた見張りに戻るから、何かあったら屋上まで来てくれ」

美樹が頷いたのを見て満足したのか、多五郎は店内と倉庫を繋ぐドアのすぐ脇にある階段に向かっていった。

多五郎の姿が見えなくなると、美樹は壁に背中を預けてへたりこんだ。

緊張の糸が解け、身体が震え始める。

感染者に実際に襲われ、死の恐怖を自分自身で感じた。確かに感染者を何体か倒してはいるが、それは近くに厚志がいて、何かあっても助けてくれるのだという安心感があったから戦えたのだ。美樹一人では絶対に倒せるわけがなかった。

（……厚志さんっ！）

厚志の手や身体の温もり、固くも優しい声を思い出し、何とか震えを押さえ込もうとする。

（絶対に助けに来てくれる！　約束したんだから！）

最後に見た厚志の泣きそうになりながらも真剣だった表情を思い出し、何とか震えは治まった。

一度深呼吸をして、美樹は自分の身体をギュッと抱きしめた。厚志に抱きしめられた感覚を思い出すように強く抱きしめる。
「もう、あの子達は本当に自分の事しか考えてないんだから！！」
「……っ！？」
いきなりドアが開き、奈穂が現れた。
美樹は自分の身体を抱きしめたまま固まってしまった。そのまま美樹の存在に気付いた奈穂と見つめ合う。
「……うわっ、美樹ちゃん！　あ、ごめんね、こんな時に離れて……って太田さんは？」
「……見張りに戻るって言ってましたよ」
「もう、あのおじさんは！　こんな時に女の子を一人にするなんて！！」
奈穂は腰に手を当てて呆れているのか肩を落とした。美樹は苦笑いしか出来ない。
「……大丈夫？」
「……はい、何とか」
「……そう」
小さくそう言うと、奈穂は美樹の隣に腰を下ろした。
深く聞こうとしない奈穂の気遣いに感謝しつつ、ピッタリとくっついた彼女の体温を感じて少し安堵した。
「ねぇ、一つ聞いてもいい？」
「……何ですか？」
「厚志さんってさっきいた自衛隊の人でしょ？」
「……えっと」
突然の質問に返答に困り、頬を掻く。おそらく先程助けられた際に咄嗟に名前を呼んでしまったからだろう。
「あれ？　違った？」
「……いえ、合ってますよ」
奈穂の表情がからかうものではなく、単純に疑問だから聞いているのを感じ、美樹は素直に頷いた。

「そっかー、彼氏が強いといいよね」
「……え？　彼氏！？」
「あれ？　彼氏じゃないの？」
「ち、ちちち違いますよ！　昨日初めて会った人です！」
動揺して顔を赤くし、わたわた動きながら否定する。そんな美樹の様子を見て奈穂は不思議そうに首を傾げた。
「へーその割にはトラック挟んで別れる時の会話なんかまさに恋人って感じだったけど」
「あ、あれはただ約束しただけですよ！」
ムキになって否定する。それが逆にからかう口実を与えているのだが、動揺している美樹は気付かない。
「ふーん、でも好きなんでしょ？」
「う、う～明言は避けます」
耳まで真っ赤にして抱えた膝に顔を埋める。奈穂は何か羨むような眩しいものを見るような笑みを浮かべていた。
「羨ましいな……」
「奈穂さんは、あの新橋さんが彼氏じゃないんですか？」
「違うのよね……ただの腐れ縁よ……そう、ただの腐れ縁」
どこか寂しそうな表情で奈穂が呟く。
「康太とは幼なじみなのよ。小中高大学まで一緒でさらには住んでるアパートまで一緒なのよ……腐れ縁以外なんて呼び方があるんだか」
「いいじゃないですか」
「……そうね、ただ一緒なだけマシかもね」
ため息混じりに肩を落とす奈穂。明らかにただの腐れ縁では満足していないのが態度から分かる。
「告白したりしないんですか？」
「……え？　な、なんでそんな結論に至ったの！？」
「んー、何となく奈穂さんは今の幼なじみの関係じゃ満足してない感じがしたので」

頬を掻きながら、美樹自身なんでそんな結論に至ったのか分からず困惑していた。それは奈穂に自分を重ねたのか、それとも本当に直感なのか分からない。

ただ、何となく美樹も厚志との関係を今のままにしておきたくないと思っているのは確かだった。

少なくとも香奈と同等程度の信頼を寄せていた。

（……厚志さんと香奈に会いたいな……）

会って二日しか経ってない人物にこんなにも会いたいと願う自分に、美樹は困惑していた。今までに無い、感情に戸惑いながら、奈穂との会話に戻った。

「やっぱり告白したほうがいいかな……？」

「……こんな状況ですし悔いは残さないように動かないと、ですよ」

まるで自分に言い聞かせるように美樹は言った。

奈穂は十秒ほど考えていたが、ようやく決意したのかグッと手を握り締めた。

「よし！　ここを脱出したら告白する！！」

「それがいいですよ」

「だから、美樹ちゃんもここを脱出したらあの人に思いをぶつけるのよ」

「え！？　いや、私は……まだ気持ちが定まってないですから……」

ごまかすように言うと奈穂は不服なのか頬を膨らませた。

大人っぽい雰囲気を醸し出しているにも関わらず、動作が所々子供じみていた。そのギャップが親しみ易さや、魅力なのだろう。事実美樹もあまり警戒せずに話を出来ていた。

「……まぁ、気持ちが定まったら言うのよ。『こんな状況だし悔いは残さないように動かないと』、だよ」

「うっ、それを言われると……」

自分の言葉をそのまま返され、美樹は苦笑してしまう。

奈穂は悪戯っ子のような笑みを浮かべ、美樹の頬を突いてきた。先

程負かされたお返しなのだろう、一々動作が憎めない人だった。
「ま、何はともあれまずはここから脱出しないとね」
「そうですね」
「さ、そうと決まったら腹ごしらえしましょう！」
「はい！」
スカートを叩きながら立ち上がり、美樹に手を差し出してくる奈穂。
その好意に甘えて立ち上がらせてもらう。
「幸いここは絶対安全みたいだし、入口のバリケードも見てきたけどかなり頑丈そうだったしね。年始のバーゲンセールくらいの押しかけがない限りは大丈夫なはずよ」
「そうですか、それなら大丈夫」
例えは微妙だったが何となく意味は分かったので、美樹はホッと胸を撫で下ろした。
「そうそう、康太や藤堂さんが来るまではあんぜ――」
「きゃあぁぁぁぁぁぁ！！」
奈穂の言葉を遮るように、突然店内から悲鳴が上がった。
それは、まるで敵襲を知らせる鐘の音のように店内に響き渡った。

第8章　一時的な安全（後書き）

いやぁ、しかし厚志はどうなったんでしょうね。（作者なのに）
むしろ美樹は本当に女子高生なんですかね～、最近私の中でいい女指数が上がりすぎて女子高生っぽくなくなってきた様な気がします。

ちなみに、死亡フラグなどを私の中では立てているつもりです。

第9章　壊された安全（前書き）

祝１５０００ＨＩＴ！
いつも読んでくださる方、感想、評価、お気に入りに登録して下された方ありがとうございます！
反応があって本当にうれしいです！

今回は、少ないですが、読んでいってくださいね！

第9章　壊された安全

「尾井！　こんなところにいたのか！？」
「信二君！？　一体何があったの！？」
悲鳴が聞こえてからすぐに美樹たちの目の前にある観音開きのドアが開かれ、ハンマーを持った信二が姿を現した。彼は酷く取り乱した様子で、背後を気にしながら続けた。
「先に非難してた奴らの中に感染者がいたんだ、！！」
「そ、そんな……っ！？」
「チクショウっ、噛まれてんなら勝手に死ねよ！　俺のスーパーを危険にさらしやがって！！」
苛々した様子でじだんだを踏んでいた。
身勝手な事を言う信二。いつの間にか彼の中ではこのスーパーは自分の物になっていたらしい。
（本当に身勝手な人だな……武器を持っているなら送ってあげれば危険は無くなるのに……）
信二に呆れを通り越し軽蔑すら感じ、美樹はため息を吐いた。しかも、よく見れば沙苗がいない。どうやら置いてきたらしい。本当に軽蔑しか感情が浮かんでこなかった。
「ま、待ってよ……信……ちゃん……はぁ、はぁ……置いて……行かないでよ」
ようやく息を切らせながら沙苗が追い付いた。彼女の縋るような目は、捨てられまいと必死に愛嬌を振り撒く子供のように見えた。
（……信二って人も駄目だけど、沙苗さんも駄目だ……）
まるで信二以外に頼れる相手がいないかのようにハンマーを持っていない左手に抱き着く沙苗。それは、まさに依存以外の何物でもなかった。
「うぜぇな、離れろよ！　とにかく、裏から出るぞ！！」
「え、えぇ……」

沙苗を引きはがすようにして歩き始める信二。仕切り始めた事は置いておいて、美樹は裏口――ではなく階段に向かった。
「え？　み、美樹ちゃん、どこに行くの！？」
「太田さんを呼んできます！　奈穂さん達は先に行っててください！！」
突然の行動に慌てる奈穂に意図を伝えつつ、美樹は階段を駆け上がる。
踊場に差し掛かった時、いきなり誰かとぶつかった。
「っと、すまんすまん、人がいるとは思わなくて……おお、美樹ちゃんか。大丈夫かい？」
「だ、大丈夫です」
固い胸板に顔をぶつけたため鼻が痛んだが、とりあえず他は大丈夫だった。
「何かあったのか？　すごい悲鳴が聞こえたが……」
「はい、その事を伝えようと思ってたんです。先に非難してた人の中に噛まれていた人がいたらしくて、すでに一人が犠牲になってます……」
「くそ、大輔の言ってた事は本当だったわけか……」
多五郎は心底悔しそうな顔で拳を握り締めた。
その姿を見て美樹は少しホッとしていた。信二とは違い、多五郎が人が犠牲になった事を悲しめる人間だったからだ。
「とにかく様子を見に行こう。出来ればここを出て行きたくはないからな」
「はい！」
先に行く多五郎に頼もしさを感じつつ、美樹は後を追った。
階段を下り、ドアの所まで行くと、何故か奈穂達が立っていた。その中には裏でドアを見張ると言っていたはずの大介の姿もあった。
「おい、あんたらどうしたんだ？　大介まで何でここにいるんだ？」
「裏から逃げようと思ったんですけど、予想以上に奴らが居て……出られそうになかったんです」

奈穂が代表して多五郎の問いに答える。
これで後ろに下がる事は出来なくなった。まだ屋上があるが、食料もない上に、逃げ場すらない屋上に逃げるわけにはいかなかった。
「よし、とりあえず店内の様子を見に行こう。倒せるんなら倒したほうが安全――」
多五郎が店内に続くドアに手をかけた時に、何かを崩したような大きな音が聞こえてきた。
「ど、どうしたんだ!?」
「い、ぎゃあぁぁぁぁぁぁ!?」
慌てて店内に入ると同時に入口の方から悲鳴が聞こえてきた。
美樹よりも頭二つほども違うがたいのいい男が走って来た。
「ゾンビに驚いた人が入口のバリケードを開けてしまいました！奴らが入ってきます！！」
「何だと!?　裏口も奴らがいるから出られないぞ……よし、事務所に行くぞ!!」
ドア脇にあったバールを掴みながら多五郎が叫ぶ。
「事務所ですか?」
「ああ、入口とは逆のとこにある、走れば奴らが来る前に行けるはずだ」
「わ、わかりました!」
今美樹達がいるのは入口と事務所の調度真ん中の位置。右側に走り出した多五郎に続いた奈穂に手を引かれて走り出す。
「て、店長!」
商品棚の影から青年が現れて多五郎に声をかける。
「君達!　事務所に急げ!」
「は、はい!!」
多五郎は止まる事なく声をかける。青年は近くにいた老人をおぶり走り出した。
美樹は青年の行動に感動していた。信二などは、遅れている大介を無視し、腕を掴んでいる沙苗を引きずるように走ってっていた。だ

が、沙苗が腕を掴んでいるためか、妙に遅く、ぎりぎり大介がいるためにびりを逃れているような状況だった。
その必死の形相に嫌悪感すら抱きつつも、美樹自身奈穂に手を惹かれるままに走っている自分を嫌悪した。
入り口を破壊した人はもう喰われたらしく、悲鳴も聞こえない。
バリケードを越えた感染者達は、他の食材などには目もくれず、一直線に美樹達に向かって更新を開始していた。
「よし、早く入れ！！　ドアを閉めたらそこらへんにあるロッカーなんかを積み上げてバリケードを作るぞ！！」
『はい！』
ようやくたどり着いた事務所に皆転がり込むように入る。
十メートルもない店内を走り抜けるだけで息が上がっていた。
「お前達、早くくるんだ！！」
振り返ると、多五郎が、ドアに手をかけたままの多五郎が遅れていた信二達に声をかけていた。
その時、突然沙苗がバランスを崩し、倒れた。彼女の足は感染者に掴まれていた。
一気に遅れた信二達の脇を大介が通り抜ける。だが、さすがに見捨てるのは心苦しいのか、立ち止まった。
「い、いやぁ！！　助けて信ちゃん！！」
沙苗は何とか振りほどこうと足をバタつかせながら叫ぶ。
「は、離せこの馬鹿！！　俺まで巻き込むんじゃねぇ！！」
「え、ぐぅっ！？　し、信ちゃ――――」
沙苗の顔を思い切り蹴り、何とか離そうとしてする信二。そんな行動をされ、彼女は絶望にも似た表情を浮かべた。
「離せっ、離せって！　てめぇなんかここで死ねば――――い、ぎゃあああああああああああ！？」
どうやら完全に感染者に追いつかれたらしく、信二にも感染者が取り付き、首筋に噛み付いた。
「し、信ちゃ――――ぎゃあぁぁぁぁぁぁぁぁ！？」

沙苗もまた足を掴んだ感染者に引き寄せられ、噛み付かれてしまった。
これでもう二人共助けたとしても感染者になってしまうだけである。
「だ、だすげ……」
「いだい……いだいいいいいいい！！」
まだ二人は噛み付かれたままなので生きていた。だが、助けた所で事務所内が危険になるだけだ。
美樹は多五郎の隣まで行き、心を鬼にして叫んだ。
「大規君！　早く！　君が来ないとドアが閉められない！！」
「……あ、ああっぁっぁあぁぁっぁあ！」
大介は美樹の声に反応したのか、はたまた狂っただけなのか分からないが、踵を返して一直線に事務所に飛び込んできた。
「……っ！　閉めるぞ！！」
ドアが閉まると同時に先ほどのがたいのいい男を筆頭に多五郎達がロッカーを積み上げていく。
感染者がドアを叩く頃にはちょっとやそっとではビクともしないバリケードが組まれていた。
「……くそっ！！」
がたいのいい男が壁を殴る。おそらく信二達を救えなかった事に対して怒っているのだろう。美樹自身も嫌な人間だとは思っていたが、実際に目の前で悲惨な最後を遂げられると後味のいいものではなかった。
「とりあえず落ち着け……」
「あなたは悔しくないんですか！？」
「悔しいに決まっているだろう！！　客を守るはずの店長が誰よりも先に事務所にいたんだ、悔しくないはずがないだろうが！！」
多五郎は拳を握り締め、今にも噛み切ってしまいそうなほど唇を噛んでいた。
「お、落ち着いてください！　とりあえず現状、ここは安全なんですよね？」

奈穂が二人の間に入り仲裁する。
「あ、ああ……ただ、このドアも一応鉄製だが裏口ほど頑丈じゃないいつまでもつか分からんぞ」
「分かりました……食糧などは？」
「一応あるが菓子やパンとかだけだ。惣菜はその場で作ってたからな」
「じゃあとりあえずは大丈夫そうですね」
ホッと胸を撫で下ろす奈穂。食糧は確かに大事なものだ、あるのとないのとでは心理状況もかなり変わってくる。
水は通っている上、従業員用に確保してあるペットボトルのお茶もいくつかあるらしい。多五郎の経営方針に感謝しつつ、美樹は逃げ延びた者達に視線を向けた。
今八畳ほどの事務所には。美樹を含めて七人の人間がいた。奈穂に大介、多五郎、がたいのいい男、それと青年と老人である。
人だけでかなり手狭になっている上に、バリケードを築いたためにさらに狭くなっていた。半ば鮨詰め状態である。
皆一様に疲れた表情をしている。特に目の前で信二達が喰われるのを見た大介は膝を抱えてうずくまっていた。そんな中、多五郎だけが何か出来ないと考えているのか、顎に手を当てて眉を寄せていた。
「とりあえずずっとここにいるわけにはいかんな……女性は隣の更衣室で休んでくれ、さすがに男と鮨詰め状態は辛いだろ。仮眠室も兼ねてるからここよりは狭いが寝るには十分なはずだ」
「ありがとうございます」
奈穂がお礼を言い、美樹も慌てて頭を下げる。
「あと、助けが来ます」
「本当ですか！？」
がたいのいい男がいち早く反応する。見た目は怖いのに、明らかに年下の奈穂にも敬語を使っている辺り意外に礼儀正しいのかも知れない。
「本当よ。ね、美樹ちゃん」

「……え？　あ、はい」
がたいのいい男を観察していた所にいきなり声をかけられ、一瞬呆けてしまう。
「自衛隊の人が今装備を取りに行ってるんです。すぐに戻ってくるはずですよ」
「装備？　この辺りに武器がある場所なんかあるんですか？」
「自衛隊の寮がこの近くにあって、そこに武器があるらしいんです」
美樹にさえ敬語を使ってくるがたいのいい男に少し驚きながら、美樹は経緯を説明する。
自衛官である厚司に助けられ、香奈を助けた後に寮に向かう途中で別れた事。寮で装備を整えたらすぐに助けに来ると約束した事。
「厚志さんは絶対来ます」
「ふむ、なら何とかここを死守しなくちゃな」
「……はい！」
多五郎は特に疑う事を否定する事も無く、信じてくれた。美樹の頭を撫でながらあの快活な笑みを浮かべた
「……本当にくるのかの」
「……え？」
呟くような声が聞こえた。声の方を向くと老人が渋い顔で美樹を見ていた。
「腰の重い自衛隊なんぞが来るとは思えんが、仮にその寮に辿り着けていたとしてももう一度外に出るのかの？」
『……』
老人はどこか諦めたような、絶望したような表情を浮かべていた。
この世に未練の無い者の呟き。それは、他の人間にも伝染し、皆一様に表情を暗くする。
だが、そんな中美樹だけは希望を失っていなかった。
「……来ます」
「……ん？」

「絶対に来ます」
毅然とした態度で、自分が全く来る事を疑っていないのを示す。厚志と約束したのは事実なのだ、今疑って希望すらなくしてしまっては救ってくれた鹿田にも申し訳が立たない。
「な、何故そう言えるんじゃ？」
美樹の態度にたじろぎながら老人が聞く。
「約束したからです」
「や、約束!？　そんな曖昧なもので絶対とかぬかしたのか!？」
「はい」
老人が顔を赤くし、声を荒げて威圧するような物言いになる。だが、美樹は全く怯まず、ただ頷いた。
「ぐ、ぬぅ……」
「もういいですか？　あとは待っているだけなので、休ませてもらいます」
「ふん、来なかった時に泣いて喚いても慰めてやらんからの!!」
「ええ、結構です。厚志さんは必ず来ますから」
美樹はそう言うと、まだ怒りの収まらない老人を置いて更衣室に入った。慌てたように奈穂が追い掛けて後ろ手にドアを閉める。
更衣室は六畳ほどの座敷で、靴を脱いで上がるみたいである。奥の壁際にロッカーがこちらに背を向けるようにして壁から部屋中程まで並べてあり、奥が見えなくなっている。どうやらその影で着替えるらしい。もちろん壁からロッカーにかけて掛かるカーテンも用意されていた。布団もあり、かなり整った場所になっていた。
「よかったの？　あんな喧嘩みたいな感じになっちゃって」
「……よくはないと思います。ただ、厚志さんを知らない人が信じてないのが嫌だっただけです」
靴を脱ぎながら老人の言葉を思い出し、信じてもらえなかった悔しさからギュッと拳を握り締めた。
「……本当に彼氏じゃないの？」
「だ、だから違いますって！」

「んーじゃあ夫？」
「お、おおお夫!?　も、もっと違いますよ!!　もう、寝ます！」
ガバッと仮眠用に置いてあった毛布を被り、布団に寝転ぶ。
「ふふ、おやすみ」
「……おやすみなさい」
頭をすっぽりと毛布で被った状態で、答える。
電気を切る音が聞こえた数秒後、隣に奈穂が寝転がったのが気配でわかる。ロッカーで半分に区切られているため布団は一組しか敷けない。必然的に寝るためには同じ布団に入るしかなくなる。
疲れている上に、隣に誰かがいるという安心感からか、美樹はすぐに眠りに落ちていった。

第9章　壊された安全（後書き）

ご意見、ご感想お待ちしております。

え～、信二、沙苗は死んでしまいましたね。
ちなみに某ゾンビマンガを見たときから二人の死に方は決まってました。
個人的にはキャラが死なないほうがいいのですが、ゾンビモノとしてどうしても死なないとお話にならない部分があります。

第１０章　初めての攻勢と救出（前書き）

いつもギリギリですいません。

第１０章　初めての攻勢と救出

「だから生き残っている人達がスーパーにいるから、助けに行くために武器を出してくださいって言ってるんです！！」

机を叩く音と厚志の声が部屋に響く。

今厚志がいるのは寮の中、幹部自衛官用の部屋の中だった。

一時間前、スコップを足がかりに飛び立とうとし失敗した後、もうここで終わりかと絶望しかけた厚志を救ったのは、同期の自衛官――多田隆一郎だった。

隆一郎は自動小銃を手に塀の上から狙撃し、ある程度安全が確保された段階で厚志を塀の上に引き上げた。その後、何とか寮に逃げ込み、すぐに美樹たちを助けに行こうとした。しかし、上官が拒否したため、厚志が怒り、今に至っていた。

「藤堂、落ち着くんだ」

「うるさい！　多田は黙ってろ！！」

厚志は宥めてきた同期の隆一郎に怒鳴る。

今この部屋には三人の人間がいた。厚志と隆一郎、そして上官である。

厚志と同じくらいの身長ながら自衛官が着る服の上からでも分かるほどがたいがよく、髪をざっくばらんに切った隆一郎。彼とは対照的に、上司は禿げ上がり、動くのにかなり邪魔そうな出っ張った腹をした典型的な中年だった。

「赤石二佐！　早く助けに行かないと民間人が感染者に襲われてしまうんですよ！？」

「だから、さっきから言っておるだろう。これ以上弾薬を消費するのはまずいと、上からの連絡もないのだ。動こうにも動けんよ」

「そんなこと言っている場合ですか！？　そもそも、もはや政府はあってないようなものでしょう！！　特に弾薬は地下シェルターに大量にあるでしょうが！！」

「あーうるさいな……そんなに言うなら勝手に行動すればいい。後で命令違反で処罰されても文句は言うなよ」
上官は厚志をハエでも払うかのように手を振る。
「……っ、分かりました。勝手にやらせてもらいます」
「……失礼します」
厚志は沸き上がった怒りを何とか押さえ込み、拳を握り締め、部屋を後にした。隆一郎も律儀に敬礼し、厚志に着いて部屋を出る。
この部屋は上官――赤石学の職権乱用で作られた部屋であり、基本が八畳一間の厚志たちの部屋に対し、最上階を全て一部屋にして、２ＬＤＫの部屋にしてしまっている。
そのため、今いる寝室から一度出て、さらにリビングを抜けないと外に出られない。
下手に文句を言われて後々自由に行動できなくなってはいけないためとりあえず廊下まで出た。
「～～～っ、くそっ！！」
手が痺れるほど強い力で壁を殴る。もちろんこの階だけ学が改造して防音処理しているため、かなりの硬さがあった。
「助けに行く前に怪我してどうするんだ」
「多田、お前は悔しくないのか？　救えるはずの人がすぐ近くにいるのにあんな奴のせいで無駄死にするかもしれないんだぞ」
「分かってる、だから俺も連れてけ、どうせあと二人非番だった自衛官はいるんだから俺が抜けても大丈夫だろうからな」
少しおどけた感じで言う隆一郎。厚志は呆気にとられてしまった。
隆一郎とは同期であり、親友でもある。それ故に多田隆一郎という人間が命令違反をしてまで何かをするという事が信じられなかった。
規律を重んじ、命令には絶対服従。良くも悪くも真面目という言葉が良く似合う青年だったはずである。
厚志が呆然としていると、隆一郎が肩に手を回して笑った。
「はあ……もう、金のために働く意味なんてないんだからな、俺には守るものもないしな、今までの偽った性格は止めたんだ」

「……お前、俺を騙してたのか」
ジト目になりながら隆一郎を睨む。
隆一郎はバシバシ肩を叩き、今まで浮かべた事の無い意地悪な笑みを浮かべた。
「んだよ、いじけんなって、本当はもうすぐ辞める予定だったんだ、辞めたら明かそうとは思ってんだがな、すまん」
「辞めるって……何でだよ」
「ま、今は時間無いんだろ？　準備しながらでも話せるからとにかく装備を取りに行こうぜ」
「あ、ああ……」
エレベータに乗り、地下に向かう。
チン、と軽い音がして、ドアが開く。降りるとすぐ目の前に大口を開けたシェルターが現れた。銀行の金庫にありそうな数十センチの厚さのあるドアが備え付けられている。
厚志は開けっ放しになっている入り口をくぐり、中に入っていく。
「なぁ、何で自衛隊の寮の地下にシェルターがあるんだろうな」
「赤石が秘密裏に作ったらしいぞ。このドアも銀行で使ってるのと同じ核にも耐えられるってやつらしいぜ」
「……」
「何だよ、どうしたんだ？」
黙りこくってしまった厚志に首をかしげる隆一郎。
「……いや、なんかお前に違和感がありすぎてな……」
「うっさいな、気にすんなって！」
「いって！」
厚志以上に鍛えている腕で頭を叩かれこけかける。
「おい、鍛え方が足りないんじゃないか～？」
「お前と比べられたら誰でも足りないと思うぞ……」
「そうか～？」
軽いノリで会話しながら中を進んでいく。シェルターはかなり広く、寮の敷地全体に満遍なく広がっているらしい。

小さな会社のビルくらいの大きさの寮が二棟と、運動用にと広めの庭が用意された寮はかなり広い。かなりの金持ちが立てた庭付きの一戸建て以上の敷地があったりする。
それもこれも、全て赤石が自分が住み易いようにと金策した結果だったのだが、それが逆に功を奏し、こうして避難場所になっていたりするのだからあまり馬鹿には出来ない。
「お、こっちみたいだぜ」
二つほど角を曲がった頃、ようやく目的の武器が収められている倉庫に辿り着いた。
「おい、鍵がかかってないんだが……」
「……マジかよ」
厚志と隆一郎は飽きれかえりながらももう一度鍵を取りに戻る面倒さを考えると今は文句も言ってられなかった。
「多田、時間が無い、急ごう」
「おうさ！」
「……やっぱり慣れないな」
「なんか言ったか？」
「……別に」
銃器が収められている箱を開けながら聞いてきた隆一郎に答える。聞こえないように厚志は小さくため息を吐いた。
「お、ミニミじゃん！　あいつこんなのも用意してたのかよ！　しかも、スコープのおまけ付きだぜ！」
隆一郎が嬉々とした様子でゴツイ機関銃、ミニミを取り出す。
五．五六ミリ機関銃ＭＩＮＩＭＩ――通称、ミニミは軽機関銃に分類される分隊支援火器である。弾倉を付けた状態で八キロはあるが、機関銃としてはかなり軽量化がなされており、個人での持ち運びも行えるため、戦力になる事は間違いなかった。弾も別の箱に大量に入っており、既に装填済みの二百発入り箱形マガジンも数個用意されていた。

「……全く、鍵もかけず、ここにある装備使ってテロ起こされたらどうなるか赤石二佐は分かってないのか？」
「ま、あいつの私利私欲もたまには役に立つってことだ」
ミニミにスコープを取り付けながら隆一郎が答える。
厚志は呆れてものも言えず、ため息を吐きながら別の八九と書かれた箱を開けた。
そこに入っていたのはスリムな形をした小銃が無造作に数丁納められていた。
八九式五・五六ミリ小銃――通称ハチキュウ（公募愛称はバディー）は自衛隊が制式化した自動小銃である。九十年代以降、陸上自衛隊の主力小銃であり、諸外国のアサルトライフルに相当する。高い制動性を有し、また取り外し可能な二脚があり、接地することで安定した射撃ができる。銃床は固定式だけでなく、コンパクトに折りたためる折曲銃床式があるのだが、収められているのは固定式のみだった。
「お！　ハチキュウもあるのかよ！」
ミニミの準備をし終えた隆一郎が厚志が開けた箱を覗き込む。その目は爛々と輝いており、まるでおもちゃを与えられた子供のような雰囲気があった。
「多田、大丈夫なんだろうな？」
「は？　何がだよ」
「……いや、なんか今のお前の目は危ない奴にしか見えないからな」
「何だそりゃ、大丈夫だって……ちゃんと正常だよ。自暴自棄にもなっていない」
初めは笑っていたが、次第に真剣な表情を見せた。いつもの表情に安心しながらも、どこか悲しげな雰囲気を厚志は感じ取っていた。
「そういや、まだ話してなかったな」
「……ああ」
隆一郎はハチキュウにスコープや弾倉を取り付けながら語り始めた。
「俺には妹がいるって話しただろう？」

「ああ、聞いてる」
「その妹な……今年に入ってすぐに死んでしまったんだ……」
「な！？　妹さんって確かまだ中学生だろ？」
「……ああ、そうだ」
突然告げられた事実に目を見開く。
隆一郎の妹は去年中学生になったばかりだった。厚志自身何度か会った事もある。
とても明るい笑みを浮かべる、病気とは無縁そうな元気な少女だったはずだ。いつも真面目過ぎる兄を気遣う優しい一面もあった。
そんな子が――死んだというのだ。
「何であの子が死ぬんだよ！？　あんなに元気だったじゃないか！！」
「胸が痛いって言い始めたんで検査をしたんだ……だろそうしたら心臓に腫瘍が見つかってな、直すには移植するしかなかったんだ」
「そんな……」
隆一郎の両親は妹が生まれた数年後に交通事故で帰らぬ人となった。以来遺産とアルバイトをしながら貯めた金で、妹を育てて来た。親戚は子供を二人も養うだけの余裕がある者がおらず、引き取ってはくれなからったらしい。
高校卒業してすぐに確実に働ける自衛隊に入隊し、以来自衛官として今日までやってきたのだ。
辛い日々だったはずである。友人とも遊べず、勉強も怠れない。自衛官になってからは訓練の日々である。それもこれも妹という存在があったからこそ続けられたのだ。
「ま、そう都合よくドナーが現れるわけもなく……あいつは逝っちまったよ……はは、あいつは俺の人生そのものだったんだがな……」
「多田……」
いつしか隆一郎の手は止まっていた。少し鼻声混じりの言葉に厚志は何を言っていいか分からず、ただ見つめる事しか出来ない。

そんな自分が不甲斐なく、唇を噛み締めた。
厚志と隆一郎が初めて出会ったのは強化合宿だった。たまたま同じ教官の元で学ぶ事になった二人は厚志も両親を亡くしている事もあり、すぐに意気投合した。バディを組み、訓練を熟した。
合宿が終わり、厚志が配属された駐屯地に隆一郎はいた。まさに縁があったとしか言いようがない偶然だった。以来、親友として二人は訓練を熟して来たのだ。
だからこそ、やっと知らされた事実に驚き、また親友に何も出来ない自分が厚志は悔しかった。
「ま、辛気臭い話はここまでだ。何だよその顔は！」
「いてぇ！？」
厚志の顔を見て多田は背中を叩いてきた。あまりの痛みに今まで沈んでいた気持ちが怒りに変わってしまった。
「だから、痛いって言ってるだろうが！！」
「こっちだって男の泣き顔なんか見たくないんだよ、女なら別だがな！」
「……はぁ」
笑いながら親指を立てる隆一郎を見てため息が漏れた。だが、その目が赤くなっているのを見て、厚志はとりあえず空元気に付き合う事にした。
「っていうか急がないといけないんじゃなかったのか？」
「そうだった！　武器の準備は！？」
「準備できたのはハチキュウは二丁に弾倉はたんまり、ミニミは一丁に二百発弾倉が三つだ。拳銃は銃も弾倉もたんまりあるぜ。後はスタングレネードと手榴弾がこれまたたんまりだ」
「銃は俺達の分だけ持っていこう下手に狂った奴がいたら厄介だ。あと打撃武器があるといいんだが……」
他の箱を開けてみるが、せいぜい銃剣しか見つけられなかった。
「これで妥協するしかないのか……」
「おい、何でかいつものスリングやら服があったぜ、あとこれも」

「……ライオットシールド？」
隆一郎が持ってきたのは中世の騎士が持っていたような大きな盾である。複合樹脂を強固に固めて作られたライオットシールドは持つ部位以外透明で、見た目無骨な感じはしない。ただ、あまり駐屯地では見ない武装に厚志は首を傾げた。
「うちにないわけじゃないが、これって基本は警察にあるものじゃないのか？」
「赤石がコネとかで集めたんじゃねえのかな？」
ライオットシールドをしげしげと眺めながら隆一郎が言う。厚志はもうため息すら出ず、肩を竦めただけだった。
厚志達は着替えている時間すら惜しかったため、とりあえず複数のポーチの付いたジャケットを羽織り、ハチキュウの弾倉を詰めていく。腰にもポーチとスリングを付け、拳銃と弾倉を詰める。
「藤堂、ちなみにどうやっていくつもりだ？」
「もちろん徒歩だが？」
「……はぁぁぁ」
あっけらかんと言う厚志に隆一郎は呆れ果てたと言わんばかりに大きく長いため息を吐いた。
「何だ？」
「……お前、それじゃ絶対に辿り着けねえぞ？　俺も今寮にいる奴らを助けた時に戦ったが外の奴らは普通じゃないだろうが、そんな奴ら相手に銃だけじゃ心許なくないか？」
「関係無い、必ず迎えに行くって言ったんだ。何としてでも行く」
「……おい、これ見ろ」
ハチキュウを肩に担ぎつつ、決して引かないという瞳を向ける厚志。隆一郎は少し肩を竦め、ポケットから何かの鍵を取り出した。
「……鍵？」
「ああ、しかもただの鍵じゃない……寮の裏に停めてある七三式トラックのキーだ」
「……パクったのか？」

「失敬な、借りたと言え」
隆一郎は鍵をまとめているリングに指を通しクルクル回しながら悪戯小僧のような笑みを浮かべていた。真面目だった頃の隆一郎を思い返し、厚志は涙が出そうになった。
「さ、行くぞ。時間が無いんだろ」
「あ、ああ……」
ライオットシールドを左手に持ち、加えて厚志と同じようにハチキュウを肩に担ぎ、さらにミニミや弾倉を詰めたバックパックを背負い飄々と歩いていく隆一郎。総重量は二十キロは下らないはずだが、その足取りは普段と全く変わり無い。
（……はぁ、あの頃の多田が懐かしい……）
そんな事を考えながら化け物みたいな筋力で歩いていく隆一郎に着いていく。
一階までエレベーターで上がり、裏口に向かおうとすると、その人物達はいた。
康太と佳子、それに香奈である。
何かを決意したような康太と、その後ろで彼の袖を掴みオロオロとしている佳子。香奈だけは厚志の行動を分かっているのか、特に何をするわけでもなく立っていた。
「奈穂達の所に行くんですよね？」
「……ああ」
「俺も連れていってください」
「駄目だ」
厚志は即答した。素人を連れていくわけにはいかない。自衛隊がいくら実戦経験はほとんど無いとは言ってもやはり一般人とは鍛え方が違う。
いざという時に行動できなければすぐに感染者に喰われてしまう。
そんな事になっては助けた意味が無い上に、他の人間の迷惑にもなる。
「もう……もうあいつと離れたくないんです！　こんな所で待って

るのはもう嫌だ……俺は俺の手で奈穂を守る！！」

「……っ！？」

康太の言葉に目を見開く。

それはかつて厚志が発した事のある言葉。そして、それをどんな気持ちで言ったのかも分かってしまう。

そして、それは同時に佳子にも分かったらしい。悲しそうな瞳で頭を振り、康太の顔を見ると、そっと袖を掴んでいた手を離した。そのまま背を向け、二階に駆け上がっていく。

そんな佳子に気付きながらも、俯いた厚志に隆一郎は何か声を掛けようとして止めていた。伸ばしかけた手を下ろし、彼は厚志の言葉を待った。

沈黙が辺りを支配する。

香奈や言葉を発した康太すら俯いたまま固まってしまった厚志を心配そうに見ていた。

（今度は大丈夫だよな……未果……）

厚志は俯いたまま拳を握り締めた。

顔を上げ、康太を見る。彼は在りし日の自分であり、また、現在の自分でもあった。

大切な誰かを守りたい、その思いを伝えようとするかのように、康太は真っ直ぐな瞳で厚志を見ていた。ついさっき、上司に食ってかかった厚志もまた同じ瞳のはずだった。

「分かった、ただし無茶な事をするなよ。あと、俺達の指示に従う事」

「はい！」

厚志の言葉に康太はキレのいい返事をした。

隆一郎はやっぱりな、と言わんばかりに肩を竦めながら、康太にライオットシールドと拳銃を渡した。隆一郎が軽々持っていたため、軽いと思ったのかライオットシールドを受け取った康太がよろめく。

「っとと……これ、銃じゃないですか」

「ああ、九ミリ拳銃……正式名称はＰニニ〇。九発しか撃てないが、

外人が使うような太いグリップじゃないから持ちやすいはずだぜ」
「は、はあ……」
いきなり説明し始めた隆一郎にたじろぎながら、康太は渡された拳銃をしげしげと眺めていた。
「ただ、やっぱり俺に言わせりゃ拳銃は――」
「とりあえず銃は護身程度だ、なるべく使わないでくれ。君は基本そのシールドで俺達を守ってくれればいい」
拳銃の説明から語り始めようとした隆一郎に割り込み、厚志は銃を渡した意図を説明する。まだ話し足りなそうな隆一郎を無視して、話を進める。
「安全装置は付けたままで、あっちに行ってから外すんだ。このレバーを下げればいい」
「は、はい！」
康太に拳銃の扱い片を簡単にレクチャーしていく。付け焼き刃でしかないのは分かっているが、それでも知っているのと知らないのではかなりの違いが出る。下手に漫画やアニメにある、安全装置がかかっていて撃てない、などという状況になってしまえば共倒れしてしまうからだ。
「……そこは俺に説明させろよな、全く。よし、んじゃ行くとするか……どうせ他の連中は行かないだろうしな」
「……そうだな」
釈然としない気持ちを持ちながらも厚志は隆一郎の言葉に頷いた。
「と、藤堂さん……！」
「……？　香奈ちゃん？」
香奈が厚志を呼び止める。
香奈には寮に入った時にすでに美紀を助けに行く事は話していた。着いてこようとする彼女を何とか説得して、寮で待っている事にも納得したはずだった。
厚志は訝しみながら香奈に歩み寄る。
何かを察したのか、隆一郎が康太の背中を押して裏口に向かって行

った。
「どうかした？」
「……美樹を……美樹をよろしくお願いします」
「……ああ」
今にも涙が零れんばかりに目を潤ませ、香奈が懇願してきた。厚志は他になにも言わず、ただ頷いた。
「……藤堂さんも、ちゃんと帰ってきてくださいね？」
「……っ！？　ああ、分かった」
厚志が無謀な作戦に行く事は説明していた。だが、玉砕覚悟で行く事までは話していなかった。
ただでさえ、一度でも噛まれれば終わりの世界である。安全な場所から出るという事は玉砕も覚悟しなければならない。もちろん死ぬつもりは厚志にも無い。それでも心のどこかで美樹さえ救えればいいと思っていたのも確かだった。
そんな考えを見抜かれ、厚志は本当に香奈には敵わないと再確認した。
「んじゃ、行ってくー――」
「お！　若い娘がおるではないか！！」
厚志の言葉を遮るように下卑た声が聞こえてきた。声の方を向くと、チョコレートを片手に持ち、丸々とした腹を揺らしながら歩く赤石がいた。
「おい、娘！　後で私の部屋に来い、来たら食糧を優先してやるぞ？」
「ひっ！？」
短い悲鳴を上げ、香奈が厚志の背中に隠れる。そんな態度も赤石を興奮させるのか、下卑た笑みを浮かべた。
「二佐、そのチョコレートは何ですか？　この非常事態に決められた以外の食事をする余裕は無いはずですが？」
厚志は香奈を庇いながら赤石に言う。
「ふん、私が何を食べようと私の勝手だ。貴様はその娘を置いてさ

っさと外に行け」
「お断りします。非常事態に常識を欠いた行動をするあなたに彼女は預けられません」
「な、何だと貴様！　先程といい上司への態度がなっていないのではないか！？」
厚志の言葉に憤慨した赤石が顔を真っ赤にして指を突き付けてくる。
「だったらもう少し上司らしい態度を取ってはいかがですか？　少なくとも売春を促すような言葉を発する方を上司とは思えません」
「～～～っ！！　もういい、貴様など外で奴らに食われてしまえ！！」
赤石は身体をぶるぶる震わせてそう言うと、踵を返してエレベーターに乗った。
「はぁ……子供か」
「あ、ありがとうございました」
「いや、気にしないで、香奈ちゃんもあの人には気をつけてね」
「……はい」
不安そうな香奈の頭を撫で、何とか宥める。
赤石の態度はこんな世界になる前からあまり良いものではなかった。女性隊員にはセクハラをする上、自分の地位や名誉が何よりも大事。さらに先程の香奈を見る目。
香奈をこのまま寮に残して大丈夫かと不安になる。
「そうだ、これを持っておいて」
「これ……銃……ですか」
香奈に自分の拳銃を渡した。彼女は受け取った拳銃をおっかなびっくり持っている。
「ああ、殺せ……とは言えない。あの人も『人間』だから……でも、そのまま襲われろとも俺には言えない……だから」
「はい、分かってます。藤堂さんはそういう人ですもんね」
「すまない……」
厚志は香奈に謝る。

明確に何かあったら殺せと言えない自分の不甲斐無さを感じながらも、香奈に拳銃の扱い方を説明する。
「あと、持ってるのは見付からないようにな……何をされるか分からないから」
「分かりました」
そう言ってスカートの中にホルスターを着けていく香奈。
「あと、あの大学生と同じ部屋で鍵を閉めて待っててくれ」
そんな香奈から目を反らしつつ、厚志は付け足した。「はい」
「んじゃ、行ってくる」
「いってらっしゃい」
笑顔で手を振る香奈に手を振り替えし、厚志は裏口を出た。
裏口から出ると目の前に大型トラックが停まっていた。
深緑をベースにした配色の七三式大型トラック。荷台を窓付きの布製の幌が覆い、雨風を凌げるようになっている。最大二十二人まで搭乗が可能で、人員輸送車としても使われている。
「遅え」
「すまん」
荷台に武器を詰め込んでいた隆一郎がようやく来た厚志に文句を言う。
厚志は謝りつつ運転席に乗り込む。運転席は二人までしか乗れないため、必然的に康太は荷台に乗っている。
「そんで、とりあえず入口の奴らをミニミである程度倒して出ようと思っている」
隆一郎が助手席に乗り込みながらプランを言う。その手にはミニミと弾倉があった。
「ま、それしかないだろうな。というか門はどうするんだ？」
「それは、これで解決だ」
隆一郎はまたも悪戯っ子のような笑みを浮かべ、キーホルダーのような物を取り出した。
「何だそれ」

「門を開けるキー」
「……はあ、まあもう何も言わない」
厚志はため息を吐くと、隆一郎からトラックのキーを受け取り、エンジンをかける。
重い音が響き、トラックが振動し始める。
「行くぞ！」
「ああ！」
トラックを運転し、門近くまで移動する。
「俺がある程度掃討したら門を開ける。門を出たらしばらく門の前に停まってくれ！」
「分かった！」
隆一郎が助手席から降り、厚志に指示を飛ばす。返事をしながら、門が開けばすぐに出られる位置にトラックを動かす。
「何で一回停まるんですか？」
運転席と荷台を隔てていた布がめくられ、康太が現れる。康太は塀に上る隆一郎の背中を見ながら首を傾げている。
「あの門はすぐ開かないし、すぐ閉まらない。中にいる香奈達を危険にさせるわけにいかないから、門が閉まるまで防衛しなきゃならないんだ」
「……っ！？　は、は～」
突然鳴り響き始めた銃声に身をすくませながら康太が感心したような声を上げる。
「ま、君はそこにいればいい――よし、動くぞ」
門が開き始めたのを見て、厚志はブレーキから足を離し、アクセルを踏んだ。
ゆるゆると開く門とゆるゆると進むトラック。
厚志の操るトラックは、開く門が調度トラックが通れるほど開いた辺りで通り抜けた。
門の外は血だまりになっていた。二百発もの銃弾を受けた感染者達は頭を撃ち抜かれ、そうでない者も銃弾に巻き込まれて様々な箇所

を欠損していた。それでもその数は、門の前だけが減っているだけで、まだまだいる。

「閉めるぞ！」

隆一郎がトラックの尻が通り抜ける絶妙なタイミングでキーを操作して門が閉じていく。

隆一郎は塀から下り、荷台に乗り込む。そのままトラックの荷台から門を越えようとする感染者を撃っていく。

トラックの荷台はあまり高くなく、いくら事前に隆一郎が倒しているとは言え、周りにはまだまだ感染者がいて、いつ乗り込まれるか分からない。しかも荷台を覆っているのは頑丈な物とは言え、布である。感染者の力で引っ張られれば剥がされる可能性もある。

厚志は祈るような気持ちで門が早く閉まるよう願った。

「厚志行け！」

「っ！　おう！」

待ってましたとばかりに厚志はアクセルを踏む。だが、あまり強くは踏めない。

下は血だまりである。いつスリップするか分からない上、感染者もいるためなかなかスピードが出せない。

しばらく感染者の壁を押すように進んでいたトラックが、ようやくスピードを得始めた。

感染者の壁を抜けたのだ。

後はただ突っ走るだけである。

（待ってろ美樹！　今行くから！）

逸る気持ちを何とか押さえ込みながら厚志はアクセルを踏み込む。

その時、目の前に厚志と美樹を離れ離れにした事故車が現れた。だが、厚志はさらにアクセルを踏んだ。

「捕まってろ！」

厚志はそれだけ叫ぶと事故車に突っ込んだ。トラックの勢いに負けた普通車が弾け飛ぶ。

もちろんトラックも無事ではない。バンパーがひしゃげていたが、

今の厚志には関係なかった。
「ばっかやろう！　何やってんだ！？」
「見えた！」
「おい！　人の話し聞けよ！？」
隆一郎の言葉を無視して、厚志はスーパーの駐車場にトラックを乗り入れ、入口まで走らせる。
「おい、嘘だろう？」
そこには破壊されたバリケードらしき物を残し、ぽっかりと口を開けた入口があった。
「美樹！！」
「待て厚志！　武器を持って行くんだ！！　まだ中で篭城してるだけかもしれないだろうが！」
「～～～っ、分かった！」
厚志は急いでハチキュウを隆一郎から受け取ると、初弾が装填されている事を確認する。
「……よし、行くぞ」
「おい」
「はい」
二人の返事を聞き、スーパーの中に入る。
入口付近に感染者はおらず、奥の方から呻き声が聞こえてくるのみだった。
厚志は隆一郎にアイコンタクトすると、奥に向けて歩き出した。
隆一郎がその厚志の背中をカバーするように左右を康太が後方を確認しながら着いてくる。
奥には十数体の感染者がある部屋に向けて殺到していた。
（あそこに美樹がいる！）
厚志は次の瞬間ハチキュウを構えていた。
軽い音が響き、一体の感染者が倒れる。続いて二回三回と銃声が響き、感染者がどんどん倒れていく。
「す、すごい……」

「あいつの射撃の腕はピカ一だからな」
あと二体を残すという所で厚志の手が止まった。
「あ……そんな……信二？　沙苗ちゃん？」
「……っ」
背後から康太の絶望したような声が聞こえてきた。厚志もスコープを覗き込みながら唇を噛み締める。
そこにいる感染者は、康太達のサークル仲間で、美樹や奈穂と一緒にスーパーに逃げたはずの信二と沙苗だった。
見覚えのある顔が感染者となる。厚志は指が震えた。思わず構えていた銃口を下げてしまう。
蘇るのは救えなかった女性。自らが止めを刺した香奈の母親の顔。
「……っ！！」
もう一度構えるが、その指はどうしても動かなかった。
目の前に二人が迫る。もう後一歩で噛み付かれてしまう距離。
次の瞬間、二人の頭が弾けた。
振り向くと苦い顔をした隆一郎が銃を構えていた。
「何やってるんだお前！　死ぬ気かよ！？」
「……すまん」
「いい、とりあえず中を見よう」
「あ、ああ……」
隆一郎に急かされ、感染者が殺到していた部屋に入る。康太は信二と沙苗の死体の傍にいたため、二人だけで入っていく。
ドアは半分取れ、中は凄惨な光景だった。
血が飛び散り、感染者のものなのか、人間のものなのか分からない死体が転がっていた。
そして、これだけは言えた。
そこに生きた人間はいない。
「……そん……な」
「藤堂……」
隆一郎が渋い顔をする。何か言葉を選んでいるような顔で厚志を見

る。だが、動転している厚志にはそんな事は関係がなかった。
「美樹！　返事してくれよ！！　美樹ーーーーーー！！」

第１０章　初めての攻勢と救出（後書き）

ご意見、ご感想お待ちしております。

ついに出ました！
赤石いやな奴ですね。
まあこういう上司は一人はいるのかなと思って書いてます。
別に作者が自衛隊に偏見を持っているわけではありませんので、あしからず。

第１１章　二度目の届かぬ手（前書き）

いつもギリギリな作者です。
自分で更新日決めておいてギリギリで申し訳ないです

第１１章　二度目の届かぬ手

「美樹ーーーーーー！！」
厚志は声の続く限り呼んだ。
声に反応して感染者が寄ってくる事など関係なかった。ただ、返事の無いという事実を認めたくなくて、無我夢中で名前を呼ぶ。
今の厚志の心を支配しているのは、また失うのか、という恐怖だった。
手が届いたと思ったのに、ようやく守るという約束を果たせたと思ったのに。
約束した相手はいない。
もう、いないのだ。
「美樹ーーーーーー！！」
もう一度呼ぶ。
「俺は辺りの安全を確保してくるよ……あいつも放っておけないしな」
隆一郎は見ていられなくなったのか、部屋から出て行った。『あいつ』とは康太の事なのだろう。確かに康太も仲間を無くして意気消沈していた。誰かが見ていないと危ないだろう。
だが、そんな風に人を気遣う余裕は、今の厚志には無かった。
「クソッ！！」
壁を殴り付ける。
頭のどこかで諦めようとする考えが浮かぶ。もう美樹は死んだのだと、この死体の中に埋もれているのだと。そんな考えを振り払うように壁を殴る。
答える者も、音に反応する者もいない。
血だまりの中、呆然と立つ。
揺るぎようの無い現実。反らしたくとも反らせない視線。
あの時と同じ赤。

あの時と同じ――
『……るの？』
声が聞こえた気がした。
守ると誓ったあの子の声が。だが、厚志は気のせいだと思った。
この部屋以外に部屋は無い。あるのは死体と崩れたロッカーだけ。
『……誰か！』
「……っ！？」
また、聞こえた。
遠くから聞こえるような、壁か何かを挟んでいるような声。
（……壁？）
厚志は恐る恐るロッカーがある奥の壁に耳を当てる。試しに壁をノックしてみた。
するとコンコンとノックが返ってきた。
まさか、と思いつつも今度はコンココンコンと変則を加えてノックする。厚志がした通りに返ってくるノック。
「……美樹？」
厚志は恐る恐る呟くように声をかける。小さ過ぎて届くはずの無い言葉。だが、それに答えるように声が返ってきた。
『厚志さん！！』
「……美樹！　そこにいるのか！！」
『うん……うん、いるよ……いるよ……！』
美樹の声は倒れたロッカーの後ろから聞こえていた。よくよく見ればロッカーの後ろに人一人がギリギリ通れるくらいのドアがあった。
「今開けるからドアから離れていてくれ」
『うんっ』
美樹の返事を聞くと、先程までの無力感など忘れてしまったかのように、厚志の身体は動いた。ロッカーを何とか離し、ドアが開くようにする。
ドアを開けると、目の前に大粒の涙を浮かべながらも見慣れた笑顔を浮かべる美樹が立っていた。

「厚志さん！！」
「っと、よかった……美樹が無事で」
飛び付いてきた美樹を抱きしめ、その柔らかさを、温かさを、鼓動を感じる。それだけで厚志は胸が一杯になり、さらにギュッと抱きしめる力を強めた。
もう離さないと、絶対守ると誓うように厚志は美樹を抱きしめた。
「絶対来るって……信じてた……私、厚志さんを信じてたよ……っ」
「ああ……遅くなってすまない」
安心したのか嗚咽を漏らす美樹の背中を優しく撫でる。
気付けば厚志も涙を流していた。
守れたという安堵から、生きているのだという実感から感情が留まらない。ただ溢れるのに任せて涙を流した。
「……おい、何やってんだお前は……」
「……うわ」
二人の時間を邪魔するような、冷ややかな声が聞こえた。厚志がそちらに顔を向けるとじと目の隆一郎と目を丸くした康太が立っていた。
「……うわっ！？」
隆一郎達の登場に驚き、慌てて美樹から離れる。美樹が名残惜しそうな表情をしていたが、厚志は気付かなかった。
「せ、生存者を見つけた……そっちはどうだ？」
「いや、他にはいなかった。一応入口に簡易のバリケードを作ったが、いつまでもつか分からないから長居は出来ないぞ」
「……ああ、分かった。美樹、他の生存者もそこにいるのか？」
厚志が振り向き、美樹が出てきたドアを指差す。
美樹は何故か苦虫を噛み締めたような表情で頷いた。
「うん、いるにはいるけ――」
「奈穂は？　奈穂は無事ですよね！？」
「……っ、奈穂さんも……います」
康太は美樹の表情の暗さに気付いていないのか、奥の部屋に駆けて

いく。
「……俺は入口で奴らが入ってこないよう見張ってるわ」
「……ああ」
何かに感づいたのか、隆一郎は苦い顔をして部屋を出て行った。厚志も嫌な予感しかしないが、生存者を確認しないといけないため、奥の部屋に足を向ける。
美樹が近付いてきてギュッと厚志の腕にしがみついた。
「……美樹？」
厚志は首を傾げて、美樹を見る。だが、美樹は小さく奮えながら俯いていた。
美樹の態度から、明らかに何かがあった事が伺える。それが何なのか分からないが、あまりいい事には思えなかった。
もしかしたら、信二と沙苗が感染者になっていた事に関係があるのかもしれない。だが、何故か厚志にはそれだけではないように思えた。
「美樹、何があ――――」
「私に近付かないで！！」
厚志が今まさに何があったか聞こうとした時、部屋の奥から声が上がった。
鬼気迫るような声に慌ててロッカーに隔たれた奥のスペースに向かう。手前のスペースに三人の人間がいたが、今は奥のスペースで起きている事を優先した。
奥のスペースには、布団の上で上体だけ起こした奈穂と狼狽した様子の康太がいた。
「な、奈穂……何言ってるんだ？」
「近付かないでって言ってるの！　せっかく助けに来てくれたのにごめんね。私は一緒に行けない……」
「じょ、冗談はよしてくれよ……」
さらに狼狽した康太が何とか近付こうとする。だが、奈穂に睨み付けられ歩みを止める。

「何があったんだ？」
「そ、それが奈穂が寮に行きたくないって……」
厚志は訝しみ、奈穂を見る。
上体だけ起こし、両手で掛け布団を引き寄せている。まるで何か見られたくないものが布団の下にあるかのように。
「……まさか……」
「……多分藤堂さんが考えている通りだと思います」
そう言うと、奈穂は諦めたのか、掛け布団から手を離した。その下から現れた腕には包帯が巻かれていた。それも赤黒く変色し、明らかに傷を負っている事が分かる。
「噛まれちゃいました」
そう言い、奈穂はどう笑っていいか分からない子供のような笑みを浮かべた。
美樹の体が強張るのを感じる。恐らく奈穂が噛まれた事に彼女が関係しているのだろう。
厚志は聞けばどうなるか理解し、また黙っておこうとしている奈穂の意志を汲み取って黙っていた。
だが、幼なじみであり、誰よりも奈穂を大切に思っているであろう康太は違った。
「何でだよ！？　何で奈穂が噛まれたんだよ！！」
事実を受け入れきれない子供のように頭を振り、康太が叫ぶ。奈穂はただ困ったように笑っていた。
「……ごめんなさい」その言葉に辺りがしんと静まり返った。
言葉を発したのは美樹。
美樹はそのまま何度も謝り続ける。
「美樹ちゃん、謝る事なんてないわ」
「でも、私のせいで……」
「……どういう事だ？」
康太がまるで仇でも見るような目で美樹を睨む。俯いたままの美樹はそんな視線には気付かず、続ける。

「奈穂さんは――――」
「美樹ちゃん、駄目、言っちゃ駄目」
「……っ、奈穂さんは私を庇ったせいで噛まれたんです」
美樹は奈穂の忠告に一瞬迷ったのか言葉を詰まらせたが、そのまま続けた。
「……っ！！」
怒りとも絶望とも取れる表情を浮かべ、康太が美樹に近付こうとした。美樹は何をされても仕方がないという、ある種の諦めを孕んだ表情で近付いてくる康太を見ていた。
「……どいてください」
気付けば、厚志は二人の間に割り込むようにして立っていた。康太が敵でも見るような視線を向けてくる。
二人の意志はあまり褒められるものではないが概ね合致していたはずだ。だが、それではいそうですかと美樹を殴らせるわけにはいかなかった。
「それは出来ない」
「～～～っ、何故ですか！？　その子のせいで奈穂は……奈穂は！！」
「それでも……出来ない」
涙を流す康太に胸倉を掴まれるが、厚志はそれでも首を振った。背後で美樹が震えているのが分かる。
美樹を守ると誓ったから守る。それは厚志の曲げられない誓いだった。
それでも、守りたい人を守れなかった康太の気持ちも理解できるから、厚志はただ立っている事しか出来ない。
「アンタが退かないなら！！」
「……銃っ！？」
胸倉を掴まれてもびくともしない厚志に業を煮やしたのか、康太が拳銃を抜いた。美樹が身体を固くする気配を感じた。
厚志は額に向けられた銃口を静かに見詰めた。銃口はカタカタと奮

え、いつ引き金が引かれるか分からない。
緊迫した空気が辺りを支配する。厚志達以外の生存者も固唾を飲んで見守っていた。
「康太……もう止めて」
空気を壊したのは奈穂だった。
噛まれてから数時間経っているためかかなり辛そうだが、それでも立ち上がり、康太の銃に手を添えた。
「っ！　奈穂……」
康太が銃口を奈穂に押されるままに下ろす。
厚志はどっと汗が吹き出るのを感じた。いくら普段から銃に触れる機会が多いとはいえ、銃口を向けられる事は無い。扱っているからこそどれだけの威力があるのか分かっている。
もし奈穂があと数秒遅ければ厚志は死んでいたかもしれない。気付かれないレベルでホッと息を吐いた。
「康太、これ以上私の想いを壊さないで」
「……想い？」
「美樹ちゃんを救いたい、この身に変えても救いたいって想いよ」
「な、何だよそれ……！」
康太が歯を食いしばり奈穂を見る。彼女は静かに、荒い息を吐きながらも凛として康太を見詰めていた。
「お願い」
「……っ、くそ、くそ！　やっと、やっと決心が付いたのに、何だよこれ！！」
もう一度「くそ」と言うと、康太は力の限り壁を殴った。そのまま壁に背を預け、ズルズルと座り込んだ。奈穂はそんな康太の頭にそっと手を置いた。
「……すいません、康太は昔から私の事となると見境がなくなるみたいで」
申し訳なさそうでありながら、嬉しそうに奈穂に厚志は何も返せない。

押し黙ったまま、何を話していいのか迷っていると騒がしい足音が聞こえてきた。
「藤堂！　まずい、奴らが大群できたぜ！！」
「本当か！？　多田、生存者を早くトラックに！！」
「ああ、こっちだ！　早く！！」
厚志達を除いた生存者が隆一郎に誘導されていく。
「……康太を連れて行ってください。私は……行けませんから」
厚志は何か手は無いのかと頭で考えたが、答えは出なかった。未だ原因の分からない、ウイルスなのかさえ分からないこの病をただの自衛官である厚志が考えた所で答えが出るはずがなかった。
それでも何か、康太だけでなく奈穂も救える手立てはないかと思案する。
「……俺は残る」
「康太！？」
見れば康太がいつの間にか立ち上がり、こちらを見ていた。その瞳は絶望や諦めの色では無く、決心した男の熱い色だけが宿っていた。
「駄目、駄目よ！　ここにいたら康太まで死んじゃうじゃない！！」
「構わない、俺は最後までお前の傍にいる」
「……なっ！？」
瞬間、奈穂の頬が真っ赤に染まる。
「な、何言ってるのよ！　私が死んだら外の奴らみたいになるのよ！？」
「そうだな」
「そうだな、って意味分かってるの！？　私が康太を襲うって事なのよ！！」
奈穂が叫ぶが、康太は絶対に譲る気は無いのか、じっと聞いているだけだった。
厚志達も何を言っていいのか分からず、黙っている事しか出来ない。
「私はそんなの嫌！　康太を私が殺すなんて！！」
「大丈夫だ、奈穂は俺が……殺す」

「っ！！　……はぁ」
康太の言葉で、奈穂もまた揺らぎ無い決心に気付いたのか、肩を落しため息を吐いた。
「……分かった、もう何も言わないわ……ったく、昔から頑固な所は変わってないんだから……」
「当たり前だ、奈穂のお節介もな」
そう言うと、二人は笑った。死しか無い状況で、二人は笑い合ったのだ。
「そういうわけです。俺達を置いていってください」
「……分かった」
厚志に二人の中を引き裂く事は出来なかった。二人とも寮に連れ帰れば、確実に奈穂によって危険にさらされる。それだけは避けたい。だが、同時に救える命を放置していく事も厚志にはしたくない事だった。
それでも、二人が笑い合っているのを見てしまった。もう絶対に離れないのだと、繋いだ手を今まさに見ている。
「すみません、我が儘を言って」
「いい、ちゃんと伝えろよ」
「はい」
康太は短く返事をし、頭を下げた。
「美樹ちゃん、後悔しないようにね」
「……はい」
奈穂の言葉に、美樹は無理矢理搾り出したように答える。そんな美樹を見て、奈穂は柔らかい笑みを浮かべた。まるで、自分達が行けなかった未来を託すように。
「おい！　早くしろ！！　もうそこまで来ている！！」
入口の方から切羽詰まった隆一郎の声が聞こえてくる。
「……それじゃあ、俺達は行きます」
「はい、御達者で……」
笑顔で手を振る康太達を残し、厚志は美樹の手を引いて入口に向け

て走り出した。振り返るわけにはいかなかった。振り返れば、未練が出来てしまう。すでに募っている未練をこれ以上募らせれば、厚志はあの二人を連れて行こうとしてしまう。それが分かっていたからこそ、厚志は振り返れなかった。

トラックにたどり着き、荷台に美樹を乗せ、自らも乗り込む。運転席と荷台を隔てる幌に取り付けられた簡易窓を開け、隆一郎に声をかける。

「……発車してくれ」

「……了解」

隆一郎の返事と同時に、トラックは発進した。次の瞬間、何かにぶつかったのか、軽い振動が身体に伝わる。

感染者を潰したのだろう。あまりいい事では無いが、そうせざるしかないほど近付いていたという事だ。

荷台の一番後ろに座っていた美樹の隣に座る。するとすぐに縋るように抱き着いてきた。

厚志は宥めるために美樹の背中を摩る。

（また……救えなかった……）

ギリッと歯が軋むほど噛み締める。嗚咽を漏らす美樹の背中を摩りながら、遠ざかっていくスーパーを見た。

もうほとんど見えなくなったスーパーには二人がいる。厚志がもう少し早くたどり着けていれば救えたかもしれない二人が。

荷台から見えなくなった頃、乾いた銃声が二つ響いた。

第１１章　二度目の届かぬ手（後書き）

ご意見、ご感想お待ちしております。
誤字、脱字も報告していただけるとすぐ直しますので、頂けたら嬉しいです。

さて、また厚志さんは人を救えませんでした。
今回は直接は関係ないにしろ、それでも彼はその事を自分のせいだと背負っていこうとします。
そのうち潰れそうですね。作者なら香織さんの時ですでにノイローゼです。

さて、次回は寮に戻ります。あの人とかがしっちゃかめっちゃかしちゃいます。

幕間　あの頃のままの笑顔で（前書き）

どうも、さんざん引っ張っておいて今更上げた厚志達と別れたあとの康太と奈穂の話です。

状況が状況ですので、ハッピーエンドではありません。

前話の終わり方が良かったという方は読み飛ばしていただいて結構です。

幕間　あの頃のままの笑顔で

「……行ったな」

走り去るトラックを見送り、康太は隣に立つ奈穂に顔を向けた。

「……うん」

頷く奈穂の顔色はあまり良くない。すでに出血も治まり、まるでもう問題ないように見える。だが、ウイルスなりなんなりが確実に奈穂の体を蝕んでいるのは確かだった。

「戻ろう」

「……うん」

いつも柔らかな笑みを浮かべていた奈穂は、疲れたような、渇いた笑みを浮かべていた。何故そんな風に笑うのか分かる康太の胸は直接手で掴まれたように、ギュッと締め付けられた。

簡単にバリケードを直して事務所に向かう。感染者は大きな音を出し、多数の人間を乗せたトラックを追って行ったため、まず侵入される事は無いだろう。

それでも、これからする事を邪魔されたくなかった。

事務所は血まみれのため奥の更衣室兼仮眠室に向かう。先程奈穂が寝ていた布団を座布団代わりに座る。

「食べる？」

「……ああ、貰うよ」

厚志達が急いで逃げたため、スーパーには大量の食糧があった。そんな中から奈穂はわざわざおはぎを持ってきていた。

昔から康太が好きな物だ。祖母が作ったおはぎを奈穂と二人で食べるのがほとんど習慣になっていた。

甘過ぎず、柔らか過ぎない祖母のおはぎをよく二人でねだった。たった十年前の事が、遠い昔の事のように感じる。

「おいしいね」

「……ああ」

売れ残りらしいおはぎは祖母のものほどではなかったが、美味しかった。案外スーパーも捨てたものじゃ無いと思うほどに。
「けほっ」
「！　大丈夫か！？」
「大丈夫大丈夫、ちょっとむせただけ」
「そうか、とりあえず水でも飲んでおいたほうがいいな」
そう言うと康太は立ち上がろうとした。だが、奈穂に袖を掴まれ、また腰を下ろす。
「ここにいて」
「……分かった」
康太は諦め半分に頷いた。泣きそうな奈穂などいつ以来だろうと思い、まじまじと見てしまう。
「こんな風に二人っきりになるのは久しぶりだな」
「うん、いつもは信二君や沙苗達がいるからね」
「……そうだな」
康太は渇いた笑いしか浮かべられなかった。つい先程その友人達は死んだ。いや、死んでいたのだから死んだというのは可笑しいのだろうが、本当の意味で死んだのだ。
チャラチャラしながらもなんだかんだ康太達と付き合っていた信二。彼にくっついて友人になった沙苗。恐らく奈穂は知っているだろうが、康太は二人の最後を聞こうとは思わなかった。
「芦谷には悪い事したな……」
「……そうね、あの子康太が好きだしね」
「……は？」
「やっぱり気付いてなかったんだ……」
奈穂は頭を振り、深いため息を吐いた。
「あんだけ好き好きオーラ出してて気付かれないなんてあの子も可哀相だな～」
「……うっさい」
ケラケラと笑う奈穂にふて腐れる。こうして見るともうすぐ死ん

でしまうとは思えない。康太はもうすぐ見られなくなるその笑顔を焼き付けておこうと、じっと見つめる。

二人の時しか見せない意地悪な笑み。普段お姉さん然として皆のまとめ役をしている奈穂は本当は子供っぽいのだ。しかし、そんな裏の顔を知るのは康太と奈穂の家族だけだった。

だからこそ、余計にいつでも思い出せるように、それこそ死んでも思い出せるようにじっと、じっと見詰めた。

「ちょ、ちょっと見過ぎよ！」

「別に減るもんじゃないしいいだろうに……」

顔を反らした奈穂に視線を向けているとボソリと呟いた。

「だって二日もお風呂入ってないし、お化粧もしてないから」

「……くだらないな」

「く、くだらないってなによ！　私はいつもいつも気にしてたの……ゲホゲホッ！」

「っ！　大丈夫か！？」

いきなり咳き込んだ奈穂の背中を慌ててさする。だが、咳はなかなか止まらず、たんが絡まったような嫌な咳に変わっていく。

十数回ほどで咳は何とか止まった。

奈穂が口に当てていた手にはべっとりと赤黒い血が付いていた。

「ゲホッ……ごめん……もう駄目かも……」

「……ああ、無理するな」

康太はなるべく楽になるようにと奈穂を布団に寝かせ、自分は壁を背もたれにした。すると、奈穂が起き上がり、康太の隣に同じように壁に背中を預けて座った。

「寝てろって」

「嫌よ……今だからこそ……甘えたいのよ」

「……分かったよ」

康太は奈穂の頑なな雰囲気に負けを認め、やりたいようにやらせる事にした。今がチャンスとばかりに奈穂は康太の肩に頭を乗せた。

「ねぇ……そういえば……ずっと私と……一緒だったから見た事…

…無かったけど、あんた……彼女とかいないの？」
「は？　いきなりなんだよ」
「だから……彼女とかいないのかって……聞いてんの……」
ちらりと奈穂の方を見ると、バッチリ目が合った。思わず顔を逸らしてしまう。いつの間に見ていたのか分からないが、奈穂の目は真剣なものだった。茶化しているのではなく、本気で聞いているのだろう。
康太は気恥ずかしさから頬を掻く。
「……いないよ」
「……え？」
「いないって言ってんの！」
「……そっか……全く、康太は……私がいないと彼女も……作れないの？」
「そもそもずっと一緒にいるんだからお前が気付かない訳無いだろうが！　そういうお前はどうなんだよ……彼氏とかいないのかよ」
康太は尻すぼみになりながら聞いた。少し怖かったのだ。ここでもし、奈穂に「いる」と言われたらどう反応していいか分からなくなる。
「……いないよ。いるわけない……じゃん」
「そ、そっか……」
「そうだよ……私が……好きなのは今も……昔も……康太一人……なんだから」
奈穂が搾り出すような声で言う。
康太は「いない」と言われただけでホッとしていた。だから、奈穂の告白は聞いてなかった。
「ん？　何か言ったか？」
「……」
「な、なんでしょうか、な、奈穂さん？　その、視線が怖いんですが……」

奈穂の射殺すような鋭い視線に思わず敬語で喋ってしまう。
「はぁ……康太っていっつも……そうだよね」
「……えっと、状況読めないんですが」
「肝心な……時に話を聞いていない……って事……」
「うっ……申し訳ない……」
「ま、そんなとこも含めて……好きなんだけどね」
「……え？」
今度ははっきりと聞き取れた。聞き取れはしたがその意味が分からず呆けてしまう。
「また……聞き逃したの……？　全く……康太は……私はね……昔も今も……康太が好きだよ……」
「……本当か？」
「……ごめん……迷惑だよね……」
「んなわけあるか！！」
「康太……？」
奈穂は死にかけの状況での告白を卑怯だと思っているのだろう。
だが、康太にはそんな事は関係なかった。
「俺だって……俺だってな……」
勇気の無い自分を恥じ、先に告白させてしまった奈穂に罪悪感すら感じている。
男である康太が言わなければならない事だった。ただ関係が変わってしまうのが怖くて出せなかった気持ち。
奈穂に告白されてようやく決心が付いたなどという、情けない理由だったが、康太は目一杯息を吸い込み、あらん限りの声で今まで表に出さなかった気持ちを叫んだ。
「俺だって、奈穂、お前が好きだ！！！　大好きだ！！！！」
「……っ！？」
奈穂は何を言われたのか分からなかったらしく、一瞬ポカンとしていた。やがて、理解したのか顔を赤くして、涙を流し始めた。
「ほ、本当……？」

「当たり前だ！　奈穂の意地っ張りな所も、運動神経悪い所も、ちょっと嫉妬深い所も全部大好きだ！！」
「私も……私も、正義感が……強くて、人一……倍優しくて、優柔不断……な康太が……大好き……！」
感極まった康太が奈穂を抱きしめた。彼女も弱々しくではあるが、康太の背中に腕を回した。
「くそ、何で今更気持ちが通じ合ったりするんだ……」
康太が忌ま忌ましそうに呟く。奈穂はそんな彼を宥めるように背中を撫でた。
「仕方ないよ……私は……素直じゃなかったし……康太は……優柔不断だった……から……」
「あはは、確かにそうだな」
康太は苦笑して、肩から力を抜いた。徐々にだが奈穂の身体から温かさが無くなっているのが感じられた。
もうすぐなのだ。奈穂との別れと自らの手で愛している女性を殺さなければならない時が迫っていた。
「……なぁ、キスしていいか？」
「……っ、駄目……だよ……そんな事したら……康太にうつっ……ちゃう……」
「関係あるか……！」
康太は奈穂から身体を離すと躊躇う事なく唇を合わせた。しばらくそのまま奈穂の唇の柔らかさを、肌の感触を感じる。
やがて、どちらともなく離れる。
「……あはは……キス……しちゃった……」
「そうだな……ファーストキスだ」
私も、と言う奈穂の顔がくしゃりと歪む。そのまま大粒の涙を流し始めた。
「いや……！　いやだよ……！　死にたく……ない！！　何で……何で康太と……両思いだって……わかったのに！　一杯したいこと……あるのに！！」

泣きながら、搾り出すようにして叫ぶ奈穂を康太は抱きしめた。
「俺だって、俺だって奈穂と一杯したいことがある！！　くそ！何でもっと早く告白しなかったんだ！！」
康太も涙を流しながら叫ぶ。自らの勇気の無さとこのままの関係でいいと甘えていた自分を呪った。
今までだっていくらでも機会はあった。高校卒業の時、同じマンションに引っ越して康太の部屋でご飯を食べた時、サークルでカップルが出来た時、機会はいくらもあったのだ。それら全てを今の関係が壊れるのを怖がり、一歩を踏み出せなかった。
「俺は……馬鹿だ！！」
「それなら……私も……馬鹿……だ――――ゲホッ」
「奈穂！？」
奈穂が苦しそうに顔を歪めると、血を吐いた。もう限界なのだろう。彼女の肌は外を闊歩する感染者に似た青白いものへと変化していた。
奈穂はゆっくりと身体を離すと、一番聞きたくない言葉を言った。
「……ごめん……もう、限界みたい」
「……嫌だ」
「康太……？」
「嫌だ！　何で、何で奈穂を殺さなきゃならないんだ！？　奈穂を殺すくらいなら食われた方が――――」
康太の叫びは奈穂の手によって遮られた。もう身体を動かす事も辛いのか、腕は震え、額には汗をかいていた。
それでも、彼女は辛さの一端も見えない笑顔を浮かべた。
「……康太……あなたが私を殺したく……ないように、私も感染者になって……康太を殺したく……ないの」
「……っ！」
「ね……？　私達の思いは同じ……二人とも……お互いを殺したくないの……でも……このままじゃ……私は康太を……殺しちゃう……」

康太は奈穂の言葉を黙って聞いた。限界にも関わらず無理矢理意識を留めているのか、彼女は時折辛そうに顔を歪めた。
「だから……康太。私を殺すんじゃなくて……救って」
「救う……？」
「うん……あなたの彼女を……あなたの大切な人……のはずの私を……救って」
そう言って、奈穂はもう一度いつもの心が温かくなる、とても綺麗で可愛い笑みを浮かべた。
「……っ、～～～っ！　……わかっ……た」
康太は何度も、何度も自らの中で葛藤し、苦悩し、頷いた。本当ならば頷きたくない、そう思っていてもこの世界を壊した『モノ』は待ってくれない。刻一刻と奈穂の意識は削られているのだ。
駄々をこねた所で結果は変わらない。噛まれれば皆感染者になる。
「……ありがとう、康太」
「……」
「ねえ、笑って？　酷い事……言ってるのは……分かってる……でも、最後に見るのが……大好きな人の……康太の泣き顔じゃ……嫌なんだ」
「……ああ、これでどうだ？」
康太は無理矢理な笑みを浮かべた。涙は流れ、頬は引き攣り、とても笑顔とは言えるものではなかったが、奈穂は嬉しそうに――本当に嬉しそうに笑った。
「ふふ、変な……顔……ありが……とう……最後に……康太……と……恋人になれて……よかっ……た……」
奈穂の身体から力が抜けた。それは、永遠の別れであり、化け物へと変わる合図でもあった。
「ああ、俺も奈穂の事好きで居続けられてよかったよ」
康太はもはや聞こえていないであろう奈穂にそう言うと、拳銃を構え、撃った。
笑顔のまま逝った奈穂の頭に小さな穴が穿たれ、後頭部が弾け飛

ぶ。康太はそれを無理矢理作った笑顔のまま見詰めた。奈穂の前では最後まで笑顔でいようと康太は考えたからである。
既に奈穂が見えていない事は分かっていたが、それでも笑顔でいたかった。
「俺もすぐに逝くからな……」
奈穂の身体を布団に横たえ、顔に近くにあったハンカチをかける。
康太は拳銃を構えた。だが、すぐには死ねない。
奈穂の身体を、この二人の場所を荒らされないようにするために、ロッカーを扉の前に倒しておく。
「……これでよし」
元々入口近くにあったためあまり時間がかからず塞ぐ事が出来た。
康太はちょっとやそっとでは動かない事を確認すると、奈穂の隣に寝転んだ。
「……向こうで……会おうな」
そう自分に言い聞かせるように呟くと、口を開け、銃口を押し込む。
やはり自らの手で死ぬのは恐ろしいのだろう、康太の手は震えていた。だが、一度奈穂に目を遣ると、決心が付いたのか引き金を引いた。
軽い音がして、康太の頭が吹き飛ぶ。
(奈……穂……)
康太が死の間際に見たものは、手を繋ぎ幸せそうに笑い会う奈穂と自分の姿だった。

幕間　あの頃のままの笑顔で（後書き）

というわけで、このような終わり方をしていました。

前話で二つの銃声が聞こえたって書いといて、この話の中では微妙に間が開いていたりしているのは、気にしないでください。

元々この二人は寮で死ぬ予定でした。しかも、名前すらなかったキャラなのですが、ちょっと暴走してしまい、スピンオフみたいな漢字で書いてみました。

賛否両論あると思いますが、変えるつもりはないです。

誤字脱字の報告はいただければ修正します。

第１２章　醜悪な心（前書き）

いつも読んでくださる方々ありがとうございます。

今回もギリギリです。
毎度毎度すいません。
３／１３　タイトル忘れてました。

第１２章　醜悪な心

「藤堂、行きとは逆で頼む！」
「分かった！」
泣き付かれ、寄り添うように寝ていた美樹の頭を撫でながら少し寝かけていた厚志はその声で現実に引き戻された。
行きと同じ経路ならば十分もかからない距離なのだが、あまりにも感染者がいたため、周り道を余儀なくされたのだ。お陰で美樹もある程度落ち着き、厚志自信も何とか気持ちに整理がついていた。
「数は少ないみたいだから下りなくていい、荷台に入らないようにだけしてくれ！」
「任せろ！」
詰まれていたミニミを手に取り、荷台から銃口を出して構える。同時に生々しい音と共に軽い衝撃が伝わってくる。寮の前にたむろしていた感染者を轢いたのだ。
門のキーはまだ隆一郎が持ったままのため、厚志はただ荷台に入られないように散発的に近付いてくる感染者を撃っているだけだった。
「門が開いた！　後は入られないようにしてくれ！！」
トラックが動き始め、門を通過する。もちろんそれを追って感染者達も着いてくる。門を越えた辺りでまるで蓋をするようにトラックが止まる。
「何を止まっておるのだ！　早く進まぬか！」
生存者の老人が声を荒げる。それを大柄な男が宥めている。高校生くらいの少年はただ黙ったまま、冷めた目で叫ぶ老人を見ていた。
厚志は小さくため息を吐きながら、ミニミに取り付けられたスコープを覗き、門を越えてくる感染者の頭を撃ち抜いていく。
少しでも撃ち漏らせば寮は安全で無くなる。緊張から数秒が数分に感じられ、厚志はただ一秒でも早く閉まってくれと願った。
やがて、門が感染者を潰しながら閉まり、ようやく厚志は止めてい

た息を吐き出した。だが、すぐに安心は出来ない。撃ち漏らしが無いか確かめるために荷台を下り、死体を確認していく。
「よし、多田！　もう大丈夫だ！！」
「了解！」
隆一郎の返事と同時にトラックが動き始める。門の脇に停めると、首を鳴らしながら隆一郎が降りてきた。
「何とか戻れたな」
「……全員じゃないがな」
「……それでも全滅したわけじゃ無い」
「……」
隆一郎の言葉にそれ以上反応する事が出来なかった。確かにこんな状況下では全滅しなかっただけマシなのかもしれない。それでも、厚志は救いたかったのだ。
気付けば、擦り抜けていった命を掴まんとするように拳を握り締めていた。
「藤堂……」
隆一郎が何かを言おうとしていたが、自分の不甲斐無さに苛立っている厚志は気付かなかった。
「いやぁぁぁぁぁ！！」
「っ！？」
「な、なんだ！？」
突然悲鳴が上がった。しかも安全なはずの寮の中からである。
厚志は武器も持たず走り出していた。
「いやぁ！　離してぇ！！」
声は二階から聞こえてきていた。香奈達がいる階である。
駆け上がり、香奈達がいるはずの部屋に向かう。
開け放たれドアを無視して中に入る。
中にいたのは組み敷かれた香奈と彼女にのしかかった赤石がいた。
香奈のシャツは破け、下着に包まれた控えめな胸があらわになっていた。佳子は逃げたのか見当たらなかったが、そんな事は厚志には

関係なかった。
「何やってんだアンタ～～～！！」
厚志は赤石に走り寄ると殴り飛ばした。そのまま馬乗りになり顔を殴る。
「げっ、あ、がっ、ひゃ、ひゃめ……」
「黙れ！」
上司だろうと関係なかった。ただ怒りに任せて殴った。すでに顔は腫れ、醜い顔がさらに醜く変貌していた。
「お、おい藤堂、それ以上やったら死んじまう！」
「離せ！　こいつは、こいつは！」
厚志に続いて駆け付けたらしい隆一郎に羽交い締めにされる。それでも何とか痛め付けようと蹴りを放つ。
美樹も追い付き、香奈に上着をかけていた。
「ひ、ひぃぃぃぃぃ！？」
赤石は転がるように部屋の奥に逃げて行き、壁に張り付いた。
「ひゃ、ひゃやくほいつを閉じ込へろ！　ほうこうざいだぞ！」
「……」
隆一郎は汚物でも見るような目を向け、厚志を離したどうやら厚志に殴られ過ぎたため口が切れたり、腫れたりしているため、まともに話せないらしい。
「は、はんでほいつを離す！？　へ、へいれい違反だぞ！」
「……おっさん、さすがにこれは駄目だわ」
「お、おっさん！？」
驚愕する赤石を無視して隆一郎は歩み寄った。そのまま腕を振り上げ、ただでさえ腫れ上がっていた頬を殴った。
「げぼぁっ！？」
醜い声を出し、壁に吹き飛ぶ赤石。頭からぶつかったため、気を失ったらしい。
気絶した赤石を見て厚志もいくらか落ち着きを取り戻していた。荒い息を調え、香奈に向き直る。

「……大丈夫？」
美樹に抱きしめられている香奈が小さく頷いた。その身体は小さく震え、痛々しかった。
「とりあえずおっさんは監禁だな、こんな事起こしたんだ仕方ないだろう」
「……ああ、頼む」
隆一郎がその筋力を使い、赤石を引きずっていく。香奈の傍を通る時、彼女の身体が一際大きく震えた。
「すまない、俺の上司が……」
「い、いえ……私は大丈夫ですから……藤堂さんも間に合ってくれましたし……」
そう言い無理に笑っている香奈の姿に厚志は胸が締め付けられた。思わず頭を撫でようと手を伸ばす。
「……っ！？」
厚志は香奈の反応に手を止めざるを得なかった。彼女の身体が驚くほど強張り、顔には恐怖が浮かんだからだ。
「す、すみません……」
「いや、こっちこそすまん。気遣いが足りなかった」
頭を下げ、離れる。
赤石の行った事は予想以上に香奈にトラウマを残してしまったらしい。あの柔らかな微笑みを浮かべる彼女姿は今は無く。追い詰められた子猫のように怯え、美樹に縋り付いていた。
それもそうだ。香奈は昨日母を亡くし、さらに友人まで亡くしかけた。その上、凌辱されかけたのだ、トラウマにならない方がおかしい。むしろ、よく精神が崩壊しなかったと思う。
「美樹、あとは頼んだ。何なら隣の部屋に移動してくれ」
「うん、分かった……厚志さんはどうするの？」
「……隆一郎に話があるんだ」
美樹はそれ以上追求してこず、香奈を立たせて隣の部屋に向かった。
二人が部屋に入るのを確認して、厚志はその場を離れた。

向かう先は隆一郎が赤石を連れて行った部屋である。
部屋に入ると、気を失ったままの赤石をロープでグルグル巻にしている隆一郎がいた。これでもかというほどロープを巻かれた赤石は一回りほど大きくなっていた。
「お、きたな。あの子はどうした?」
「美樹が連れ添って別の部屋に行ったよ。そういえばスーパーにいた他の生存者はどうしたんだ?」
「そうか、生存者はとりあえず適当な空いてる部屋に入ってもらった」
「……すまん、面倒をかける」
隆一郎は気にすんな、と言い、赤石の頬を叩いた。今の厚志なら殴ってでも起こすと分かっているからだろう。
何度か叩くとようやく赤石は意識を取り戻した。しかし、まだ頭がぼうっとしているのか焦点の定まらない視線をさ迷わせている。あれだけ殴られた上、頭を打っているのだから仕方ないと言えば仕方ないのだが、厚志に気遣う気は全く無かった。
「起きろよおっさん」
「ぅ……あ! ひ、ひはまら!」
隆一郎が強めに頬を叩く。ようやく赤石の焦点が合い、厚志達を捉える。先程のお返しにと直ぐさま殴り掛かろうとしたのだろう。だが、簀巻きになっているため、不様に転がるだけだった。
「ひはまら、はにをひはのかわはってひるのは!」
「はいはい、んでどうする?」
まだ呂律の回らない状態で叫ぶ赤石を軽くいなし、隆一郎が聞いてくる。
聞くまでもなく赤石の処分をどうするか、である。
女性を性欲処理の道具としてしか見ておらず、世界がこうなる前から外部の女性とのトラブルも度々あった。正直このままここにいさせていいわけはない。それでも厚志は追い出すとは言えなかった。
追い出すという事は、この他者を踏みにじりながらでしか生きられ

ない赤石には死ねというのと同じである。事実世界がこうなった後も権威を振りかざすだけで何もしようとしなかった。だが、それでも厚志には死ねとは言えない。

今まで守れなかった者達への裏切りに思えたからだ。ここで人殺しに加担しては美樹や香奈に面と向かって守るとは言えなくなる。

「とりあえず監視を付けて保留だな」

「……いいのか？」

隆一郎の目は暗に置いておいても良い事は無いと告げていた。それに気付きながらも厚志は頷いた。

隆一郎は呆れた様子で肩を竦め、大きなため息を吐いた。付き合いが長いだけに何を言うのか分かっていたのだろうが、あえて聞いたのだろう。

厚志は隆一郎の脇を抜け、赤石に対峙する。

「赤石一佐」

「は、はんだ！」

「しばらくはここにいてもらいます」

「ひ、ひはまにはんのへんいがはっていっへるのだ！！」

尚も虚勢を張って叫ぶ赤石に、厚志は笑みを浮かべた。

「別に外に出してもいいんですが、どうせいつかは死ぬんですし」

そう言う厚志の目は笑っていなかった。ただ冷ややかな目で赤石を見ていた。

厚志が冗談で言っているのではないと気付いたのだろう。赤石が血相を変えて声を出す。

「ま、まへ！　ほ、ほれだへは！！」

「じゃあここにいてください。食事は定期的に持ってきます。ちなみに私か多田のどちらかがドア前で見張ってるので妙な考えは起こさないように」

「……わはった」

赤石が渋い顔で頷いたのを見て厚志は部屋を出た。

「見張り頼んでいいか？」

「おう、藤堂はさっさと二人のとこに行けよ」
「ああ。後は頼んだ」
「全く羨ましい限りだぜ、俺も女の子助けときゃーなー」
「……おい」
冗談冗談という隆一郎を一発叩いてから香奈達がいる部屋に向かった。
隆一郎の意図が分かっていたため叩くだけに留めた。他の者が言えば殴っていただろう。
隆一郎は厚志の怒りが治まっていないのを知っていて、わざと道化を演じたのだ。一発叩いた後の心は確かに落ち着いていた。
（全く、もっとうまいやり方があるだろう……ん？）
隆一郎の気遣いの不器用さに苦笑していると、廊下をうろうろする大柄な男がいた。不審に思い近付いていく。
「何をしているんですか？」
努めて穏やかな声を出しつつ、近付く。もちろんいつ襲い掛かられてもいいように重心には気を配っておく。一応拳銃もあるのだが、この距離では撃つ前に襲い掛かれてしまう。
「え？　あ、スーパーに救助に来ていただいた方ですよね。その節はありがとうございました」
「へ？　あ、いや、俺は美樹を助けるついでみたいなものだったからそんなお礼を言われるような事は……はっ！？」
予想外の丁寧な言葉に警戒を解いて近付こうとしていた。慌てて距離を取り同じ質問を投げ掛ける。
「そんな事はいいんです。そこで一体何をしていたんですか？」
「先程悲鳴で貴方がここに飛び込んだ後、もう一人の方に部屋に案内されたんですがどうしても気になってやってきたんですが……」
どうやら男が言うには、自分にも何か出来ないかと来たはいいがどこの部屋か分からず、さ迷っていたらしい。
「その件でしたらもう解決しました。どうぞ部屋にお戻りください」

「そうですか？　よかった」
厚志は心底安堵した様子の男に対して警戒を緩めていた。こんな状況下でも人を心配して何かしようと出来る心を持った人物は貴重だ。基本は元々寮に避難していた人達のように我関せずを貫いているか、何かあっても自分だけは助かろうとする者ばかりだ。
人間も生物である以上、優先順位は自分が一番なのは理解できる。だが、それでも厚志は大切な者のために身を投げ打つ覚悟は出来ていた。そんな厚志だからこそ、この男に少なからず好感を抱いた。
「それじゃあ、何か手伝える事があったら何でもしますから呼んでください」
「……ああ、何かあったら頼るよ……ええっと」
「あ、すいません。自己紹介がまだでしたね。私は大森勇貴といいます。今年で二十九になります。近くの会社で社員として働いていました」
「俺は藤堂厚志。歳は二十五で自衛官だ、よろしく」
厚志は少しだけ対外用の対応を弱め、手を差し出しながら笑った。
男――大森が近付いて来て握手を交わす。
大森は手だけでなく背も本当に大きく、それなりの高さのある厚志ですら見上げなければならない程である。
よく見ると意外と愛嬌のある顔をしていた。確かに遠くから見れば熊と見間違う巨体だが、目はつぶらで笑顔を浮かべる姿は親しみ易さすらあった。
「これ以上お手を患わせるわけにもいきませんので私は戻りますね」
「ああ」
手を離し去っていく大森。隆一郎が案内したのは三階らしいので、階段に向かっていく。その後ろ姿が消えるまで待ち、厚志は美樹達がいる部屋のドアをノックした。
いくら好感を持ったとは言え、まだ完全に信用したわけでは無い。厚志にとって大森も助けるべき『人』である事に代わりは無い。ただ、やはり大切な守るべき『人』とは違うのだ。対応に差が無くて

も心構えは違うというわけである。
「美樹、厚志だ。入っていいか？」
『うん、大丈夫だよ』
厚志は美樹の返事を聞いて少しホッとしていた。もしかしてまた赤石のように暴走した奴が入ってはいないかと考えずにはいられなかった。だからこそ、最初大森を疑い、迎撃の準備すらしていたのだ。ドアを開けて中に入る。一応辺りに人がいない事を確認してから、ドアを閉めた。
部屋の中は隣の部屋と同じで畳敷きの六畳一間のワンルーム。ユニットバスがあるが、キッチンは共同なので無い。風呂は大浴場があるにはあるが、かなり混むため厚志はあまり利用しない。
そんなワンルームの畳の上に敷かれた布団に香奈は寝ていた。美樹はその脇で香奈の手を握って座っていた。
「香奈ちゃん寝てるの？」
「うん、あんな事があったし、厚志さんを待ってる間気が気じゃなかったんだ思う」
「そうか……」
そう言いながら美樹の隣に腰を下ろす。するとすぐに美樹が肩に頭を乗せてきた。まるでそうするのが当たり前のように自然な動作で、だ。
スーパーでの事。香奈が襲われた事。色々あったため、今は人の肌や体温を感じたいのだろう。
誰かが傍にいる、という事実は意外なほど精神を安定させる。もちろん気を許した相手に限るが。
空いている右手で頭を撫でる。するともっと撫でてくれと言わんばかりに頭を差し出してきた。
自然にこんな動作が出来る事に今更ながら恥ずかしさを覚え、それをごまかすようにさらに頭を撫でた。
「あのね、厚志さん……」
「……なんだ？」

しばらく頭を撫でていると、決心したかのように美樹が話を切り出した。
しかし、そのまま続きを話そうとしてくれない。何となく何の話をするのか分かった厚志は話せるようになるまで待った。
「……ありがとう、厚志さん。あのね、聞いてほしいの厚志さんが駆け付けるまでに何があったのか」
「ああ……」
厚志の予感は的中した。もう安全な所まで避難して終わったと言いたい事。だが、美樹の中ではまだ解決していない。そして厚志の中でもまた、救えるはずだった命を見捨てた事は解決していなかった。
「厚志さんが来るのを信じてあの事務所で待ってたの――」
美樹はゆっくりと話始めた。あの時、何があったのか。
厚志と別れた後、何とかスーパーには入れたらしい。しかし、先に非難していた人の中に感染者がいたらしく、中はパニックになった。その時、混乱した者がバリケードを壊してしまった。
侵入してきた感染者から逃れるために何とか事務所に逃げ込んだ。だが、信二と沙苗は感染者に襲われたらしい。
もう駄目だと判断した店長がドアを閉め、簡易のバリケードを組んだ。
一時的な安全を確保した美樹達は事務所の中で、男女に分かれていたらしい。男達五人はあの血溜まりのあった事務所に、美樹達はその奥、駆け付けた時に隠れていた更衣室兼仮眠室にいた。
事件が起きたのは美樹達が疲れから眠りについてから数時間後に起きた。今まで何とか耐えていたバリケードが限界に達し、崩壊した。いち早く気付いた店長と大森と青年が何とか支えたが、すぐに限界が来るのは目に見えていた。美樹達も異変に気付き、今日助かった老人と少年を中に入れ、扉を支えている三人に早く来るように言った。
店長と青年が客である大森より先に行くわけにはいかないと言うため彼が離れ、中に入った。次の瞬間ドアが決壊し、店長を吹き飛ば

した。
青年は何とか離れようとしたが、感染者に捕まり、そのまま餌食になった。美樹が何とか店長だけでも助けようと近寄り、起き上がらせた。だが、すでに目前まで感染者が迫っていた。
その時、突然身体を押され、更衣室のドアの前までよろめいた。ハッと店長を見ると、感染者に噛み付かれながら笑っていた。
助けられなかった事実に愕然とした美樹は動けなかった。目の前に感染者が迫っていても動けなかった。
飛び出して来た奈穂に掴まれ、何とか部屋に入ったが、ドアを閉めようとした瞬間、感染者が一体身体を挟み込んだ。大森が何とか閉めようとするが、感染者の力が強く閉まらない。
奈穂が動き、感染者の頭をモップで殴った。だが、数発目でモップを掴まれ、引き寄せられた。
そして――
「奈穂さんの悲鳴が更衣室に響いたの。それを聞いて私はようやく動けて、ドアに挟まった感染者の頭にペンを突き入れたの……」
「……」
美樹の話を厚志は聞いている事しか出来なかった。下手な慰めの言葉は意味を成さないし、今は茶々を入れるより聞いていた方がいいと考えたからだ。
「だから……だからね。奈穂さんが噛まれたのは私が呆然としてたから……逃げるのが遅れたから感染者がドアを越える時間を与えちゃったの……」
美樹は俯き、涙を堪えていた。厚志は何も言わず、ただその頭を抱き寄せた。
「私が……私のせいで……っ」
「……責任を感じるのはいい……でも、それで自暴自棄にはならないでくれ……頼む。今君がいなくなったら俺は多分駄目になる……だから、生きてくれ」
「……うん」

身勝手な願いだとは思いつつも、厚志はそう言う事しか出来なかった。「忘れろ」とも「君の責任じゃない」とも言えない。言って、美樹が享受してしまえば、いずれ形は違えど、赤石のようになってしまうからだ。

美樹に自分勝手で他人の事を考えない、責任を持てない人間になってほしくなかった。だから厚志は美樹を慰めず、ただ生きるための『理由』を与えた。

「厚志さん……ありがとう」

「ん、気にするな。俺の自分勝手な願いだからな……疲れたろ？　これから忙しくなるから今は休んでおくんだ」

「うん……分かっ……た……」

美樹は緊張の糸が切れたのか、厚志の膝に頭を乗せるとすぐに眠りについた。

（……まだ高校生だもんな……）

忘れていた事実を思い出し、厚志は渋い顔をした。落ち着きのある態度に忘れていたが、美樹はまだ十代半ばなのだ。にもかかわらず、目の前で人が死に、ましてその原因が直接ではないにしても自分のせいだとしたら、普通は耐えられない。

そんな事すら忘れていた厚志は内心美樹に謝りつつ、少し痛みつつある髪を梳いた。すると、美樹はくすぐったそうに身をよじり、笑みを浮かべた。

その反応に癒されていると、廊下からバタバタと騒がしい足音が聞こえて来た。

「藤堂！」

バタン、とノックも無しに大きな音を立ててドアが開いた。ドアの向こうに立っていたのは息を切らせた隆一郎だった。

「……すまん、取り込み中だったか」

「いや、違うから閉めようとするな」

隆一郎が何を勘違いしたのか、渋い顔でドアを閉めようとした。それを止めつつ、厚志は隆一郎に先を促す。

「それで、何かあったのか？」
「ああ、ついさっき無線が入ったんだ。そしたら今生存者を乗せたうちの連中がこっちに向かってるらしい」
「何だって！？」
厚志は慌てて立ち上がった。そのため、ひざ枕で寝ていた美樹は頭から畳に落ちてしまった。
「いたっ！？」
「あ、すまん！」
美樹に謝りつつ、隆一郎に着いて無線がある部屋に向かった。
新たな生存者を助けるために……。

第１２章　醜悪な心（後書き）

ご意見、ご感想お待ちしております。

ついに赤石暴走しましたね。

ちなみに、今更ですが、スーパーの生き残りは、大森、じいさん、大介の三名＋美樹です。この回でも語られたように割とあっさり多五郎さんとか亡くなってしまいました。すいません。

ちなみに、前回の終わりで亡くなられた康太、奈穂の厚志たちと分かれた後のお話を載せようと思うのですが、皆さんの意見はどうでしょうか？

あのままでいいよ、ぜひ載せてなど意見がありましたらお願いします。

第１３章　新たな絆（前書き）

ちょっと日を超えてしまいました。

地震があったので、上げるのどうしようかと思ったんですが、習慣なので上げておきます。

今回はヌルヌルです。

第13章　新たな絆

「というわけで、現在ここに向かって数人の生存者を乗せたトラックが向かっています」

厚志は寮にいる人間を全て食堂に集め、隆一郎が知らせてきた無線の内容を告げた。食堂には十数名の老若男女がいた。美樹と香奈は部屋で待ってもらっているためこの場にはいない。代わりと言っては変だが、簀巻き状態の赤石は隆一郎の監視の元連れて来ていた。知らされた内容にどう反応していいのか分からない皆は眉をひそめていた。

「そこで、私は彼等を救う事を提案します。つまり、ここに招き入れるという事です。もちろん招き入れるには門を開かねばならず、危険が伴います」

「ふざけるな！　せっかく安全なこの寮をわざわざ危険に曝すのか！！」

いち早く異論を唱えたのは赤石だった。それに賛同した他の自衛官達が声を上げる。

「そうだ！　お前達がスーパーに行った時だって運よく奴らが入らなかったからいいものの、一歩間違えばここは地獄だったんだぞ！！」

「他にいくらでも行くとこはあるはずだろう？　何でここに来させるんだよ！」

「新橋君を助けられなかったのにその人達は助けるの！？」

口々に罵倒が飛ぶ。最後に発したのは恐らく康太達の中で唯一生き残った佳子であろう。

香奈や美樹に付きっきりだったため、何があったか説明してなかった。と言っても説明した所で納得してもらえるとは思えなかった。だから、黙って皆が落ち着くのを待った。実際皆を危険に曝し、康太を置いてきたのは事実である。

「生存者の中に噛まれたものがいないと言い切れるのか？」
手前に座った老人が聞いてくる。スーパーで助けた人物だ。
恐らく美樹に聞いたのと同じ、生存者の中に感染者に噛まれた者がいてまたスーパーの時のようにならないか危惧しているのだろう。
「それは……いないとは言い切れません。無線で一応怪我をした者、噛まれた者がいないか確認はしてもらいましたが、確実に全身くまなく確認したとは言えません」
「何だそれは！　私は賛成できないぞ！！」
赤石がそれ見た事かと声を荒げる。厚志はそれに反論する事は出来ない。
赤石の態度に少し苛立ちつつも、厚志は続けた。
「反対してもらって構いません。賛成出来ない方はもう一つの棟に移動していただいて、完全にドアを閉じて下さい」
「賛成できない者を追い出すつもりか！」
「違います。B棟の方が立て篭もるのに適しているからです」
赤石の反論に即座に返す。
赤石をあまり調子づかせないため、周りを巻き込んで暴挙に出さないため、厚志は努めて礼儀正しく振る舞った。もちろん内心では、香奈にあんな事をしておいてどの口がほざいてるんだ、と今すぐ殴りたいくらいだった。
「まず第一に、今いるA棟は玄関と裏口、さらに管理人用の部屋に窓があり侵入され易いです。しかし、B棟は入口が一つしかない。第二に門より遠いため、襲撃にあったとしても多少なり時間があります。そして、これが最大の要素です。階段、エレベーター、二つの手段で地下のシェルターに入れます」
「……シェルターにはこちらからも入れるよな？　俺達がエレベーターで入ったのはこの棟からだし」
隆一郎が首を傾げながら聞く。
確かに隆一郎の言う通り、厚志達は今いるA棟からシェルターに入り、武器を手に入れた。ただし、エレベーターを使って、だが。

「そう、確かにこちらからも入れます」
「なら条件はほぼ変わらないじゃないか！」
元から寮にいた青年が声を上げる。厚志はさらに続けようとする彼を手で制し、先を続けた。
「条件は同じではありません。そちらはエレベーターと階段、こちらはエレベーターでしかシェルターに入れません」
「ならなんだって言うんだ！　入れる事に変わりはないだろうが！」
「いいえ、違います。今は電気が供給されているため同じに見えますが、明日も今日と同じように電気が供給されているとは言えません。世界は今崩壊してしまっているのですから……」
厚志の言葉に誰もが押し黙った。今は安全な場所にいるため忘れていたのかもしれない。すぐそこには壊れた世界が広がっている事を。
実際、未だ電力供給が続いているのは奇跡と言ってもいいだろう。恐らく他の自衛隊員達が必死に防衛しているはずだ。でなければ、人間がいなくなった供給施設が稼動しているはずがない
それもいつ崩壊するか分からない。いつ途絶えるか分からない物に頼るほど楽天的になれる状況ではなかった。
「……分かっていただけましたか？　では、決をとりましょう。立て篭もっていたい方はそこにいる赤石一佐に着いて行ってください。受け入れようと思っている方はここに残ってください」
「食料はどうするつもりだ？　まさか、独り占めなどはせんだろうな？」
隆一郎に縄を解かれた赤石が嫌味な笑みを浮かべて聞いてくる。それをさらりと流しつつ、厚志は隆一郎に目配せした。
すると隆一郎と大森が人数分のパンパンに膨れた袋を持ってきた。
「食料は人数で割り、一人当たりに配給する分を袋に分けておいたので、それを一人一袋持って行ってください。もちろんこちらもシェルターから武器を人数で割り、人数分いただきます」
「……ふんっ」
赤石は何か言いたげだったが、鼻を鳴らすと、隆一郎が持ってきた

袋を一つ掴むと、食堂を出て行った。それに釣られるようにして過半数の人間が移動を開始した。もちろん元からいた自衛官もである。最終的に残ったのは、隆一郎と事前に事情を話して協力してもらった大森とスーパーで助けた少年だけだった。といっても少年は助けたくて残ったというより、どっちでもよかったという雰囲気が感じられた。

何はともあれ、厚志の予想通りになってしまった。予想外だったのは赤石が意外にもあっさりと引き下がった事だ。不安を覚えないわけではないが、今は無駄に争うつもりはなかった。

「本当によかったのか、あのおっさんは必ず何かをやらかすぜ」

「……かと言って任せられる人間がいなかったのも確かなんだ。仕方ないさ」

「何かあっても文句言うなよ」

「……言う訳無いだろ」

ため息混じりに厚志は言った。

なにも隆一郎は全ての責任を負わせようとしているわけではない。あくまで責任を取る覚悟があるのかを問うているのだ。

「あの、これからどうしましょうか？」

大柄な大森が、その身体に似合わない怖ず怖ずといった様子で聞いてくる。

「んー、とりあえず今向かっている自衛官達が到着するのは早くても明日以降だからな……」

厚志は腕を組み、唸った。

そう無線があったのは隣の町に救助活動に向かった部隊からだった。恐らくどこもスーパーの前の道路のように事故車があるはずである。そのため、普通に車で走れば一時間程度で着く場所でも数時間かかる可能性が高い。

「とりあえず電気が通っているうちに武器を貰って、扱い方の説明とかバリケード作ったりしたらいいんじゃねぇか？」

「あーそうだな……多田、頼んでいいか？　俺は美樹達に現状を説

明してくる」
「あ、てめっ、自分だけいいとこ取りとはセコいぞ！」
「……違うから」
笑いながらからかってくる隆一郎をあしらいながら、食堂を出る。
背後から隆一郎が自己紹介をしながら何をするか指示する声が聞こえた。
「あ、自己紹介するの忘れてた……後でしておかないとな」
肩を竦めながら自分の間抜けさに苦笑する厚志。どのみち美樹達も自己紹介をするのだからその時に一緒にしようと自分を納得させ、二人がいる部屋に向かった。
途中片方に部屋が並ぶ廊下の窓からB棟が目に入る。並んで建っている上、基本的にA棟と反対の作りになっているB棟の廊下を、木材を抱えて慌ただしく走る自衛官が見える。どうやらバリケードを作っているらしい。
その中に、一つの部屋から出て来た赤石が目に入った。その手には女性ものの下着が握られている。
実はB棟は女性隊員が暮らしている場所だった。男子禁制であるB棟で欲望の限りをつくそうとしている赤石を見て、厚志はため息を吐いた。自分の判断が間違っていたのではないかとさえ思ってしまう。
佳子も向こうに行ったため、何をされるのか分からない。だが、厚志には止める事は出来なかった。その資格があるとは思わなかった。
「……厚志さん？」
「あれ？　美樹？」
気付けば廊下の先から美樹と香奈が歩いて来ていた。
「大丈夫なのか？」
「あ、うん。香奈も落ち着いたし、今の状況を知りたいって言うから」
「……そうか」
香奈を見ると確かに先程のような恐慌状態ではなくなっているよう

だった。だが、まだその笑顔はぎこちなく、心なしか男である厚志から遠ざかろうとしているのを感じる。
やはり、トラウマになってしまったのだろう。厚志にすらこの態度なのだ、恐らく男性恐怖症になってしまったのかもしれない。
「あ、藤堂さん！」
突然かけられた声に振り向く大きな鞄を担いだ大森が歩いて来ていた。ガチャガチャという金属と金属が擦れ合う音が鞄から聞こえる。どうやら工具や金具が入っているらしい。
「窓とかはいいと思うんですが、裏口と玄関、どちらを塞ぎますか？」
「あーとりあえず裏口で頼む」
「畏まりました……おや？　そちらのお二人は？」
大森がようやく気付いたかのように美樹達を見る。どう考えても厚志より背が高いのだから見えていたはずだが、とりあえずそれは置いておいた。下手につっこめば面倒な事に成り兼ねない。
「あの場にいなかったからな、美樹とはスーパーで一緒だったよな、説明は省くぞ。で、黒髪でおさ毛なのが佐草香奈だ」
「ちょっと、何をぞんざいな紹介してるのよ！　『彼女は相良美樹。俺の大切な娘だ』とか言えないわけ！？」
ぞんざいな扱いに憤慨した美樹が叫ぶ。しかも厚志の声真似までしている。全然似ていないが。
「はいはい、ちなみに美樹は名字で呼ばれるのが嫌らしい。だから、気軽に『頭軽そうな女子高生』とか呼んであげてくれ」
「それじゃあ名前より長くなってるじゃないの！」
背中をぽかぽかと叩かれるが厚志は気にしない。そもそも美樹も本気ではないため、痛くも痒くもないからだ。
突然背中に定期的にきていた衝撃が無くなる。振り返ると叩くのを止めた美樹が腕を組んで何か考えていた。
「はっ、まさか『俺以外の男が名前で呼ぶんじゃねぇ』っていう事！？　もうっ、ツンデレなんだか――いたぁっ！？」

厚志は無言で暴走――妄想とも言う――を始めた美樹のおでこにデコピンを放った。
「妄想はとりあえず置いておいて、美樹は知ってると思うけど、こちらが大森勇貴さんだ」
「おおもり……ゆうき？」
大森の名前を聞き、香奈が首を傾げた。そのままトラウマなど無かったかのように大森に近付いていく。
「まさか勇兄さん？」
「ん？　その呼び方……まさか香奈ちゃん？」
「やっぱり！　勇兄さん！！」
香奈が大森に抱き着いた。がたいのいい彼は女子高生が一人飛び付いたくらいではびくともしない。
「よかった、香奈ちゃん無事だったんだね」
「うん、勇兄さんも無事でよかった……」
いきなりの展開に厚志と美樹はぽかんとしてしまう。
どうやら香奈と大森は知り合いらしい。数度しか会話してない大森が敬語を使っていないのもあるが、香奈が満面の笑みで頬を擦り寄せている姿がそれを語っていた。
「えーと、香奈？」
「はっ、えっと……あの、こ、この人は私の父の同僚の息子さんで……昔から家によく遊びに来てたんです」
「へー偶然ってすごいな」
しどろもどろながら説明する香奈に頷く。
偶然と言うには出来過ぎていた。たまたま助けた美樹の友人である香奈を厚志が助け、また別れてしまった美樹を助けた際に一緒にいたのが大森。そして、香奈と大森は昔ながらの付き合い。
本当縁があったと言うには出来過ぎているくらいだった。
「あの、勇兄さんの手伝いをしてもいいですか？」
「……大丈夫？　あんな事があったのに」
「……はい、大丈夫です」

苦笑しながら答える香奈にそれ以上何も言えない。今は何かに打ち込みたいんだという雰囲気が感じられたからだ。
「何かあったって何ですか？」
「あー、言ってもいいのかな？」
大森が首を傾げて聞いてくる。厚志は眉をひそめ、香奈を見た。すると、香奈はどうぞと言わんばかりに苦笑を深めた。
「ふう、ここに着いた時の悲鳴は香奈のものだ」
「なっ！？」
「本当に申し訳ないが、うちの上司が香奈を襲おうとしたんだよ」
「……それは、さっきの時に縛られていた人ですか？」
言葉を発する度に大森の声が低くなっていく。底冷えするような声に少し寒気を感じながらも答える。
「ああ、そうだ」
「……そうですか、分かりました。ちょっと殴り飛ばしてきますね」
「あ、ああ……えぇっ！？」
大森が飛び切りの笑顔で言ったため、最初は意味が分からなかった。だが、彼から発せられた殺気は厚志だけでなく美樹達も感じ取れるものだった。
「いや、落ち着いてくれ。俺が殴っといたから！」
「駄目です。香奈ちゃんにそんな事をした奴を許せません」
慌てて歩き始めた大森を止めるために前に立ちはだかる。だが、大森はものともせず、厚志を巻き込んで進んでいく。
「頼む、今君が怪我して抜けられると困るんだ！」
「関係ありません、許せないものを殴り飛ばすのは当たり前ですよ」
大森がしがみついて止めようとする厚志を見て、にこやかに笑いながら言う。なまじ丁寧な口調だから余計に恐ろしさが強まっていた。
「勇兄さん、待って！」
「うわっ」
香奈の言葉に反応していきなり止まった大森に反応できず、厚志は落ちてしまう。

「勇兄さん、今は私の事よりやらなきゃならないことがあるんでしょう？」
「そ、そうだけど……」
「なら、つべこべ言わずに早く働いて！」
「わ、分かったよ……」
腰に手を当てて叱り付ける香奈。大森はそのがたいからは考えられないほど肩を落とし、まるでいじけた子供のように口を尖らせながら香奈に従った。
厚志は美樹に起こしてもらいながら、その光景を見ていた。
「な、なんだかな～」
「香奈のほうがお姉さんみたいだね」
美樹と一緒に苦笑しつつ、作業に向かっていく二人を見送る。
二人の関係性は、しっかり者の妹と温厚な兄と言うものなのだろう。
美樹の言った通り、香奈が姉に見えるのも確かだった。
ただ、これだけは言えた。鍛えている厚志を引きずるほどの怪力と温厚な人柄を持った仲間が増えたという事だ。

第１３章　新たな絆（後書き）

ご意見、ご感想お待ちしております。

勇兄さん！

いいですね、兄弟じゃないのに兄弟みたいな呼ばれ方「～お兄ちゃん」とか「～お姉ちゃん」とか憧れます。

第１４章　束の間の平和（前書き）

遅れてすいません。

今回はなるべく明るめの話にしようとしているのでちょっとわけわからないことになっているかもしれません。

しかも少ないです。本当に申し訳ない。

第１４章　束の間の平和

「ふう、こんなものかな……」
力仕事で身体が火照っているため、溢れる汗を袖で拭う。
厚志の目の前には各部屋から持ち出した棚や机などを積み重ねた簡易のバリケードが出来ていた。もちろん裏口には机などから剥いだ木材を使い、突貫ながらも開かないように釘で留めていた。
窓も言わずもがな、ついさっきまで裏口を手伝っていた他のメンバーが塞いでいるはずである。一番で入りされる所なので、美樹達女性を除くメンバーでバリケード作製に当たっていたのだ。それも厚志一人いれば出来る所まで終わったため、他のメンバーには窓の補強に向かってもらったのである。
これで出入りできるのは正面の玄関のみになった。
「お疲れ様、厚志さん」
「ん、サンキュー」
美樹がタオルと水を持って来てくれた。水を一気に飲み干し、タオルで汗を拭う。
美樹は汚れた服を着替え、今は短パンにＴシャツというラフな恰好だった。
「もう終わり？」
「ああ、とりあえずこれで裏口は大丈夫なはずだ」
厚志は廊下に座り込んだ。すかさず美樹が隣に座る。そのまま、まるでそれが当たり前かのように厚志の左肩に頭を乗せる。
「……暗くなってきたね」
「そうだな……」
時刻は午後六時。すでに日は傾き、西の空を茜色に染めている。反対側を見れば日の光が届かなくなっているため、暗くなっていた。
今の所電気が止まる気配は無い。しかし、いつ止まるか分からないため、馬鹿みたいに使うわけにもいかない。

ガスはすでに止まっていた。水道はまだ生きているがこちらもいつ止まるか分からない。そのため、こちら側にある共同風呂に並々と水を溜めておいた。

共同風呂は一度に十数人が入れる大きなもので、腐る事を考慮に入れても数日は使える水が溜まっている。

「さて、後は来るのを待つだけだ」

肩をすくめ、厚志は美樹の頭を撫でた。何となく不安から誰かの体温を直に感じたかった。

美樹はくすぐったそうに身体をよじりながらも受け入れてくれる。いつの間にか傍にいるのが自然になっていた。出会ってから二日も経っていないにも関わらず、厚志は美樹がいなくてはならない存在になっているのを感じていた。美樹もそうなのだろう。事あるごとに厚志の傍に寄ってきている。

もちろんあくまでも『だろう』の域を出ない。だが、少なくとも信頼されているのは美樹の態度から感じられた。

今も安心しきっているのか、うとうとし始めている。

「美樹、寝るなら部屋に行こう」

「ん～、大丈夫まだ眠くないから～」

「いや、明らかに眠そうだから、ほら、立って」

厚志は美樹が倒れないように真っすぐ座らせてから立ち上がった。

「寝るならここでもいいじゃん～」

「……ここはさすがに駄目だろう」

「んん～動きたくない～」

美樹は駄々をこねる子供のように手足をばたつかせてむくれる。

「はぁ、分かった、俺が運ぶから選んでくれ」

「選ぶ？」

「おんぶか抱っこか」

「お、おん、だ、だっこぉ！？」

美樹がわたわたと手を振り、大袈裟に慌てる。厚志としてはとにかくここで寝かせたくなかったため特に考えもせずに出た言葉だった。

よくよく考えれば年頃の女の子には恥ずかしい事だろう。
「いや、すまない。よく考えたら嫌だよな」
「い、いえ！　だ、おんぶでお願いします！！」
「へ？　あ、ああ……分かった」
何故か立ち上がって敬礼する美樹。たじろぎながらも厚志は彼女の前にしゃがみ込んだ。
「い、いきます」
「おう」
数度の深呼吸が聞こえた後、柔らかな感触が背中を包み込む。下着は数が限られているためか、高校生にしては肉付きのいい美樹の胸の感触が背中に直に伝わってくる。
ギュッと首に回された手に力が入る。緊張しているのか、少し息と鼓動が荒かった。
（と言っても俺も鼓動が速くなってるんだがな……）
女子高生相手に緊張している事に少し自嘲気味に笑う。
肩に頭が乗るくらいならともかく、今は完全に密着している。耳に当たる髪や吐息、背中に伝わる鼓動や感触がやはりいつもと肩に当たるくらいのものとは違うのを感じる。
「厚志さん？」
「ん？　あ、すまない。それじゃあ行こうか」
厚志は笑い、邪念を振り払うと美樹の腰を掴み、立ち上がり歩き始める。
部屋に向かってしばらく歩いていると美樹が身体をよじり始めた。
「どうかしたのか？」
「……やっぱり抱っこの方がよかったかも」
「んじゃ変えるか？　あんまり変わらないと思うぞ」
「いや、だってお姫様抱っこでしょ？　かなり違うよ」
「へ？　ああ、抱っこってそっちなのか」
厚志はようやく美樹が言いたい事が理解できた。
厚志自身が考えていた『抱っこ』とは、いわゆる子供を正面から抱

き抱えるタイプのものである。しかし、美樹が言っている『抱っこ』は、結婚式などで男性が女性の首と膝を抱えて持ち上げるほうだったのだ。

「……あ、厚志さんのえっち」

「いや、他意はなかったんだぞ、何となくそう思ってただけで」

「へー、じゃあ厚志さんはどっちがよかったの？」

「は！？　どっちって何だよ」

「私と真正面から抱き合いたかったのか、それとも今みたいに背中から抱き着かれたかったのか」

「……」

厚志は美樹にうりうりと頬を人差し指で突かれながら考えた。答えは出ない。元々本当に他意が無かったのだ。どっちがいいかと言われても答えは出なかった。

「んー抱っこ……かな」

今考えるとどちらがよかったかと言えば、抱っこだろう。もちろんおんぶでも良いのだが、やはり相手の姿が完全見える方が良いと厚志は考えた。その方が安心するからだ。決して邪まな気持ちがあるわけではない。

「だ、抱っこ！？　あ、厚志さんは私を正面から抱き抱えたかったの！？」

「はい？」

「し、仕方ないなぁ！　そんなに言うんじゃ、わ、私は恥ずかしいから嫌だけど抱っこされてあげてもいいよ！！」

「いや、美樹？　どちらかと言うとってだけで別に今更変えたいとかは思わないぞ？」

いきなり早口になり、まくし立て始めた美樹に苦笑しながら答える。すると両頬を掴まれ、引っ張られた。

「な、なによそれ！？　私を抱っこするのが嫌だって言うの！？」

「いひゃ、ひょうひゅうひみひゃなくへ」

「じゃあどういう意味よ！　ま、まさか……よ、幼女じゃないと駄

目とか！？」
「なんへひょうなるんだ！　ひひゃう、ほうへやのひゃえはんだ！」
「へ？　あ、ほんとだ……」
ようやく引っ張りから解放され、厚志は左手で美樹を支えながら空いた手で頬を摩る。
厚志はなるべく早足で移動していたため二階の部屋にはすぐに着いた。何故早足で移動していたかは隆一郎に見付かればからかわれるのが目に見えていたからだ。
とりあえず早く部屋に入ろうとノブに手をかけた。その時、誰かの視線を感じた。
「……」
「……」
視線の方に顔をゆっくりと向ける。そこにいたのは、驚いた顔で固まっている大森と苦笑している香奈だった。
どうやら二人も厚志と美樹のように、作業の終わった大森に香奈が飲み物やタオルを届け、部屋に戻る途中だったようだ。
「……あー、えっと」
大森がどう反応していいのか分からない様子で頬を掻きながら何か言葉を探そうとしている。そんな彼の隣で香奈が全てを理解したように微笑んだ。
厚志には香奈の微笑みが天使の微笑みに見えた。
「藤堂さん、避妊はしなくちゃいけませんよ。後、今日は勇兄さんの所で寝ますからどうぞお楽しみくださいね」
「へ？　あ、ちょっと香奈ちゃん！？」
「大丈夫です。私子供じゃないので分かってますから、そういうのも大事ですよね。それではごゆっくり」
厚志に弁解する余地も与えず香奈は大森の手を引いて去って行った。
後には虚しく手を差し出した厚志と、何故か「ポッ」と言っている美樹が残った。
厚志は忘れていた。香奈が以前にもこの手の方向性の間違った理解

を示した事を。
その時、ポンッと肩に手が置かれた。
「多田……」
振り返ると隆一郎が笑って立っていた。
「……厚志」
「多田……お前なら分かって――」
「女子高生に手を出すのは犯罪だ～～～っ！！」
そう叫ぶとぶわっと涙を溢れさせた。
「羨ましくなんかない、羨ましくなんかないぞ～～～！！」
涙を流したまま隆一郎は踵を返して走り去った。
「……これで公認だね……ポッ」
「誰か俺の話を聞いてくれよ～～～っ！！」
厚志の叫びは虚しく寮に響き渡った。

第１４章　束の間の平和（後書き）

ご意見、ご感想お待ちしております。

香奈ちゃんは前にもありましたが、そういう系統に寛容です。

もちろん、厚志を信頼しているのとからかっているのもありますが・・・・・・

第１５章　守るべき場所（前書き）

毎度のことながら遅くなってすいません。

今回は、まだまだ寮編です。

寮でのほほんは今回で（たぶん）最後ですので来週からは再びあの日々が帰ってきますよ！

第１５章　守るべき場所

「とりあえず銃を扱えるやつはいるか？」
バリケードを作った翌日、厚志達は再び食堂に集まっていた。目的は多田が言った通り、銃を扱える者がいるか確認するためである。食堂には厚志や美樹を含めて六人いた。内手を挙げたのはただ一人、大森だけだった。
「なんだ、大森は銃が扱えるのか？」
「はい、昔から父に連れられて猪狩りをしていましたし、最近ではクレー射撃を週一で行っていました」
「ほう、んじゃ後で試射してもらうか」
「分かりました」
大森が頼もしいのは見た目や性格だけでない事が証明された。隣に座っていた香奈がにこやかに微笑んでいた。そんな香奈に大森は照れたような笑みを浮かべていた。
「そんじゃ、本題だ。美樹ちゃんや香奈ちゃん、それに大介の三人に俺は銃を持たせようと思う」
それこそが皆の前に厚志ではなく、多田が立っている理由だった。厚志は反対したが、多田が意見だけでも聞きたいと言ったので発言させた。
実際、少しでも戦力が欲しいのも確かだった。だが、同時にそれは危険を増やす結果になる。下手に前に出られてヘマをすれば、ただ守るだけよりも助ける方にも危険度が増してしまうからだ。
「俺はさっきも言ったが反対だ。訓練してない者が扱えば暴発の可能性もある上に、戦えるようになるという事はそれだけ噛まれる危険性も増す。だから、俺達が守れば良いだけだろう？」
「はいはい、『美樹、君は俺が絶対守るよ！』、『厚志さん！！』とか乳繰合ってる場合じゃないだろう」
多田が急にキリッとした顔で言ったかと思うと、すぐに位置を変え、

キラキラした目で先程までいた場所に顔を向けて気持ちの悪い甲高い声で返事をした。さすがに厚志も頭がおかしくなったのかと心配してしまう光景だった。

「……何だそれは」

「お前らの真似、こんな感じだったからな」

「……」

「え？　マジでこんな事言ったの？　冗談だったんだが……」

ほぼ同じやり取りをした覚えのある厚志は押し黙ってしまう。そんな反応に多田が困惑した様子で苦笑していた。

「ち、違うわよ！　私だけじゃなくて香奈も守るって言ったんだから！」

美樹が耐え切れなくなったのか、フォローにならない事を発言した。

「な、何ぃ！？　厚志……二股はいかんぜ」

「何でそうなるんだよ！　俺は香奈ちゃんの母親と約束したから！！」

「お、親公認なのか……！！」

「違う！！　何でそっち方向にしか考えられないんだよ！？」

多田が一々曲解するため厚志は頭を抱えて叫ぶ。美樹は自分の発言が引き金になった事に気付いたのか、苦笑いを浮かべて頭を掻いていた。

「違いますよ。藤堂さんは私達をお母さんの代わりに守るって約束してくれただけです」

「……ま、そうなるわな」

香奈が立ち上がって言うと、多田は肩を竦めながらすぐに理解した。

「お前、からかうなよ！」

「気にすんなって……んで話を戻すが、どうする？」

厚志はまだ言い足りなかったが場の雰囲気が再び引き締まったため、それ以上何も言えなくなる。美樹が宥めるように背中を撫でてくる。だが、元はといえば美樹の一言が原因だったので、厚志は少し泣きたくなった。

「私は賛成します。ちゃんと理解して扱えばこれ以上の武器はありませんから」
大森が律義に挙手してから発言する。
「そうだな、んじゃ銃扱える組の賛成二、反対一で、美樹ちゃん達に銃を持たせる事に決定！　異義は藤堂以外からなら受け付けるぞ」
「おい！　何で反対の俺がいきなり除外されてるんだよ！」
「まぁ、確実に反対するからな」
「……はぁ、別に異義なんてないよ」
肩を竦めながら厚志は深々と椅子に座り直した。元々なし崩しに決まらないように危険性を提示しただけで、厚志自身戦力が増える事に異義は無い。
「へぇ、意外だな。最初は反対したのに」
「俺自身人手が必要なのは理解できてるからな。少しでも防衛能力が上がるのには反対はしないさ」
「ふーん」
（いざとなれば、何があっても俺が守れば良いだけだからな）
心の中でそう付け足しながら、厚志は気を引き締めた。美樹が隣で心配そうに見ている事にも気付かずに。
「んじゃ、あんまり時間は無いから、さっさと始めるぞ。大介達、銃扱えない組は俺に着いてくるんだ」
「え？　厚志さんが教えてくれるんじゃないの？」
美樹がまるでそれが当たり前かのように聞く。
確かに厚志は今まで常に前に立っていたのだからそう考えるのも仕方が無い。しかし、今回は多田に任せなければならない。それには理由があった。
「多田の方が俺より銃の扱いや体術の成績は上なんだ。それに教えるのも上手いしな」
「おいおい、そんなに褒めんなよ～。藤堂は全体を、俺は個人を見る事に長けてたからな。自然とそういう役割になったってわけだ」
「そういう事」

「ま、最近は個人を見過ぎて全体が疎かになってる気もするがな～、全く女子――いや、何でもない」
厚志が殺気混じりの視線を向けると多田は口にチャックをした。
多田の言う事も確かだった。以前の厚志ならば全体を見て、全体に利益が出るように動いていた。だが、今は美樹や香奈の事を一番に考えてしまっている時が多々あった。それ故に多田達を危険に曝してしまっている。
（ったく、まさか昨日今日合った相手にここまでいれ込むとはね……）
厚志はそんな事を思いながら自嘲気味に笑った。自分に呆れてはいてもそれが間違っているとは思わなかった。むしろ、美樹達の笑顔を見ると胸が満たされていた。
「そういうわけだから、銃を扱えない組は着いてこい～」
多田が上げた手を振りながら出入口に向かっていく。
「厚志さん、行ってくるね」
「おう、頑張ってこい」
「うん！」
笑顔で去っていく美樹を苦笑しながら見送る。一度食堂を出たはずの美樹がまた戻ってきて出入口付近で手を振っていた。半ば呆れながら早く行けと手で払うような仕種をする。
今度こそ完全に多田に着いて行ったのを確認すると、厚志は大森に向き直った。
「それじゃあ、俺達も行くか」
「え？　どちらに行くのでしょうか？」
「大森がいくら銃を扱えるといってもどれほどのものかは見てみないと分からないからな、少し試射して実力を見たいんだよ」
「ああ、そういう事ですか。分かりました、よろしくお願いします」
あくまで堅すぎるほどの礼儀正しさを見せる大森に苦笑しつつ、厚志達は食堂を出た。
「ところで、不粋な質問で申し訳ないのですが、藤堂さんは美樹さ

んと仲がかなりよろしいですね。元々お知り合いだったんですか？」
「あー、そういえば話してなかったっけ……」
厚志は頬を掻きながら美樹達と同行する事になったいきさつを話した。もちろん香奈の母親が死んだ事も包み隠さず。
「……だから、必ず行くと約束していた俺はスーパーに現れた、というわけさ」
「……そう、だったんですか」
大森は力無さ気に答えた。やはり、香奈の家族とも繋がりがあったため、母親の香織が死んだ事はショックだったのだろう。肩が落ち、大きな身体が少し小さくなっていた。
「香織さんの事はすまない……俺がもっと気を付けていれば……」
「いえ！　藤堂さんが謝る事なんてありません、貴方は香織さんとの約束を守り、香奈ちゃん達を守っているじゃないですか……むしろ、私の方が香奈ちゃんや藤堂さんに謝らなくてはなりません。香奈ちゃんの事など忘れ、ただ安全な場所に隠れていたのですから……」
「それこそ仕方がないだろう、俺は日頃から訓練している自衛官だが、大森はただの一般人だろう、いざという時に動けなくなるのは仕方がない」
「でも、私はそれでも自分が動けなかった事を許せません」
ギュッと手を握り締め、悔しさに震える大森。
大森が本当にいいやつなのだと厚志は思った。この状況で、これほどまでに『救えなかった』事に対して真摯に向き合える人間はそうはいない。厚志や多田はまだ訓練しているため、ある程度は自制できるが、大森は本当に一般人だ。いくら知り合いとはいえ、自分の命を投げ打ってまで助けようとは思えない。だが、彼はそんな風に思い、自分を許すことができないのだろう。
「なら、今から守ればいい」
「……はい」

大森は静かに、だが力強く頷いた。
「よし、それじゃあ試射に向かうぞ。まずは守るための力を確認しないとな！」
「はい！」
厚志は、後ろから突いてくる大森を信頼し始めていた。今までの漠然とした感覚ではなく、確かな思いとしての信頼を。
明らかに厚志より多きにもかかわらず、どこか忠犬のような雰囲気を醸し出している大森を連れて、射撃場に向かった。

◆　◆　◆

「よし、これで終わりにすんぞ！」
『ありがとうございました！』
美樹達は多田の言葉で、即席の銃器取り扱い講座を終了した。やった事といえば簡単な扱い方の説明と注意事項を教えてもらった後はひたすら銃を撃っていただけだった。といっても、弾に限りがあるため、数種類の銃を弾倉一個分撃っただけである。
多田は手元の紙を見ながら少し眉を寄せていた。あの紙には美樹達の暫定的な射撃能力が書いてあるらしい。的に何発当たっただとか、取り扱いに不備は無いかなど、簡単に書いているようだ。
（これで厚志さんの役に立てるかが決まるんだ……）
美樹は手を握りながら結果を待った。
もちろんずぶの素人に銃などいきなり扱えるわけが無い。それでも今のメンバーと状況では美樹達もせめて身を守るくらいの力は必要だった。
多田に移動中に説明された美樹は勇んで射撃を行った。美樹自身は中々当たったと思うが、結果はどうかは分からない。だから、半ば祈るような気持ちで多田の言葉を待っていた。
「結果を発表する」
ゴクリ、と唾を飲み込む。気付けば隣に立っていた香奈が手を握っ

ていた。
香奈も怖いのだろう。
香奈は戦いには向いていない。美樹はそう考える。香奈はこの世界で生きるには優し過ぎるのだ。そこが良い所ではあるのだが、今の世界ではかなり危うくなる。
今助けた人間がやがて感染者になるかもしれない。助けた際に噛まれてしまうかもしれない。
噛まれれば即座に死を免れないこの世界で、誰でも助けようとするわけにはいかない。そんな時、優し過ぎる香奈には見捨てられないだろう。そして、見捨てたとしても罪悪感を感じるはずだ。
それは、危険な事だ。助けられない人間を助けようとすれば自分だけではなく、仲間にも危険が及ぶ。さらに罪悪感を抱けば、以後の活動の際咄嗟に動けなくなる可能性がある。
この世界は優しくては生きていけないのだ。だが、美樹は香奈に変わってほしくはなかった。優しい香奈だからこそ、人を労れる香奈だからこそ美樹は好きになったのだ。だからこそ、香奈には戦ってほしくなかった。戦えば戦うほど、香奈が変わってしまうのではないかと考えるからだ。
そして、多田が口を開いた。
「銃を扱わせられるのは美樹ちゃんと大介だけだな……香奈ちゃんは今のままでは危ないから、救護要員になってくれ」
「っ！　はい！」
美樹は思わず笑みを漏らしかけた。だが、香奈はどこか寂しそうに頷いていた。
「よし、そんじゃ、大介……これがお前の銃だ。俺が言った注意事項をちゃんと守れよ」
「……はい」
大介は多田に渡された拳銃をしばらく眺めるとギュッと掴み、部屋に戻っていった。
「美樹ちゃんも、ちゃんと守れよ」

「はい！」
「んじゃ、俺は先に戻っとくわ～」
多田はそう言うと、どこか寂し気な香奈の頭を一撫でして部屋に戻っていってしまう。銃が保管された場所に美樹達だけを残していくのは危ない気がしたが、彼なりの信頼の現れなのだ。
「……私も戦いたかったな」
「香奈……私は香奈には戦ってほしくない」
「なんで？　私が弱いから？」
香奈は少し問い詰めるように美樹に問い掛ける。
「違う……私は、香奈が戦う事で変わっちゃうんじゃないかって思うと怖いの」
「……でも、私は守られるだけなんて、嫌」
「うん、だから多田さんは香奈を救護要員に任命したんだと思うよ」
「……分かってる……それはそれで重要なんだって分かってる」
美樹の言葉に、香奈はギュッとシャツの裾を握り締める。香奈自身も頭では必要な役だと理解しているのだろうが、今まで守られるだけで誰も助けられなかった事を悔いているのだろう。
だからこそ、美樹は香奈に戦ってほしくなかった。
美樹は香奈の正面に立ち、真っ直ぐその瞳を見詰めた。
「香奈、誰かを助けたり守ったりするのも大事だと思う……でも、帰って来れる場所って大事だと思う」
「帰って来れる場所……？」
「うん、あそこに帰れば安心できる。あそこが帰る場所なんだ。そういう場所って大事なの……そして、そんな帰る場所を『守る』事が香奈の役目なんじゃないかな？」
「帰る場所を……守る」
香奈が視線を伏せ、言葉を反芻するように呟く。
一度伏せられた視線が上げられた時、その瞳には強い火が灯っていた。
「うん、美樹ちゃんありがとう……私の役目に気付かせてくれて」

「い、いや……厚志さんならこう言うんじゃないかなぁ、と思って言っただけなんだけど……」
美樹は照れて頭を掻きながら、視線を泳がせる。そんな美樹を見て、香奈は少し意地悪な笑みを浮かべた。
「それじゃあ、厚志さんの隣に居続けるのが美樹ちゃんの役目だね」
「へぁっ!?　いや、そんな一生隣に居続けるなんて?!」
「そこまでは言ってないよ……」
香奈の苦笑に気付かず、美樹はパニックになりわたわたと腕を振っている。
「美樹、香奈ちゃん!　救助者は明日着くらしいから早く休めよ～!!」
「へ、ひゃ、ひゃい!!」
突然掛かった厚志の声に顔を真っ赤にして慌てる美樹。
「分かりました」
香奈はしっかりと答え、恥ずかしさからか隅に隠れてしまった美樹を見て苦笑した。
その苦笑は呆れを含みながらも、どこか吹っ切れたような柔らかな雰囲気の苦笑だった。

第１５章　守るべき場所（後書き）

ご意見、ご感想お待ちしております。

今回は未だにのほほん回です。
大介はまだ活躍しません。（そもそもするのか？）
今回は大森と美樹、香奈のお話しです。
香奈は厚志や美樹に守られていると思っているため、何かできないかと常に考えています。そのため、今回は手っ取り早く戦う力である『銃』を手に入れようとしたんですね。
ちなみに、詳しい描写は省きます。書くとダレそうだったので、書きませんでした。
では、また来週～

第１６章　食事の一時（前書き）

大変遅くなりまして申し訳ございません。

最近ちょっとスランプ気味です。報告もせず遅れて申し訳ないです。

今回はほのぼの路線のみです。

加えて、４万ＰＶ達成しました。皆さん読んでいただいてありがとうございます。

第16章　食事の一時

美樹達が新たに戦力として認められた翌日の正午過ぎ、A棟内部は慌ただしい雰囲気に包まれていた。
つい先程無線連絡が入り、後数時間程度で自衛官達が到着してしまうのである。
「とりあえず門の前にいる感染者をどうにかしないとトラックは入れないぞ？」
「分かってる、だが掃討するほどの弾は無い……」
厚志が腕を組み、唸る。そんな事をした所で解決策が浮かぶわけではないのだが、何か無いかと考えるしかない。多田は大介に呼ばれて食堂を出て行った。
厚志は包丁や鍋が煮立つ音のする食堂で一人になっても唸っていた。
現在、門の前には数百体近くの感染者が犇めいていた。数時間前に一度厚志と多田で塀に上り確認したが、トラックが突っ込めば即座に餌食にされてしまう量だった。かといって、今の厚志達の装備では百発百中で何とか倒し切る程度の弾数しかない。
正直、手詰まりだった。トラックを受け入れようとすれば、間違いなく感染者がなだれ込む。だからといって、見捨てる事も出来ない。
「さて、どうしたものか……」
厚志が何も思い付かず唸っているとキッチンに続くドアが開かれた。ドアから出て来たのはエプロンを着けた美樹だった。エプロンの下は裸――――という事は無く、Tシャツに膝丈のスカートというラフなものだった。ご丁寧に右手にはオタマを握っている。
「厚志さん、ご飯の準備終わったよ。これ、今日が消費期限の牛乳だから飲んでいいって香奈が」
「ん？　ああ、分かった。ありがとう」
「どうかしたの？　さっきから唸ってばかりだったけど」
美樹が心配そうな表情で厚志の顔を覗き込む。手に牛乳の入ったコ

ップを持っているため、零れそうで怖い。
「……ん？　見てたのか？」
「え？　あ、いや！　別にずっと見てたわけじゃなくて、たまたまチラッと見た時に厚志さんが唸ってるのが見えたから、どうしたんだろうなって思っただけだから！」
「……いや、何を慌ててるんだ？」
「あ……あぅ」
いきなり慌て始めた美樹に呆気に取られながらも、厚志が指摘すると途端に小さくなってしまった。
厚志としては何の気無い質問だったのだが、本当に見ていたらしい。心配されるくらい唸っていた事に気付かなかった厚志は気持ち表情を柔らかくした。
「いやな、彼等を受け入れるのはいいんだが……問題があってな」
「問題？」
「ああ、今門の前には数百の感染者がいるんだ……今のままでは中に入れる事が出来ない……」
厚志は自分で言っている内にまた気持ちが沈んでいくのを感じていた。また守れないのか、そんな考えすら浮かんでくる。
眉をひそめて俯き気味になった厚志に対し、美樹はキョトンとした顔で首を傾げていた。
「別にわざわざ門から入れなくていいんじゃないの？」
「……は？　いや、中に入るにはあそこからしか入れないだろう？」
「別に車ごと入れる必要はないんじゃないかな？　例えば感染者が少ないとこの塀から中に入れるとか」
「……っ」
あっけらかんと言う美樹。厚志はしばし考え、はっと気付いた。
今までトラックごと収容しなければいけないと考えていたが、重要なのは人を助ける事で、車ごと助ける事では無い。何故今までこんな簡単な事に気付かなかったのか分からず、自分の馬鹿さ加減に少

し笑った。
「あ、厚志さん？　私なにか変な事言った？　素人考えで言っちゃってごめ――――」
「美樹、君は最高だ！！」
「え？　きゃ、きゃぁ！？」
何故か謝ろうとしていた美樹の言葉を遮って、厚志は彼女に抱き着いた。美樹が持っていたコップが弾みで床に落ちる。
「何でそんな簡単な事思い付かなかったんだろう！　ありがとう、美樹！」
「え、ど、どういひゃひまひて……」
美樹は顔を真っ赤にして、何故か呂律が回っていなかった。
とても良い香りが鼻をくすぐる。いつも美樹から漂ってくる匂いだが、今はいつも以上に香りが強かった。それに、温かな体温と柔らかな感触を感じる。
そこでようやく厚志は美樹に抱き着いている事に気付き、慌てて離れた。すると、美樹はへにゃへにゃと床に座り込んでしまった。
「あ、すまんいきなり抱き着いたりして」
「ひ、ひえ……おきになさらずに～」
どこか呆けたような表情で美樹がふらふらしながら答える。厚志は何故美樹がこんな事になっているか分からず、眉をひそめた。
「とりあえずそこ牛乳零れてるから……」
「うわ、ホントだ……濡れちゃった……」
スカートを持ち上げて確認する美樹から慌てて顔を逸らす。本当に無防備過ぎる。美樹は見られるという事をあまり考えていないのかも知れない。
「おーい、準備は大体終わったぜ～」
「いやーやはり体を動かすのは良いですね～」
「……まあね」
バリケードの最終チェックや玄関に作るバリケード用の機材をはいかんぜ担当していた多田、大森、大介が順に食堂に入って来る。多

田は恐らく呼ばれて行った後にそのまま作業を手伝ったのだろう、少し額に汗が浮いていた。
「藤堂、すまなかったな話し合いの途中に抜けて、作業手伝ってたら気分が乗っちゃ……って？」
「どうしたんですか多田さん……うわ」
「……」
多田達が三者三様の反応をする。無言が一番嫌なのだが、それ以外の露骨に気まずそうな表情も、それはそれで嫌だった。
確かに見る人が見れば分かるだろうが、状況が悪かった。多田達の姿を確認して即座にスカートを押さえて隠したため見えなかった。だが、スカートを押さえた美樹とその前に立つ――先ほど慌てたため――少し汗をかいた厚志。さらに、美樹のお尻の下の床には白い液体。
「あ、厚志さん……腰抜けて立てないから立たせて……」
美樹の発言は本当にわざとではないかと思ってしまう。今の状況でそんな発言をすればどうなるか分かったものではない。
厚志は恐る恐る多田達に顔を向けた。そこには引き攣った笑みを浮かべた多田達がどうしていいか分からない様子で立っていた。
その顔は、たまたま嬉しさから抱き着いた拍子に牛乳が落ち、何故か分からないが腰が抜けた美樹がたまたまその牛乳の上にへたり込んだと理解しているものではなかった。
「もう、美樹ちゃん。みんなに準備できたって言って来てって言ったのに、いつまでかかってるのよ～」
この状況でさらに香奈まで登場してしまった。
万事休すである。素早く行動して誤解を解いておけば良かったと思ってもすでに遅い。
固まっている多田達に首を傾げながら香奈が厚志達の方に歩いてくる。
怪訝な顔をしていた香奈の表情が引き攣った。そのままぷるぷると奮え始める。

「あ……えっと……これはその……」
「藤堂さんは黙ってて下さい」
「はい……」
ピシャリと言われ、すごすごと下がる厚志。別に悪い事はしていないのだが、有無を言わせない。今の香奈にはそれ位の迫力があった。
「美樹ちゃん……藤堂さんに何かされた？」
「え？　えっと抱かれた……かな？」
「抱きしめられたって言って！！」
キッと香奈に睨まれて押し黙る。だが、今弁解しなければ確実に自分の信用ががた落ちになる。それが分かっていた厚志は何とか誤解を解こうと口を開きかけた。
「確かに……確かに私もある程度は容認してきました……」
厚志が言葉を発する前に香奈が口を開いてしまった。タイミングを逃した厚志は何も言えず、聞く事しか出来ない。
「人が来るか来ないかの瀬戸際の興奮を楽しむ。そういう……プ、プレイがあるのも知ってます……でも、でも！」
香奈は一度息を吐き、目一杯吸い込んだ。
「避妊だけはしてって言ったでしょ～～～～～～！！」
「そこぉっ！？」
香奈の息切れする程の全力の叫びに思わずツッコミを入れてしまう厚志。それくらい見当違いな叫びだったからである。
「こ、高校生で妊娠したらどうするんですか！？　責任取れるんで――むぐぅ！？」
「香奈ちゃん、落ち着いて！」
パニックになったかのように喚き始めた香奈を大森が慌てて羽交い締めにする。ついでに顔が隠れるくらいの大森の手が香奈の口を塞ぐ。
しばらくもがいていたが、やがて落ち着いたのか静かになる。手で隠れているため分からないが呼吸が出来ずに気絶したわけではないようだ。

「藤堂～高校生に手を出すのはいただけないぞ」
「だから違うって言ってるだろ！？　これは――」
厚志はなるべく簡潔に、でも誤解しないように状況を説明する。その間に美樹は牛乳で汚れてしまった服を着替えるために部屋に戻っていた。
「――というわけで、俺は何もしてないんだ」
「ま、藤堂にそんな度胸ある訳無いから知ってたけどな」
「なら止めろよ！？」
「いやぁ、面白くって……テヘッ☆」
「気持ち悪いわぁぁぁぁぁぁ！！」
厚志と多田が取っ組み合いの喧嘩――というかじゃれあい――を始める。大森達は巻き込まれないように食堂の端に移動していた。
「……へ？　何もしてないの？」
「そりゃあね……見れば分かるし」
「え、だって……白いのが……」
「あれは牛乳だよ。本物は……あ～、えっと……」
呆然としている香奈にどう説明していいものか分からない大森が頬を掻く。
「と、とにかく違うんだよ」
「う……だって本物なんか見た事ないし……美樹ちゃんも抱かれた何て言うから……」
「ん、気にしない気にしない」
どんどん尻すぼみになり、小さくなる香奈の頭を撫でる大森。大森は香奈の『見た事ない』発言に少なからずホッとしているようであった。
「くらぇぇぇぇぇぇ！！」
「甘ぁぁぁぁぁぁい！！」
厚志と多田がほぼ同時にパンチを繰り出す。鈍い音と共にそれぞれの拳が、それぞれの頬にめり込む。
二人はニヤリと笑い合うと、ゆっくりと仰向けに倒れた。

「……ぜぇ、ぜぇ……今日はこの位に……してやる」
「……はぁ、はぁ……それじゃあ……ザコキャラみたい……だぜ」
多田の言葉に皮肉を返しながら、厚志は上半身を起こした。まるで昔の青春映画みたいに同じように起き上がった多田と拳を叩き合わせた。
「……何やってるんだか」
大介がぼそりと呟いた。その呟きに香奈と大森が強く頷いた。
「ただいま～厚志さん美樹はさらに可愛くなって戻ってって……何これ！？」
「いや、えっと……暴れちゃって」
「今からご飯だっていうのに何してるのよ厚志さん！」
「いや、俺だけじゃなくて多田も……」
眉を吊り上げて近付いてくる美樹に、厚志は弁解しつつ慌てて隣を見るとそこに多田の姿は無かった。
「全く、これだから若い奴は困るんだ」
「多田、お前！」
多田はいつの間に移動したのか、大森達に混じって傍観者を気取っていた。多田を連れてこようと立ち上がりかけた厚志を美樹は見逃さない。首根っこを掴まれて再び座らされてしまう。
「厚志さん、大人なんだから素直に謝りなさい！！」
「え、えぇ～」
厚志は理不尽な状況に少し泣きそうになっていた。
「美樹ちゃん、とりあえず急いで食べちゃわないとトラックが来ちゃうよ」
「あ、そうだった……仕方ないなぁ」
香奈が美樹を宥めてくれたお陰で、どうにか説教されるのは回避できた。厚志の目には香奈が天使のように見えた。
「怒るのはその後でね」
「……え！？」

柔らかく微笑む香奈が、今は天使ではなく死神に見えた。微笑みながらさらりと厚志を持ち上げておいてどん底に落とした。厚志は背筋が寒くなるのを感じた。

「……ほら、厚志さんは机とか直して」

「……はーい」

厚志はとぼとぼと立ち上がり、倒した机や椅子を直していく。傍観を決め込んでいた多田を睨みつけ、手伝わせた。

何故か不満そうな多田を小突きながら直していく。幸い壊れたものは無かったため元通り立たせるだけで済んだ。

机も直し終わり、何か手伝える事はないかとキッチンを覗く。すると、すでに大森と大介が盛り付けなどを手伝っていた。それほど広くないキッチンに四人がいるため動きづらそうだった。

「机とかは直したから、何か持ってくものがあったら出してくれ」

「分かった～」

とりあえず声だけでもかけておいた。食堂とキッチンの間は、よくある大衆食堂のように好きな物が取れるように胸くらいの高さから天井まで丸々くり抜いてあり、そこに予め準備してある料理を置けるようになっている。食べる側は好きな料理を取るだけでいい、というわけだ。

厚志は本来料理が並べてあるはずの場所に肘をつき、キッチンを眺めていた。

やがて、盛り付け終わった皿が差し出される。それを受け取り、机に運ぶ。いつの間にか多田が布巾で机を拭いていた。

「楽な方選んだな……」

「ふ……猿も木から落ちるってね」

「いや、意味分からないから」

「俺の小意気なジョークを汲み取れよ」

「……さっぱり意味分からなかった」

「全くこれだから藤堂は……」

とか言い合いながら出された料理を運んでいく。数度往復すると、

机の上には豪勢な料理が並んでいた。といっても、チャーハンと野菜を切ったり裂いただけの簡単なサラダだけである。だが、今の状況では十分豪華な食事に違いは無かった。

「さ、これで最後ですから先に席に着いててください」

「了解～」

香奈から最後の料理を受け取り、机の中央に置いた。途端に向かいから端が伸びてくる。それを払い、向かいにいる多田を睨む。

「何してるんだ？」

「こんなうまそうな卵焼きを前にして箸を伸ばさない馬鹿がどこにいるか！」

「お前は我慢の出来ない子供か」

「いや、我慢を忘れた大人だ！」

「なおたちが悪いわ！！」

もう一度伸びた箸を掴み取り、多田をさらに睨む。多田は唇を尖らせ、不満そうにしていた。

まさに子供だった。厚志は呆れながらも箸を掴む力を緩めない。かなり強い力で押されているため緩めれば即座に摘み食いされてしまうからである。

「こら！　お行儀悪いですよ！！」

「いてっ」

木製のお盆が頭に振り落とされ、ぱかんと小気味の良い音を立てた。特に痛いわけではないが、思わず声が出てしまう。

それで均衡が崩れてしまった。多田の箸が勢いよく卵焼きに突き立った。

「多田さん！　お行儀悪いにも程がありますよ！！　お箸を突き立てるなんて！！」

「あーす、すいません……」

香奈が即座に箸を引き抜き、多田に突き付ける。多田は母親に叱られた子供のように身体を縮ませて謝っていた。

（箸を突き付けるのはお行儀悪くないのかな……？）

そう思いながらも、厚志はとばっちりを受けたくなかったため黙ってみていた。

「……はぁぁぁ、全くもうちょっと落ち着いてくださいよ」

やがて、香奈が深いため息を吐くと、少し呆れを含んだ笑みを浮かべた。厚志と多田は頭を下げ、何とかその場は収まった。

それを見計らったように美樹達がキッチンから出て来て適当な席に座る。まるとそれが当たり前かのように厚志の隣には美樹が座った。席順は左奥に厚志。それ以降は時計周りに美樹、大介、多田、香奈、大森である。ちなみに机は六人掛け。

「このリア充達め……」

多田の恨めしそうな言葉が聞こえた気がしたが、厚志は敢えて無視した。

「それじゃあ、いただきます！」

『いただきます！』

香奈の掛け声と共に手を合わせて食事を始めた。

皆でワイワイ騒ぎながら食事をしていく。もちろん先程美樹が考えついた作戦も話し合っておく。

モノの十数分で机を埋めつくしていた料理は無くなっていた。

「ごちそうさま！　んじゃ無線確認してくるぜ！！」

「ああ、頼む！」

多田が皿を片付けた後、無線のある部屋に向かっていった。厚志達はのんびりと後片付けをしていく。

「これどこに置くんだ？」

「あ、それは棚の上にお願いします」

香奈が大森が洗った皿を受け取り、付近で拭いながら答える。

「りょうか――」

「藤堂！　まずい事になった！！」

答えようとした厚志を遮るように多田が食堂に入って来た。

「多田？　どうしたんだ？」

「ついさっき避難してくる奴らが休憩に寄った時に奴らに襲われた

らしい！！」
「な、本当か！？」
「ああ、自衛官が噛まれたらしい！！」
「くそ、皆、準備しろ！！」
厚志の号令で美樹達が慌ただしく動き始める。
「多田、裏側に着けてもらうようには言ったのか！！」
「ああ！」
「よし、作戦通りにいくぞ！！」
厚志は再度声をかけ、自らも行動を開始した。

第１６章　食事の一時（後書き）

ご意見、ご感想お待ちしております。

今回はちょっとキャラが暴走気味です。
不慣れなギャグを入れたため、よくわからない事になっていると思います。

では、また来週～。

今度は遅れないようにします。

第１７章　葛藤と最悪の事故（前書き）

毎度ギリギリです。

今回で両辺が終わるとかいっていましたが、まだもう一回続きます。
だらだらして申し訳ないです。
今回は初心に返って変なことは一切抜きのシリアスに重きを置きました。

あと報告を忘れていましたが、数章前から多田隆一郎の小説の中での表記を
「隆一郎」→「多田」
に変更しています。
よくよく考えたら誰も名前で呼んでいなかったので、変更しました。
報告が遅くなってすいません。
ちなみに、後書きで重大発表があります。

第17章　葛藤と最悪の事故

厚志は自室で装備を簡単に点検し、装填済みの弾倉をポーチに差し込んでいく。だが、最後の一つを入れようとした時、手が滑って落としてしまう。

多田から知らされた非難してくる者達が噛まれたという事実が、厚志を焦らせていた。

香織や康太達の顔が浮かぶ。厚志は、また守れない、という恐怖からの震えをなんとか押さえ込み、弾倉を拾いポーチに差し込んだ。

自分を落ち着かせるために頬を叩き、鼓舞する。装備の再確認を終えると、厚志は部屋を出た。

すると、廊下に顔を伏せた多田が窓に背中を預け立っていた。

「多田、何してるんだ？　皆の装備の確認は済んだのか？」

「そんなのはとっくに済んでるよ」

「なら、何しているんだ。早く行かないと着いてしまうぞ！」

多田の緊張感の無い態度が癇に触り、少し強めの口調で言ってしまう。それでも多田は今の状況を分かってないかのように動こうとしない。

確かに多田自身の装備は整っており、いつでも出られる感じではある。だが、多田に動く気配は無い。

厚志はしばらく待ったが、痺れを切らし、美樹達が待っているはずの玄関に向かうため、歩みを進めた。

だが――――

「何をしているんだ？」

厚志の目の前に顔を伏せたままの多田が立ち塞がっていた。別に手を広げて防いでいるわけでも、銃や爆発物で脅されている訳でも無い。それでも動けなくなるほど今の多田は威圧感を放っていた。

「何をしているんだって聞いてるんだが？」

厚志が再度問う。すると、多田がゆっくりと顔を上げた。

その表情は――無かった。いつもはチャラチャラした印象のある多田だからこそ、無表情の彼は不気味だった。
「なあ、藤堂……お前分かってるのか？」
「何をだよ」
「このまま非難してくる奴らを中に入れるのは危険だっていうことだよ」
「……どういう意味だ」
「お前だって分かってるはずだ、噛まれたら例外無く感染者になる」
多田は普段の彼では有り得ないほど落ち着き、説いて聞かせるように話す。それもまるで子供に聞かせるようにゆっくりと、である。
それが厚志の癇に触る。多田の言いたい事は何となく理解できる。
だが、それを認めるわけにはいかなかった。
それを認める事は今までの厚志自身の行動を、引いては香織や康太達を裏切る事になるからである。
「それ位分かってるさ……でも、俺は守れる人を見捨てるつもりは無い」
「それで美樹ちゃん達を危険に曝したら意味がないだろう！」
「……確かにそうかもしれない。それでも俺には見捨てられない」
「～～～っ、守りたいものの本質を見誤るな！　今のお前はなにもかも守ろうとしている！　人間は神じゃない……全てを救えるわけがないんだ！！」
「……っ！」
胸倉を掴まれ、壁に叩き付けられた。肩に担いでいた小銃がずり落ち、床に落ちる。
厚志は少し噎せながらも、驚異的な力で自分を持ち上げている多田を睨む。
「いいか、もう一度言う……守りたいもののを見誤るな。お前はまた大切なものを失うつもりなのか？　あの時みたいに」
「……っ！？　何だとぉっ！！」

厚志は多田の言葉に激昂し、壁を蹴った。多田がバランスを崩し、厚志が馬乗りになる形で床に倒れる。
「お前に何が分かる！！」
「分かるさ！　だがな……分かる、分からないじゃない！！　現実を見ろって言ってるんだ！！」
「このっ！！」
厚志が腕を振り上げる。だが、多田は反撃する気は無いのか、じっと厚志の目を見ているだけだった。
「何やってんのよ！！」
今まさに腕が振り下ろされるという瞬間、その声が聞こえた。声に反応して、多田の顔面に当たる直前で拳が止まる。
「厚志さん、多田さんも何やってるの！？　喧嘩なんかしてる場合じゃないでしょう！！」
「……っ」
厚志は多田の上から退くと、床に落としてしまった小銃を持ち、美樹の横を通り抜けた。多田の顔も、美樹の顔を見る事が出来なかった――見れるはずが無かった。
多田に言われた事はずっと厚志が考えていた事だ。
守りたいものを見誤らない。それは、守らなければならないものを見捨てる事だ。
誰かを守るためなら、誰かを見捨てる。人が万能でない以上必要な事である。厚志はそれを理解しつつも、納得は出来なかった。
だからこそ、今までの美樹達を危険に曝すと理解しつつも誰かを救おうとしてきた。それは変わらない。変えてはならないものの――のはずだった。
だが、今の状況では、それを貫くのは難しい。誰かに助けられながら何とか守っているだけだ。
さらに、厚志は美樹を一番に守ろうとしてしまっている。美樹の傍にいたいと思ってしまっている。
それでは誰も守れない。確かに美樹は守れるかもしれないが、助け

を求めている『誰か』は守れない。『誰か』の幸せも守れない。
（くそ！　どうすればいいんだ！！）
厚志は大切なものを作らないように生きてきた。あの時、大切な人を守れなかった代償として、誰かの幸せや大切なものを守るようにしてきた。自分が大切なものを持ってはいけないと、持ってしまえば誰も守れなくなると考え生きてきた。
それが、美樹の登場と感染者による世界の崩壊で変わってしまった。
厚志は自分の中で美樹が大切な人になりつつあるのは理解していた。
だが、それでは駄目だった。
（失うのは辛い……なら、いっそ――）
「あ、いた！　厚志さん！」
厚志がある考えに行き着こうとしていた時、美樹が追い付いてきた。
「もう、また喧嘩なんかして、もうすぐ来ちゃうんだからしっかりしてよね！」
「……ああ、すまない」
「……？　厚志さん、どうかしたの？」
美樹が何がに気付いたのか、首を傾げながら聞いてくる。厚志は美樹の顔をまともに見られず、視線を逸らした。
「何がだ？」
「……うぅん、何でもない」
「なら、早く行くぞ」
「う、うん……」
厚志は踵を返して玄関に向かった。目的地は門の反対側にある塀である。裏口を塞いでしまった今、出入口は玄関のみになっている。しかも、玄関は門側にあるため、寮をぐるりと回り込まなければ目的地に着けない。
目的地に着くまでの間一度も美樹の顔を見ず、会話もしなかった。
何か話したそうな顔が視界の端に映っていたが、厚志は敢えて無視した。
（これ以上関われば、美香と同じ位大切になってしまう……そ

れでは駄目なんだ……）

頭に浮かぶ美香の笑顔を振り払い、厚志は歩き続けた。

やがて裏の兵の近くで箱を運んでいる大森を見付け、近付いていく。

「大森、準備は出来てるか？」

「はい、武器もトラックの配置も大丈夫です……藤堂さん何かありました？」

「了解……何でそう思うんだ？」

大森が眉を寄せて聞いてくる。厚志自身は平静を装っているつもりだったのだが、何か違和感を感じるらしい。

「いえ、美樹さんが先程藤堂さん達を呼びに行く前より元気が無いように見えたので」

「……別に何もないさ」

いつの間に離れたのか、美樹は近くで医療品の準備をしている香奈の傍にいた。その背中は確かにいつもより元気が無いように見えた。大森は厚志より頭一つ分大きい身体の割に繊細で、人の機微に敏感のようだ。美樹の雰囲気の変化から何かあったのだろうと気付いたのだろう。だが、それ以上追究は無く、大森は作業に戻っていった。

（……これでいいんだ、俺の傍にいてもいい事なんて無い）

そういい聞かせても、人間すぐに切り替えられるわけでは無い。厚志の視線はつい美樹を追ってしまう。

香奈と話しながら笑う美樹。その笑顔はどこか寂しげで、昔見た美香の笑顔と重なった。

（――っ。まさか……な）

少し嫌な予感を感じつつ、厚志は塀に添うように停まっているトラックをよじ登り、屋根を伝い塀に移る。

兵の上には監視役として既に待機していた大介がいた。

塀の向こうには長い直線の道路があるだけだった。左右には住宅が並び、調度塀にぶつかって左右に道が分かれている。見通しはかなりよかった。

「大槻君、異常は無いかい？」

「はい、今の所何も見えないです。ゾンビもちらほらしか見えません」
「了解した」
双眼鏡を覗いたまま大介が答える。厚志はその隣に腰を下ろした。
「……藤堂さんは後悔してもしきれない事ってありますか？」
「……あるさ、それはもうたくさん、な……」
大介の突然の質問に厚志はしばし考え、答えた。
美樹から聞いた話しから推測すると、恐らく大介は叔父である多五郎の死の事を言っているのだろう。未だ双眼鏡を覗いたままの大介の手は震えていた。
「叔父さんは優しい人でした……こんな俺にも変わらず接してくれるくらいに……」
「そうか……」
厚志は多五郎本人を見た事も本人と話した事も無い。ただ、美樹から話を聞く限り、良い人間だという事は容易に想像できた。
このような状況でも自分を見失わず、誰かを救い続けた。最後の最後まで、だ。
厚志のエゴとは違う本当の優しさ。厚志が人を救いたいと思うのは過去への罪滅ぼしの意味合いが強い。つまり、偽善以外の何ものでもないのだ。
（俺に人を想う事も救う事もする資格は無い）
そんな事を考えてしまう。気付けばいつの間に双眼鏡を外したのか、大介が厚志を見ていた。
「俺は命を救ってもらった叔父さんと貴方に感謝してます」
「……」
「俺は叔父さんと同じように人を守れる……同じように助けられる」
厚志は思わず逸らしそうになる視線を何とか固定し続けた。今は逸らしてはいけない。大介の視線を受ける資格が無いと分かっていても聞かないわけにはいかなかった。
「遅くなりましたが、ありがとうございました。助けてもらって」

「そんな……感謝されるような事は……」
深く頭を下げられ、厚志はしどろもどろになり、ようやく視線を逸らした。そんな厚志を何か見透かしたような目で大介が見てくる。
「……藤堂さんは誰を守りたいんですか？」
「……っ！？」
胸に直接突き刺さるような言葉。
『誰を』――それに反応したかのように厚志の脳裏に美樹の姿が浮かぶ。それを掻き消した。
「俺は……『誰か』を守る資格なんてな――」
厚志の呟きを掻き消すように、金属が擦れる甲高い音を立ててトラックが道の向こうから現れた。トラックは蛇行し、左右の塀に何度かぶつかりながら厚志達がいる塀に向かって走ってくる。
明らかに普通の状態ではなかった。大介が慌てて双眼鏡を覗き込む。
「藤堂さん、あれ！　運転手を見てください！！」
双眼鏡を渡され、厚志は言われた通り運転手を見た。
双眼鏡の丸く切り取られたような視界の中にトラックの運転席を収める。自衛官らしき迷彩色の服を着た男がいた。
その男の顔は――青白かった。
「か、感染者……！！」
恐らく先の報告で噛まれたというのは彼なのだろう。確かに運転席ならば他の生存者に噛み付くような事態にはならない。しかし、予想以上に感染が早かったのだ。
既に感染者となった男がまともな運転など出来るはずも無く。そこで運が悪い事に安定したのか、今まで蛇行していたトラックが真っ直ぐ塀に向かって走り始めた。
「まずい！　皆塀から離れろ！！」
慌てて作業をしていた美樹達に向かって叫ぶ。だが、塀に阻まれて状況が理解できていない美樹達は首を傾げている。
「トラックが突っ込んで来るんだ！　早く逃げろ！！」
厚志の鬼気迫る様子にようやく美樹達が離れ始める。

だが、圧倒的に――――遅い。
「大槻君！　君も早く避け――――」
振り向くともうすぐそこまでトラックが迫っていた。
厚志は咄嗟に大介を蹴り、少しでも遠くに移動させる。そして、自分も塀を蹴り、トラックがぶつかる場所から少しでも離れようとする。
次の瞬間、轟音と共にトラックが塀を突き破った。
塀を形作っていたコンクリートが大小様々な破片となって宙を舞う。
その一つが厚志の腹に当たった。
「が……ぁっ！？」
そのまま受け身らしい受け身も取れず、厚志は地面を転がった。
遠くでもう一度轟音が聞こえた。
厚志は腹の痛みに耐えながら何とか身体を起こして状況を把握しようとした。だが、受け身を取れなかった事で予想以上に身体を打っていたらしく、全身に痛みが走り起きる事が出来ない。
早く立たなければいけない、そう自らを鼓舞するのだが身体は言う事を聞いてくれない。裏の塀の近くにいた感染者はある程度倒してはあったが、どこから沸いて来るか分からない。早く状況を確認しなければならなかった。
その時、厚志の傍らに誰かが近寄って来る。
「厚志さん大丈夫！？」
「美、樹……状況……は……？」
一瞬感染者と勘違いしかけた厚志は、何とか声を出し、美樹に聞く。
「一応皆無事、でも……トラックは……」
厚志は助け起こされながら美樹が見ている先に視線を向けた。
「……くそ、何でこうなるんだ……！！」
呻いた厚志の視線の先には、門の真横に突っ込み横たわるトラックと、塀が崩れた事により我先にと敷地内に侵入を始めた感染者達の姿があった。

第17章　葛藤と最悪の事故（後書き）

ご意見、ご感想お待ちしております。

一回みたことのあるようなオチになりました。
申し訳ないです。

ここで重大発表です！

え～、最近作者の勝手な事情でスランプ気味なのです。
そのため、定期更新をやめて、不定期更新にさせていただきたいと思います。
作者の勝手な事情で申し訳ないのですが、その分ほかの作品などをあげるつもりですので、よろしくお願いします。
もちろん、この作品もちゃんとあげるつもりです。

第１８章　救いと絶望（前書き）

一ヶ月も更新しなくて申し訳ないです。

ちまちま書きながら何とか一章分たまったので載せます。まだ推敲などはしていないので、お見苦しいところもあるかもしれません。

更新していないにもかかわらず、お気に入り登録してくださった方々、いつも読んでくださっている方々ありがとうございます。

増えていくＰＶとお気に入り件数が今の心の支えです。

第18章　救いと絶望

「おいおい……最悪な状況じゃないか……」
多田は呻きながら、美樹に支えられて立ち上がろうとしていた厚志に駆け寄った。
「藤堂、指揮は俺が引き継ぐ、お前は美樹ちゃん達と逃げる準備しとけ！」
「待て……俺は大丈夫だ……」
「支えられて立ってるのがやっとの奴が何言ってる……トラックに生存者がいないか見てくるからお前はうちにあったトラックが動くか確認してくれ！」
「お前だけでは……」
「今こうして押し問答している間にも感染者がトラックを囲んでいってるんだ！　うだうだ言ってないで早く動かないと助けられるものも助けられないんだよ！！」
それ以上の反論を許さず、多田は立ち上がり厚志に背を向けた。
放っておけば厚志は必ず生存者がいないか確認しに行ってしまう。
そうなればただでさえ満身創痍の厚志が危険に曝され、そんな彼を助けるために美樹達が動いてしまう。そんな事態は避けねばならなかった。
そして、今五体満足で動ける人間は少ない。
多田も、厚志の言う皆を助けたいという気持ちが理解できないわけでは無い。だが、今この状況でそれに囚われすぎれば大切な『誰か』を失ってしまう。それが分かっているからこそ厚志と対立してしまう――しなければならないのだ。
「大森！　着いて来てくれ、トラックの連中を助けに行く！！」
「あ、はい！」
香奈と共に塀から落ちた大介を介抱していた大森はすぐに着いて来てくれた。もちろん小銃を肩に担いで。

「とりあえず逃げる準備を始めてくれ！　ここは放棄する！！」
それだけ言うと、多田は追い付いて来た大森と共に塀にその身体を突き刺し横たわるトラックに向けて走り出した。
「多田さん、どうやって助けるつもりですか？」
「……はっきり言って助けられるとは思っていない……」
「……そうですか」
多田の答えに明らかに落胆する大森。だが、それは大森も理解できているのだろう、それ以上追究してくる事も糾弾してくる事もなかった。
確かに状況は最悪だった。
トラックは横転。塀には大穴。一応トラックが邪魔をして大量に入って来ているわけではないが、それでも既に数十体の感染者が敷地内に雪崩込んでいる。しかも今もその数は増え続けている。
トラックの周囲には感染者がうろつき、生存者がいる事を感知したのか、荷台の壁を叩いていた。まだ背面にある扉までは数体しか到達していないのが唯一の救いだった。
数体の感染者が多田達に気付き、何かを求めるように手を突き出して近付いてくる。
「大森、距離を取って各個撃破！」
「でも下手に撃つとトラックに当たってしまいますよ！？」
多田と大森は足を止め、尻込みしていた。トラックは自衛隊の物とは違う運送用だった。そのため、ちょっとやそっとでは感染者に破られる事はないだろう。だが、銃は別である。荷台がいくら金属で出来ているとは言え、高速で撃ち出される金属の塊を何発も防げるようには出来ていない。
下手に弾が中に入れば、中で跳弾し生存者を殺してしまうかもしれない。そうでなくとも怪我は必至だろう。
確かに多田と厚志ならばある程度当たらないように撃つ事は出来るかもしれない。だが、今ここにいるのは普段から訓練している厚志ではなく、一般人の大森なのである。いくらクレー射撃で鍛えてる

とは言え、やはり実戦形式での訓練をしている多田達には及ばない。何より、あまりの事態に動転しているため、まともに射撃が出来るとは思えなかった。

「くそ！　どうにか助ける方法は無いのか！？」

多田がいくら考えても解決方が出ない自分に悪態を吐いた。大森も不甲斐なさに拳を握り締めている。

その時、横転したトラックの荷台に繋がる右側の扉――現在は上側になっている扉――が開いた。どうやら電動式らしいが、重力に逆らって開かないといけないため、かなり時間がかかった。

「くそ……一体何が……」

中から出て来たのは額から血を滴らせている男だった。迷彩色の作業のような服を着ている所を見ると自衛官らしい。

「おい！　あんた、大丈夫か！？」

「……っ、あ、貴方は……？」

「無線で話した多田だ！　階級とかはこの際言わなくていい！！とりあえず中に何人いるんだ！！」

多田はとにかく早く行動するためにそう叫んだ。こうしている間にも感染者達は塀とトラックの間から溢れ、敷地内に入って来ている。音を出せば出すだけ寄ってくるのは理解していたが、焦りから叫ばずにはいられなかった。

「私と一組の母親と子供、後は学生が一人だけです！！」

（……減ってる）

多田は表情に出さないようにして心中で呟いた。

恐らく先程襲われた際に死んだのだろう。最初に報告された人数よりも半数以上減っていた。

見れば扉の端から母親らしき女性と少年が顔を覗かせていた。

「何とかこいつらを減らせませんか！？」

「……無理だ！　下手に撃てば貫通してしまう！！」

「……なら民間人だけでも助けてください！　俺が道を開きますから、援護お願いします！！」

「なっ！？　ま、待て！！」
多田が止める間もなく自衛官が扉を飛び越え近くにいた感染者の頭に八九式小銃に装着していた銃剣を突き立てた。
そのまま自衛官は機敏な動きで近付いていく感染者達の頭を撃ち抜く。その動きは無駄が無く、かなりの能力を持っている事が感じられた。
だが、話している間にかなりの数の感染者が集まっていたため、中々進めない。その場を守るのが精一杯の様子だった。
「皆さん、早く出て来て下さい！！」
自衛官の言葉に押されるように顔を覗かせていた高校生位の少年が出て来る。次いで母親が子供らしき小学校高学年位の少女を抱えて少年に渡した。少年が少女を抱えたのを見ると母親もトラックから出て来た。
「……っ！　大森、援護するぞ！！」
「っ！　はい！！」
ようやく全員が出た事で、当たる可能性が減ったため多田達は援護射撃を開始した。と言って今度は跳弾や誤射の可能性があるため離れた感染者しか撃つ事が出来ない。
ただ、このままではじり貧になるだけだった。多田達は援護射撃だけでなく、銃声に反応して近付いてくる感染者を倒さなければならない。加えて自衛官達も戦ってはいるが実質戦闘しているのは自衛官と少年のみである。訓練していない少年はもとより、守りながら戦っている自衛官も息が切れている。だが、そんな彼らを嘲笑うように感染者は続々と増えていく。
「ぐ、ぐあぁぁぁぁぁぁ！？」
疲れから注意が散漫になっていたのか、少年が横から掴まれ、噛み付かれていた。
「……まずいっ！！」
多田が少年に噛み付いている感染者の頭にポイントし、撃つ。外れた時の事よりまず先に助ける事を優先した。

弾は感染者の頭を突き抜け、少年を傷付ける事なく背後から近付いていた感染者の肩に突き刺さった。
「……ありがとう！」
「……気にすんな！」
お礼を言う少年に答えながら、多田は唇を噛み締めた。
これで少年は助からない。噛まれた者は遅かれ早かれ感染者になる。
それは少年も知っているのだろう、どこか諦めたような雰囲気を漂わせながら近付いてくる感染者にバールを振り下ろした。
と、子供を抱きしめていた母親が自衛官に何か言っていた。銃声や頭を割る音で聞き取れないが、自衛官は苦い表情をした後、頷いた。
「自衛官の方！」
「……？　俺か？」
「はい、このままでは全滅してしまいます……この子だけでも……この子だけでも助けてください！！」
「……な、……っ」
母親の言葉に即座に反論しようとしたが、多田は言葉を発せられなかった。今のこの状況では全滅する事は必至だった。
感情に流されて反論し、他の方法を探している間に自衛官がやられてしまえばそれでおしまいなのである。だから、多田は唇を噛み締めそれ以上言葉を続けられなかった。
「え？　お母さん何言ってるの！？」
「奈々子、言う事を聞いて……このままでは皆死んでしまうの……」
「……でもっ」
「お願いだから……奈々子が生きてくれれば私はそれでいいの……お願いだから生きて……」
「嫌！　お母さんと離れたくない！」
少女――奈々子が母親にしがみつく。だが、彼女は抱きしめかけた手を何とか抑え、首を振り、奈々子から身体を離した。
「お願いします！　奈々子はまだ中学に上がったばかりで……私の

……私の宝物なの！　どうかこの子だけでも助けて！！」
母親が涙を流しながら言う。
中学に上がったばかりという事は恐らく十二、三歳なのだろう。調度つい最近死んだ多田の妹――と同じような年頃。
多田は迷いを断ち切るように首を振ると答えた。
「分かった！！」
「多田さん！？」
大森が何かを言おうとしたのを手で制し、多田は首を振った。
多田が迷えば迷うほど少女が助かる可能性は下がっていく。恐らく厚司ならば全員を助ける方法を模索するだろう。だが、ここにいるのは多田だ。
彼は全員を助けるために仲間を危険に曝す事も、全員を死なせる事も出来なかった。
「どうすればいい！」
「私が彼女を投げます！　何とか近くまで来れますか？」
「分かった！　出来るだけ近付く！！　大森、援護を頼む！！」
自衛官とのやり取りが終わると同時に、近場にいた感染者に弾を撃ち込む。間髪入れず隣にいた感染者に銃剣を突き立てる。
手榴弾を使えば一気に道は開けるかも知れないが、破片が自衛官達に当たってしまえば意味が無い。伏せれば何とか避けられるかもしれないがその分隙が出来てしまう。故に直接倒して道を開かねばならなかった。
出来るだけ近くに行き、出来るだけ安全な状態にする。ただそれだけを考えて突き進む。
自衛官達に向かって進んでいるため、大森の援護は銃ではなく誰かが部屋に置いていたらしい木刀だった。トラックが突っ込んだ際に集めていた武器が飛び散ったため、近くに落ちていたものなのだろう。
「そこで十分です！　行きます！！」
「あ、ああ！　大森、俺に感染者を近付けるな！！」

小銃を肩に担ぎ、両手を空け、受け止める体勢を作る。背後で何かが割れるような音がしたが、今は気にしていられない。ただ奈々子を受け止める事だけに神経を集中させる。

「いや、いやぁっ！　お母さんっ！！」

自衛官に担ぎ上げられた奈々子が暴れ、叫ぶ。だが、自衛官は有無を言わさずその腕力をフルに使い――投げた。

中学生くらいの少女が宙を舞う。奈々子が仮に平均体重だったとしても四十キロは下らない。それを数メートル離れた多田に向けて投げた。恐らく火事場の馬鹿力もあるのだろうが、尋常ではない筋力をしているのも確かだった。

「くっ！？　受け止めた！　大森、下がるぞ！！」

「は、はい！！」

奈々子をなんとか受け止め、急いで下がる。暴れる彼女を何とか押さえながら多田達は安全な――あくまで感染者がすぐには来れない距離の――場所までたどり着く。

「もう大丈夫だ！」

「ありがとうございます……これで……これであの人に顔向け出来る……」

母親はそう言うと同時に、今までギリギリ保っていた防衛線が破られた。自衛官達の悲鳴と共に何かを咀嚼する音が聞こえてくる。

「お、お母……さん？」

多田は奈々子を抱きしめる事で見えないようにした。奈々子は暴れる事も、涙を流す事も無く、ただ放心していた。

「大森、藤堂達の所に戻るぞ」

「はい……」

多田は胸中で自分の不甲斐なさを呪いながら藤堂達の元へ移動を始めた。なるべく足音を出さないようにしていたためか、それとも目の前に新鮮な食物があるためか、感染者達は多田達に気付く事無く食事をしていた。

完全に隠し切れなかったためか気絶していた奈々子を抱き上げ、多

田達は厚志達がいる破壊された裏の塀に向かった。
かなり大きく削られた塀の近くでは厚志が既に起きて指揮をとっていた。
「藤堂！　もう動いて大丈夫なのか？」
「ああ、まだ少しくらくらするが寝てるわけには行かないからな……」
厚志は未だ万全ではないのだろう、少しふらつきながら答える。だが、今は本当に寝ている場合ではなかった。
元々表から奈々子達を迎える事を考えていたため、多田達のA棟の入口は表側の玄関以外全て塞いでいる。そして、今その唯一の入口の側には既に数十体の感染者がうろついている。
例え、なんとかA棟に避難できたとしても袋のネズミになるだけである。
「藤堂、ここは放棄しよう、もう戻るのは無理だ」
「……ああ、分かっている。ところで避難してきた人はどうした？　まさか……」
厚志は多田が抱き抱えている奈々子を見て気付いたのだろう。眉を吊り上げると胸倉を掴んできた。
「お前が着いていて何でこの子しか助けられなかったんだ！！」
「……言い訳するつもりは無い。俺は、この子だけでも助けられたのはよかったと思っている」
「お前っ！！」
厚志の拳が迫る。だが、痛みは来なかった。見れば大森が両手で掴んで止めていた。
鍛え方では自衛官である厚志には及ばないが、やはり大森とは体格差がある。両手を使われればさすがに動かないようで、何度が動かそうと試みていたが、やがて諦めたのか厚志は胸倉からも手を離した。
「藤堂さん、多田さんは――――」
「止めろ、何を言っても見捨てた事には変わらない」

「でも……分かりました」
まだ何か言いたそうだったが、大森は肩を竦めて厚志の腕を離した。
厚志もそれ以上は何かするつもりは無いのか、踵を返すと指示に戻っていった。
「……ふぅ」
多田はため息混じりに肩を竦めた。少し自嘲も入っていたかもしれない。
確かに最終的には救えなかったが、多田も初めから誰かが死ぬとは思っていなかった。厚志が万全であれば早々に近付く感染者を掃討し、牽制しつつ全員助けられたかもしれない。しかし、それはあくまでも『かもしれない』というだけで、いまさらそれをとやかく言っても始まらない。まして厚志に責任があるわけでも無い。
多田は一瞬でも『かもしれない』を考えた自分をさらに自嘲もした。
「……私は香奈ちゃん達を手伝ってきます」
大森は居づらくなったのか、多田が頷いたのを見ると足早に横倒しになった、寮にあったトラックから荷物を出している香奈達の所に駆けて行った。
状況は最悪だった。もしもの時のために半分ほどの食糧や武器を積み、待機させてあったトラックは横倒しになり、今は何とか無事な荷物を運び出している。背後では既に自衛官達を食べ終えたらしい感染者達がよたよたと向かって来ている。しかも、裏の方の塀にも音を聞き付けたらしい感染者が集まって来ている。
このままここにいれば八方塞がりになるのは目に見えていた。
（落ち着け、今はこの状況を打開するのが先だ……）
多田は深呼吸をして、気持ちを切り替え厚志に近付いていく。
「藤堂、ここはもう駄目だ。別の場所に避難しよう」
「……ああ、分かっている。多田は指揮を引き継いでくれ、俺は用がある」
厚志はまだどこか釈然としないものがあるのだろう、一瞬眉をひそめたが、すぐに指示を出した。今は争う事よりも生き残る方が大事

だと理解できているからこその行動だった。
生きていなければ争う事も出来ない。
「用ってまさか……」
「赤石達に事態を知らせてくる。あれだけの事があって気付いていないとは思わないが生存する確率は上げておかなければならない」
「～～～っ、分かったよ！　ただし一人では行くな、お前の声に集まった感染者を見張る役を一人は連れていけ」
厚志の真剣な言葉と眼差しに多田は頭を掻き吐き捨てるように言った。
付き合いが長いからこそ分かる。こうなった厚志は何があっても引かない。だからこそ、ここで反論すればまた意見の食い違いから争ってしまうのも分かっしまう。かと言って全てを認めて送り出すわけにはいかない多田は妥協案として誰かと一緒に行動するように言った。
厚志一人なら死んででも誰かを助けようとしてしまう。だが、誰かが一緒にいれば安全圏まで守ろうとするはずである。多田は自分の案に嫌気がさしながらも提案せざるをえなかった。
ここで厚志を失うわけにはいかないのだ。生き残るための戦力としても、美樹達の心の支えとしても。そして、何より親友として失いたくなかった。
「分かった……多田」
「何だよ」
「……いや、何でもない」
「……さっさと行け。こっちは残りのメンバーと裏から出てるからさっさと来いよ」
何か言いかけた厚志は首を振ると肩を竦めた。多田もそれ以上何も言わず、いつものように軽い感じで厚志を送り出す。
「分かった。大槻君！　すまないが一緒に来てくれ！」
厚志が走っていくのを確認した多田は、トラックから積み荷を下ろしている美樹達の所に向かった。

「美樹ちゃん、今どんな感じだ？」
「積み荷は元々あまり多くないのでだいたい降ろせたんですが……」
「……」
美樹は腕を組みながら積み荷を見た。そこには、多くはないとは言え、今いるメンバーでは到底運べない量の荷物が積み上げられていた。もちろん皆で運べば半分くらいは運べるはずなのだが、それではいざ感染者に襲われた際に戦えない。
「とりあえず食料七割、武器三割程度でリュックに詰めるだけ詰めてくれ、って言っても美樹ちゃん達でも持てるくらいには留めておいてくれ。あと武器はなるべく鈍器と銃半々で」
「は、はい、分かりました」
「済まないが、この子をよろしく。俺は感染者が近付いてこないようにしておく、なるべく急いでくれよ！」
美樹の返事を聞く前に、奈々子をリュックサックを枕代わりにして寝かせると近くにあった装填済みの弾倉を掴んで今まさに裏の塀の瓦礫を越えようとしている感染者に向かっていく。
武器を鈍器と銃で半分ずつにしたのには理由がある。安全な場所に立て篭もっているならともかく、今からはいつ襲われるか分からない街中を移動しなければならない。この先銃弾を補充する見込みは日本という国では限りなく低い。もちろん銃はあるに越した事はないが、いざという時に弾が切れては元も子も無い。それを防ぐためにもどうしても鈍器は必要だった。
（……ったく、結局俺も厚志と変わらないのかね）
少し自嘲しながら銃を構えて瓦礫を越えた感染者を撃つ。
先程赤石に事態を伝えに行くと言う厚志を無理矢理止める事は出来た。だが、多田は了承した。厚志だけでなく大介にも危険が迫る事が分かっていたのに、だ。
それは、一重に長い付き合いだからというだけではない。多田自身も人に死んでほしいわけではないからだ。だからこそまだギリギリで間に合うと判断して厚志を向かわせた。

ただ、多田は誰でも彼でも助けたいとは思っていないのもまた事実だった。大切な者が無事ならそれでいいとさえ思っている。
今でこそここにいる美樹達が危険に曝されれば助けるが、初めに美樹を助けた際は、厚志が死なないように着いて行っただけだ。
（チッ、次から次にわらわらと！）
胸中で悪態を吐きながら表の方から迫って来ている感染者を撃つ。
今の所裏から侵入してくた感染者はさっきの一体だけだが、銃声に釣られて集まってくるはずである。既に表の方から来ている感染者との距離はかなり縮まっている。あまり時間をかけているわけには行かなかった。
二つ目の弾倉が空になるかという時に待ち侘びた人物達が姿を現した。
「悪い、待たせた！」
「ああ、赤石達はなんて？」
「……ここなら安全だから早く出て行けだとさ」
少し寂しさを漂わせながら厚志が言う。ある程度初めから分かっていた事だがそれでも直接言われるのは堪えるらしい。
「そうか……なら、お望み通り早くここを離れるぞ！」
「……ああ」
まだどこか心残りがある様子の厚志の背中を押し、美樹達の元へ向かう。既に表から向かってくる感染者達との距離は十メートル程度しかない。
「離れるぞ！　準備はいいか？」
「はい、大丈夫です！　これ、多田さんの分です！」
「大森、奈々子ちゃんを頼む」
「分かりました」
食料や鈍器等が入ったリュックサックを受け取り、背負う。多田の指示で大森がリュックサックを背負い、奈々子を抱き上げる。他のメンバーの準備が調ったのを確認すると、武器を構えた。
「よし、いくぞ！」

近付いて来ている感染者の動きに注意しつつ、多田達は寮から脱出するために、ぽっかりと口を開けた裏の塀に向けて移動を始めた。

第１８章　救いと絶望（後書き）

ご意見、ご感想お待ちしております。

今回もまだ寮を脱出しきれなく申し訳ないです。

あと数章で寮編は完了するつもりですので、温かい目で見守っていただければ幸いです。

第１９話　脱出と後悔（前書き）

え～約一ヶ月ぶりの更新です。

待ってくださっている方、本当にごめんなさい。

まだまだスランプです……。（むしろ酷くなっているような気もします）

しかも、今回短いです。

重ね重ねすいません。

第１９話　脱出と後悔

厚志は未だに迷っていた。
というのも、赤石達はここが安全だからという事で寮に残ると言っていたからだ。確かに寮には武器もシェルターもあり、また一年近くは寮生が過ごせるだけの食料もある。それだけ見れば安全で篭城に向いているように見えるが、それはあくまでも周りを囲む高い塀があり感染者が敷地内に侵入していない場合である。
今や塀は破壊され、感染者は敷地内に相当数入り込んでいる。寮の窓やドア等はリミッターの無くなった彼等の力を持ってすればすぐに破られてしまうだろう。
もちろん早々にシェルターに逃げ込めば大丈夫だろうが、いかんせんシェルターのドアは閉まるまで時間がかかってしまう。しかも、シェルタは地下にあるため必ず感染者達の傍を通らなければならない。
いくら向こうに二名の自衛官と人数で割って分けた武器があるとは言っても、相手は頭を潰さない限り動き続ける感染者達だ。犠牲が出ないわけがなかった。
だからこそ厚志は身を危険に曝しながら状況を伝えに行ったのだ。
だが、赤石達は頑として寮は安全だ、と言い厚志の言葉には耳を貸さなかった。三階の窓から顔を出していたため塀が破壊されて、感染者達が大量に敷地内に入って来ているのは見えていたはずだ。
（くそ、俺はただ人を助けたいだけなのに……何でこうなるんだ！）
厚志は胸中で悪態を吐きながら、殿りを勤める。
まず多田が塀の向こうの安全確認を行い、合図を受け取った美樹と香奈、大森が続く。大森は現在非難して来た者達の唯一の生き残り、奈々子を抱いているため戦う事が出来ない。そのため、美樹と香奈に守られる幼女を抱いている熊のような大男というシュールな光景になっていた。

そんな四人の後ろに拳銃を持って辺りを忙しく警戒する大輔。そして、殿に厚志が迫る感染者達を警戒していた。

「藤堂、もう大丈夫だ！」

「……」

厚志は多田の声が耳に入っていなかった。警戒事態は訓練によって身体が覚えていたためある程度無意識でも出来ていたが、声までは無意識で認識する事が出来なかった。無論普段なら無意識でも聞く事が出来ただろうが、今厚志は赤石達の事に気を取られていたため気付く事が出来なかった。

その時、A棟から銃声と共に悲鳴が聞こえてきた。咄嗟に厚志は走り出そうとする。

「っ！？　藤堂さん危ない！」

「……えっ？」

ぐいっと身体を引かれ、たたらを踏む。何とかこける事を阻止した厚志の耳に、銃声が聞こえてきた。かなり至近距離だったため少し耳が痛む。

「何してるんですか！　死にたいんですか！？」

声の主は大介だった。彼を挟んだ向こう側には感染者が一体倒れていた。

拳銃をを構えたまま大介は険しい表情で厚志を見た。

「早くしてください、もうあの人達は置いていくんでしょう！！」

「だ、だが……っ」

「今ぐずぐずしてたらあんたの仲間が死ぬかもしれないんだよ！もう目の前で知り合いが死ぬのは嫌なんだよ！！」

厚志の煮え切らない態度に苛立ちがピークに達したのか、大介が胸倉を掴んで怒鳴った。もはや敬語などなく、ただ思いをぶつけられる。

今さらながら厚志は自分の行動で今まさに美樹達が危険に曝されている事に気付いた。

赤石達を救うために美樹達を危険に曝す。本末転倒とはまさにこの

事だった。
今厚志が助けに云った所で何が出来るわけではない。赤石達は自ら残る事を選択し、その選択故に戦っている。自業自得である以上、仕方がない事だった。だが、心のどこかで納得できないのも確かだった。
「藤堂さん、早く！！」
「あ、ああ……すまない……」
まだ納得しきれない厚志の足は必然的に遅くなる。業を煮やしたのか、先に歩き出していた大介が戻って来た。
「藤堂さん、何してるんですか！？」
「……すま――っ！？　危ないっ！！」
大介の真後ろに今まさに襲いかからんとする感染者が見えた。厚志は咄嗟に大介を横に押し飛ばし、感染者の頭に八九式の銃底を叩き込んだ。鈍い音と嫌な感触が手に伝わる。
他に近付いている感染者がいないか確認しておく。とりあえずすぐには襲われるような距離に感染者がいない事を確認すると、ホッと胸を撫で下ろした。
「ぐぅっ！？　は、離せ！！」
大介の緊迫した声に反応して、彼がいるはずの方向に顔を向けた。そこには、先程呆けていた厚志を助けた際に倒したはずの感染者に腕を噛まれている大介の姿があった。
恐らく位置が悪かったのだろう。額に穴は空いているものの、後頭部に損害は見られない。
ごく稀にだが、頭蓋骨で銃弾が止められる事がある。もちろん例え拳銃用の口径の小さい弾とは言え、至近距離から撃たれた場合そんな事になる確率は限りなく低い。しかし、今回は最悪な方向で奇跡的に頭蓋骨が弾を止めたらしい。
「う、うぁぁぁぁぁぁ！！」
厚志は頭が真っ白になり、ただ大介から感染者を引き剥がすために銃底を頭に叩き込む。噛まれたままだったため大介が痛みに呻くが、

厚志はただ引き剥がす事しか考えていなかった。
数度銃底を叩き込むと、感染者は動かなくなった。同時に顎から力が抜けたため生々しい音と共に感染者が腕から外れた。
「はぁっ、はぁっ、はぁっ！」
「……藤堂さん、ありがとうございます」
「……っ」
大介の落ち着き払った声に厚志の頭は一気に冷静さを取り戻した。
次の瞬間、大介が噛まれたという事実を再認識して、愕然とした。
「あ、ああ……俺……俺のせいで……っ」
「……違います。俺が倒し切れてなかったのが悪いんです。藤堂さんは悪くありません」
「でも、俺が君を飛ばしたせいで！！」
厚志は感染者が寄ってくる事など構わず叫んだ。
さらに叫ぼうとした厚志を大介は静かに手で制した。
「厚志さん、今はそんな事言っている場合ではないです。早く多田さん達の所へ行ってください」
「君を置いていけない！」
「俺は既に噛まれています。噛まれた者がどうなるかは何度も見てきたんですから知っているでしょう？」
厚志は大介の言葉に黙り込んだ。
今も厚志達の背後には感染者達が迫って来ている。それも数体や数十体ではなく、百を超える感染者が迫っていた。
感染者に噛まれれば、待っているのは彼等に仲間入りして知り合いや友人に襲い掛かる道しかない。治療薬などという縋り付ける物はなく、ただ感染者になるのを待っているか、頭を破壊して死ぬしかない。
もしくは――
「厚志さん、手榴弾をありったけ下さい」
「……駄目だ」
「俺を連れて行ってどうするんですか？　いずれあいつらと同じに

なって藤堂さんを襲いますよ」
迫り来る感染者を指差して自嘲しながら言う大介を前に厚志は黙り込む事しか出来なかった。
ここで駄々をこねたところで事態が好転する事はないのは理解している。だが、それでも厚志には譲れないものがあった。
「やっぱり駄目だ。何とか助かる方法を探そう……もう目の前で人が死ぬのは嫌なんだ」
「そうですか、分かりました……」
大介の言葉に、厚志は俯いていた顔を上げる。次の瞬間、首筋に衝撃が走った。
視界がグラつき、意識が保っていられなくなる。
「……ありがとうございます、嫌な役を押し付けてしまいました」
「いや、どうせこのまま話していてもラチがあかないからな……仕方ないさ」
大介の言葉に答える声に聞き覚えがあった。
それは、親友であり同期である多田だ。
多田が自分を殴った事よりも、大介を見捨てる選択をした事に厚志は驚愕していた。多田は最後の最後では誰かを助けられる人間だと思っていたからだ。
「な……ぜ……」
明滅する意識の中、何とか声を出そうとする。だが、まともな言葉にはならず、単語のみしか発せなかった。
「すまんな……今……しを……なうわけには……ないんだ……」
「あなたには……だ、帰りを……ている人が……るでしょう?」
もはや途切れ途切れにしか大介達の言葉は届かない。それでも何が言いたいのかは理解できた。
(大介君にだって待っている人はいる!)
叫ぼうとした言葉は声になる事は無く、ただ頭の中で響くだけだった。
「さ……やく……堂さんを……」

「ああ……がとう……」
二人が別れの会話をする。
一時的なものでは無く、永遠な別れの会話。
（やめろ……やめてくれ……！）
落ち行く意識の中、必死に声を出そうとする厚志を嘲笑うかのように、遠くで何かが爆発する音が聞こえた。

第１９話　脱出と後悔（後書き）

ご意見、ご感想お待ちしております。

とりあえず、今回で厚志達の寮編は終了です。

次回更新はいつになるか未定ですが、なるべく早く上げたいと思いますので、気長にお待ちいただければ幸いです。

幕間　彼等のその後（前書き）

前回の更新から1ヶ月かかってしまいました。

毎度毎度遅くて申し訳ございません。

感想書いてくださった方も返信遅くなって申し訳ございませんでした。

今回は厚志達の本編ではなく、寮で別れた赤石達のお話です。

※第１１章のあとに幕間をもう一つ追加しました。
割り込み投稿すると更新されたことにならないので、良かったらそちらも読んでください。（１１章で厚志が救えなかった康太と奈穂のお話です。）

幕間　彼等のその後

「何故、こうなった……」

うごめく感染者達を二階にある一番広い部屋から見下ろしながら、男は呻いた。

男の背後では、恐慌状態に陥り、ここに詰めかけて来た一般人を落ち着かせようと奮闘する自衛官達がいた。

つい先ほど轟音と共に敷地内にトラックが突っ込んで来た。裏側から突っ込んで来たトラックは、あろう事か表の――数百の感染者が集まる――壁に突き刺さった。

元々はそのトラックで避難してくる者達を受け入れるだけだった。だが、予期せぬトラブルが起こったのだろう。結果として安全だったはずのこの場所は今や数百の感染者が押し寄せる、危険地帯になってしまった。

「余計な事を……」

男――赤石は再び呻き、苦虫を噛み潰したような表情で振り返った。

意見の違いから、向かいにあるB棟に立て篭もり、他の者を救おうとした若い自衛官達の顔が頭を過ぎる。

（……やはり殺しておけばよかったな）

物騒な事を考えながら机の一番上の引き出しから拳銃を取り出す。弾が入っているのを確認すると、片手に持ち、まだ喚いている一般人達に声をかけた。

「落ち着け！　この地下にシェルターがある、助かりたければ武器を持ってさっさと降りるぞ！」

「し、しかし一般人に銃を渡すのは……」

すかさず若い自衛官が反論してくる。このような状況でもまだ一般常識や規則を持ち出す自衛官に苛立ちながら赤石は答えた。

「弾幕くらいなら張れるだろう！　ごちゃごちゃ言っている間に奴

らが中に入って来たらどうする！？　貴様が責任を取れるのか！？」

「……っ、わかり、ました」

怒りを何とか押さえ込んだ様子で、若い自衛官は拳を握りながら頷いた。そんなやり取りをしている間にもう一人の自衛官が武器を持ってきていた。

武器と言っても基本は拳銃で、自動小銃は赤石や自衛官がむ一般人達にも武器が渡り切ったのを確認すると、赤石を口を開いた。

「よし、武器が渡りきったな……私と君が先頭、貴様は殿、一般人はその間だ」

赤石は先に年輩の自衛官を指し、先程逆らった若い自衛官に殿を命じた。

敢えて若い自衛官に殿を任せたのには理由がある。赤石は自らに逆らう者を嫌う。特に今のような状況でそんな人物を残しておいても自分に利益は無い。むしろ、命令できる地位にいたい赤井にとっては後の敵になる事が容易に想像できた。

だからこそ、殿を命じた。普通ならば前を行く赤石達が危険に思えるが、まだ感染者が寮内に侵入していない今ならば危険は少ない。感染者の侵入とタイミングがあってしまえば危険になるが、それなりに頑丈に作られているため、余程一箇所に加重かかからない限りすぐには破られないだろう。だが、それも時間の問題である。

「そこの階段を下りればすぐだ、お前はここで見張りをしていろ」

「……了解しました」

若い自衛官は不服そうだったが、赤石は無視した。一々揉めている時間は無い。

既に赤石達が出す足音なのか、それとも匂いに反応したのか、大量の感染者が窓を叩いていた。階段のすぐそばにある窓など今にも破られそうなほど軋んだ音を出していた。

こちらの寮にはシェルターの入口の目の前に出られるエレベーターは無い。エレベーターはいざという時停まる可能性がある上、も

し感染者が詰め寄ってきた際に運悪くボタンを押されてしまえば感染者のお出迎えを受けてしまう。

赤石がB棟を選んだのはそんな理由だった。ただ、問題があるとすればB棟からシェルターの入口までは少し歩かないといけない事だった。

（こんな事ならこちら側に入口を作っておけばよかった！）

赤石は心の中で悪態を吐きながら若い自衛官を残し、階段に向かう。

シェルターは地下一階ではなく、強度を保つため天井にも分厚い壁を作るため大体地下二階程度まで下りなければならない。もどかしさに逸る気持ちを抑えつつ、赤石は階段を下りていく。

「ここまで来れば……赤石一佐！　近藤を呼びま――」

年輩の自衛官が若い自衛官を呼ぶ許可を求めてくる。だが、その言葉が終わる前にガラスが割れる音が聞こえてきた。

上の階から叫び声と共に銃声が聞こえてくる。

「赤石一佐！」

「もう手遅れだ、今は早くシェルターに向かう！」

「しかし……！」

「うるさい、黙れ！　行くなら一人で行け！！　私はあんな奴のために死ぬ気は無い！！」

「……っ」

押し黙った年輩の自衛官を置いて、赤石は歩き始めた。こうしている間にも感染者は迫って来ている。

既に銃声は聞こえなくなり、代わりに転げ落ちるような音と呻き声が聞こえ始めている。恐らく、感染者が階段を踏み外して落ちているのだろう。

人間ならば階段の傾斜やバランスを考えて下るのだが、既に死んでいる感染者はそんな高度な事が出来るわけが無い。

歩くや走るといった動作はかなり高度な動作なのである。ロボットが何年もかかってもぎこちない歩く事や走る事――というかほと

んど競歩だが―が出来るようになったように各種センサーやバランスを司るプログラムなど多種多様な情報や自己の制御を必要とする行為なのである。階段を下りるなど、さらに難しい行為である。

そんな動作を食う事しか残っていない感染者達が出来るはずも無く、一段目を踏み外して転げ落ちているのだろう。

ちなみに、登る事は出来ないわけでは無い。感染者は食い物（にんげん）に対して異常な執着を示す。下りる時は転げ落ち、登るときは這って登る。そうまでして追うほど感染者達は飢えているようだ。

（やはり奴らから逃げるには立て篭もるしかないようだな）

赤石は何度もそういう場面を見ていた。厚志達が来るまでは最初に逃げ込んできた近所の住人以外誰も受け入れず、見捨ててきた。といっても、そもそも感染者が門に集まっていたため入る事すら出来ない状態だった。そういう連中は近くにあるマンションやアパートに逃げ込んでいた。

どうやら階段を登れないと踏んでいたらしいが、そんな淡い希望はすぐに壊された。音に集まる習性を知らなかったらしい彼らは赤石達に大声で助けを求めた。

大声に反応した感染者はマンションに殺到した。入口を塞ぎ、階段からは登ってこないと高をくくっていた彼らは、非常階段を這い登ってきた感染者に食われた。

それを知っている赤石はいち早くこの場を離れたかった。先程早く下りようとしたのも同じ理由だった。

（ちっ、足止めにもならないクズがっ）

赤石は心の中で吐き捨て、早足でシェルターの入口に向かう。

普段なら一分もあれば着くはずの入口が焦る赤石にはやけに遠く感じた。入口が目前に迫ったという時、背後で何か生々しいものがたたき付けられたような音がした。

思わず振り返る赤石。その視線の先に、雪崩のように折り重なるようにして階段から下りてくる感染者の姿があった。

「ひ、ひぃぃぃぃぃ！？」

「き、来たぁ！！」
感染者の姿を見た一般人達が悲鳴を上げる。
「沢田！　私がシェルターに入るまでここを死守しろ！！」
「……なっ。……了解、しました」
年輩の自衛官――沢田にその場を任せ、赤石はシェルターに走った。一般人達は一瞬逡巡したが、我が身が可愛いのか赤石に続いて走り出した。
何とかシェルターにたどり着いた赤石達は分厚い扉が開けっ放しになっていた入口を越えて入っていく。同時に狭い通路に銃声が響く。
「早く閉めろ！　奴らがすぐそこまで迫っているんだぞ！！」
赤石が叫び、今まさに入口を越えようとした一般人の男二人を呼び止める。二人は厚志が救い出した青年と老人だった。
「貴様ら、この扉が閉まるまでここを死守しろ！」
「な、何故わし達がそんな事せないかんのじゃ！？」
「あとは閉めるだけでしょう！？　俺達が何かしなくても閉めればいいだけでしょう！！」
すかさず二人が反論してくる。
それもそうだ。赤石の命令は二人に死ねと言っているようなものなのだ、簡単に頷けるものではなかった。
「グダクダ言っている間に奴らが来てしま――」
赤石の言葉を遮るように悲鳴が通路に響き渡った。それは沢田の守りが破られた事を意味していた。
「早くしろ一刻の猶予もないんだぞ！！」
「私が出ます、だから早く閉めてください」
先にシェルターに入っていた大学生の女が赤石の脇を通り抜けていく。それを赤石は止めた。
女は絶望したような表情のまま煩わしそうに振り向いた。
「貴様は駄目だ、若い女は必要だからな」
「……最低」

女は赤石の手を振りほどくと通路に出て行った。諦めたのか青年と老人も彼女に着いていく。

赤石は舌打ちすると入口脇にある扉の開閉装置に駆け寄った。

このシェルターのドアは金庫並の分厚い金属性のため、手動で閉めるためには男数人で押さないと閉める事が出来ない。そのため、つい最近電動式に変更したところだった。

（どいつもこいつも役立たずばかりだ！！）

心中で悪態を吐きながら赤石は扉を閉めるためにボタンを押した。だが、いくら押しても扉は一ミリも動かない。

「な、何故だ！？」

赤石の驚愕を余所に、もうすぐそばまで来ているのだろう、通路から銃声が響き始める。だが、やはり素人だからなのか、がむしゃらに撃っているらしく、すぐに聞こえなくなった。

元々役に立つと思っていなかったため、一般人には予備弾倉など渡していなかった。自衛隊で使用している拳銃は九発しか入っていないため、やたらめったら撃てばすぐに弾切れになってしまう。案の定彼女達も弾切れに陥ったらしく、シェルターに駆け込んで来た。

「扉は閉まらないの！？」

「今やっている！　だが閉まらないんだ！！」

「何ですって！？　なら手動は！？」

「む、無理だ！　あれは大の男数人でようやく動く代物なんだ！！」

「何でそんな物にしたのよ！！」

女に胸倉を掴まれながら揺さ振られる。先程まで絶望したような表情だったが、死が間近に迫って怖くなったのか、鬼気迫る様子だった。

「もうそこまで来ている！！」

入口に残り、通路を見張っていた青年が叫んだ。

「中に隠れる所はないの！？」

「もう終りだ、この入口ならともかく中の扉は普通のものだ……あの数には耐えられんよ」

「……っ、くそ！」

女は絶望した赤石を離すと、他の者達と共に奥に走って行った。

通路を見張っていた青年も一度赤石に視線を向けたが、眉をひそめると女を追って走り出した。

「……は、はは……もう、終わりだ」

赤石は壊れたように笑いながら、シェルターに入って来る感染者を見詰めた。だが、何故か分からないが感染者達は赤石を無視して女達が向かった奥の方に向かっていく。

「どこのドアも開かないわよ！？」

「鍵は、鍵はどこじゃ！？」

「あの人が持っているんじゃないのか！？」

奥の方から叫び声とも怒鳴り声ともつかない声が聞こえてくる。

感染者は音に反応する。臭いにも反応するようだが、今はそれよりも大声に反応したのだろう。入口脇にいる赤石を無視して感染者達は女達の元に向かっていく。

「い、いやぁぁぁぁ！　し、新橋君……助け――」

やがて、奥の方から悲鳴が聞こえて来た。それもすぐに聞こえなくなる。感染者に対抗できる若者は一般人の中に二人しかいない。数十、数百に及ぶ感染者に対抗しきれるはずがなかった。

「は、ははは……私は選ばれたのか？　私は選ばれたから襲われないのだ！！」

赤石は狂ったように笑いながら叫んだ。多田達から感染者の特製を聞いてはいたが、今の彼はそんな事も分からないほど狂っていた。

近場にいた感染者が赤石の声に反応して寄ってくる。だが、狂ってしまった彼はただ笑い続けた。

「がぁっ……は、ハハハ！　俺は……選ばレ……！！」

全身に噛み付かれ、噛みちぎられながらも赤石は笑い続けていた。

その笑い声は、感染者で埋め尽くされた地下に虚しく響いた。

幕間　彼等のその後（後書き）

ご意見、ご感想お待ちしております。

感想や評価などいただけるとモチオベーションが上がったり、下がったりします。

第２０話　目覚めと後悔（前書き）

え～通算四ヶ月もあけてしまい申し訳ございませんでした。
一応、一話分書けましたので、載せたいと思います。
お気に入りに入れていただいているかた、あまりの更新の遅さに外された方、皆様読んでいただいてありがとうございます。
あと、いつの間にか十万ＰＶを超えていたので、驚きと共に嬉しかったです。

今回から、寮を飛び出した厚志達の葛藤と、新しい出会いや別れを描いていきます。
よろしければ読んでいってください。

第２０話　目覚めと後悔

「厚志君、この子が私の妹の里緒よ」
「は、初めまして……よろしくお願いします……」
厚志の前に立ち、お辞儀しているのは篠部未果の妹の里緒である。未果と付き合い初めて半年が経ち、たまたま就職活動のためにこちらに来ていた妹を紹介したい、と呼び出されたのだ。
快活で、誰とでも仲良くなる事の出来る未果とは真逆の印象を受けた。姉と同じ茶の髪を肩で切り揃えているが、眼を覆い隠すほどの前髪が暗い雰囲気を作り出している。前髪に隠れてちゃんとは見えないが、眼は忙しなく動き、厚志と合わせようとはしない。少し猫背気味の姿勢のせいで、余計に暗い印象を受けてしまう。
「俺は藤堂厚志、よろしく」
「〜〜〜っ」
握手をするため手を差し出した。だが、里緒は中々その手を取ろうとしない。
姿勢を正し、前髪を切れば十分美人と言えるはずの整った体と顔を持つ里緒は、視線に耐えられなくなったように未果の背中に隠れてしまった。
「あ、こら！　何で隠れるのよ！」
「んー、嫌われたかな……？」
厚志は苦笑しながら、握手される事なくさ迷った右手で頬を掻く。
「全く、この子は昔から人見知りなのよ……それも重度のね。私以外の誰とも仲良くしようとしないの」
「そうなのか」
「はぁ、こんな状態で本当に就職できるのかしら……」
ため息を吐きながらも里緒の頭を撫でる未果の顔は、穏やかなものだった。本当に仲が良いのだろう、撫でられる里緒の表情は、先程とは打って変わって緩み切っていた。

「まぁ、こんな妹だけど仲良くしてね」
「当たり前だろ、未果の家族なんだから」
「それもそうね」
穏やかな笑みを浮かべる未果に釣られて、厚志も笑顔を浮かべた。
未果は周りを穏やかな気持ちにさせる女性なのだ。何がそうさせている、というのは明言できないが、少なくとも厚志は、彼女という事でどんなに荒んだ気持ちも和らぐのを感じていた。そんな天性の母性のようなものを持っていた。
未果の周りには常に人が集まっていた。男女とわず人気があり、噂では非公式のファンクラブがあるらしい。そのため厚志が未果と付き合い始めた頃は、よく嫉妬と羨望の混じったやっかみを言われていた。
「これからよろしくね」
「……っ」
未果の身体に隠れながら厚志を伺っていた里緒に微笑みかける。だが、やはり人見知りする彼女はすぐに隠れてしまった。
それが、彼女――篠部里緒との初めての出会いであった。

◆◆◆

「っ、……ここ……は？」
厚志は呻き、瞼を上げた。
途端に眼を焼くような光に瞼を閉じた。しばらくそのままじっとして光に慣らせ、瞼を開く。
光は、どうやら窓から挿す太陽光らしい。何故かカーテンが閉められておらず、日の光がそのまま厚志に降り注いでいる。
厚志は状況が理解できず、寝ぼけた頭のまま起き上がろうとした。途端にうなじの辺りに鋭い痛みが走る。
「……っ！？」
痛みに呻きながらも起き上がり、状況を確かめようとする。

厚志が寝ていたのは、それなりの反発力を持ったシングルベッドだった。しっかりとかけ布団もかけられている。

「……？　ここはどこだ？」

自分の部屋でない事は、一目見て分かった。厚志が日課の筋トレをするためにいつもテーブルの上に置いてあるダンベルは無く、代わりに旅行雑誌等が雑然と広がっている。

それ以前に間取りが違う。六畳も無い寮の部屋に対して、この部屋は軽く八畳を超えている。家具や雑貨も見覚えの無い物ばかりである。

自分が置かれている状況が理解できず、厚志が呆然としていると、ドアがガチャリと音を立てて開いた。開いたドアの向こうにいたのは、お盆を持った美樹だった。

「あ、厚志さんおはよう！」

「……美樹……あ、ああ、おはよう」

元気よく挨拶する美樹に、戸惑いながら挨拶を返す厚志。彼女は笑顔で頷くと、部屋に入って来た。そのままテーブルの脇に腰を下ろすと、テーブルの上に陣取っていた旅行雑誌は、おおざっぱに脇に追いやった。一通り脇に追いやると、お盆に乗っているサンドイッチが並んだ皿や、紅茶が入ったカップを並べていく。

「ほら、朝ご飯だよ！　食べよう厚志さん」

「……あ、ああ」

流されるままにテーブルに着き、食事を始める。

サンドイッチは、オーソドックスな卵にハムとレタスを挟んだものから、妙に凝ったコロッケ等もあった。紅茶も澄んだ香りが鼻をくすぐり、味もよかった。

「おいしいよ」

「ん、ありがと」

柔らかく笑う美樹に釣られて、厚志も笑った。

「……そういえば、多田や香奈ちゃん達は？」

「ん？　ふぃんなふぁふぁりへーほをふんへるほ」

「……ちゃんと口の中の物を飲み込んでから喋ってくれ」
「あ……ほへん」
美樹は、紅茶で口一杯にほうばったサンドイッチを飲み込んだ。
「ほら、パンくずがついてる」
小さい子供みたいにパンくずを口の周りに付けた美樹に呆れながら、厚志は指で拭き取った。途端に顔を赤く染めて、美樹が慌てた。
「あ、ありがと……多田さん達は今バリケードを作ってるんだよ」
「バリケード？」
「うん、ここはそれなりに高い塀があるんだけど門があんまり頑丈じゃないから補強して、バリケードを組むんだって。香奈と私は食事担当なの」
紅茶を口に含みながら、美樹が答える。どこか他人事のように言っているのは、恐らく力仕事を任せてもらえなかったからだろう。
「……そうか、ところでここはどこなんだ？」
「えっと……ここは、あの寮から少し離れた所にある家だよ」
「……寮から……」
厚志はまだ痛むうなじに手をやり、ここに来た経緯を思い出そうとした。
スーパーで助けた少年――大介が厚志を助けるために噛まれ、それでも連れて行こうとした所までは思い出せた。だが、それより後に何があったのかが思い出せない。
「美樹……大介君が噛まれた後、どうなったんだ？　何故か思い出せないんだ……」
「えっと……それは――」
「大介は死んだよ、俺達に迷惑をかけないためにな」
どう答えていいか分からない様子の美樹の代わりに答えたのは、多田だった。バリケード作成は終わったようで、作業で汚れた服のまま部屋に入って来た。
「……どういう……ことだ」
「そのままの意味さ、大介はこのまま俺達に着いて行っても迷惑を

かけるだけだからって手榴弾を持って感染者の中に突っ込んでいったよ」

「な……何で止めなかったんだ！！」

「止めるわけがないだろう、実際奴は噛まれていた。着いて来られても迷惑だ、むしろ走れば十分逃げられたにも関わらず手榴弾を消費してしまった……まあ、囮位にはなってくれ――」

ゴキィッ、と鈍い音が部屋に響いた。

多田の言葉に堪えられなくなった厚志が飛び掛かり、殴ったのだ。

多田は少したたらを踏んだが、すぐに姿勢を直し、厚志の眼を真っすぐ見た。

「多田ぁ！　何を言ってるか分かってるのか！！」

「ああ、奴は無駄死にせずに済んだって事――ぐぅっ」

多田の言葉を遮るようにもう一度厚志は殴った。

「あ、厚志さん止めて！！」

さらに殴ろうとした厚志を止めるために、美樹が腰に飛び付いた。

厚志の力なら振り払うのは簡単だったが、さすがにそんな事を出来るはずが無く、息を吐いて自らを落ち着かせた。

「多田……もう一度聞く、本当にそう思っているのか？」

「……ああ」

殴られた際に口の中を切ったらしい多田が、口の端から流れる血を拭いながら答えた。

厚志はそれ以上何も言わず、美樹を柔らかく剥がすと、多田に背中を向けてベッドに戻った。離された美樹はどうしていいか分からない様子で、オロオロと二人を見ていた。

「それだけ元気ならもう心配いらないよな。正午になったら下りてこいよ、これからの事を話さなきゃならないんだからな」

「……」

多田は、何も答えない厚志に肩を竦めると、美樹に目配せをして出ていった。シンと静まり返った部屋で、厚志は拳を握っていた。

「あ、あの……厚志さん……」

「すまない、少し一人にしてほしい」
「わ、分かった……ちゃんとお昼には下りて来てね」
「……ああ」
気を遣ってくれた美樹には申し訳なかったが、今の厚志にはまともな反応は出来なかった。
自らが一度は救った少年を見殺しにした事。多田がそんな少年を見殺しにした事。それが頭の中でグルグルと渦を巻き、まともに思考できなくなる。
同時に、大介が噛まれていたのだから多田の対応が間違ってはいない事は理解できていた。だが、頭では理解できても、厚志の心が納得できなかった。
美樹達を危険に晒したくないという思いと、噛まれたとしても『人間』を見殺しにしたという後悔が、厚志の中で溶け合う。
考え過ぎで頭が痛くなり、ベッドに横になる。すると眠気が緩やかに訪れ、厚志は特に抗う事なくそれを受け入れた。
すでにバリケードに感染者が集まっているのか、バリケードを叩く音が妙に耳に触った。

◆　◆　◆

部屋の中は、ギスギスした空気に包まれていた。バリケードを叩く音が響く度に、皆は身体を震わせる。
「……だから最初に出ていればよかったんだ」
右腕にギブスを巻いた男が、忌ま忌ましそうに呟いた。だが、その言葉に答える者はいない。
ここは病院の食堂である。街の近くにある、山の麓に建てられた病院の、二階の端に二十畳ほどの広さを確保して、最近作られた食堂だった。
だからこそ、他の部屋よりも頑丈で、なおかつ食料が確保できるここに生き残った者達は隠れていた。

（お姉ちゃん……）

胸元のロケットペンダントを開き、篠部里緒は中に納められた写真を見た。写真には里緒と同じ茶の髪を～した、見る者を朗らかな気持ちにさせる笑みを浮かべた女性が写っていた。

写真の女性は、里緒の姉の篠部未果である。里緒は未果の笑顔を見て、叫び出しそうな恐怖が薄らいだのを感じた。

少し冷静になった頭で今の状況を整理した。

食堂のドアは自動ドアではあるが、何故かあるシャッターを下ろせば、かなり頑丈で、当分は壊れそうにない。食堂にいる十人ほどの生き残りの中で、病院関係者は三人しかいなかった。

死者が生者を襲う。そんな謎の奇病が発生した当時は、百人ほどの医師と看護師がいた。

街でも有数の設備と施設を持つ、この伊山病院には続々と怪我人が運び込まれた。指先を怪我したという軽傷から、頸動脈を引き千切られている瀕死の怪我まで多種多様であった。だが、皆人に噛み付かれたような傷痕であった。

地元のテレビ局すら駆け付ける事態に、ただ事ではないと感じた医師達は受け入れ先を募った。この時点で伊山病院の治療室は一杯であり、待合所で治療をし始めるほど怪我人で溢れ返っていた。だが、近隣の病院も似たような状況らしく、受け入れ拒否すら始めている病院も出始めていた。

事態が急変したのは、待合所で治療を受けていた重傷者が死亡した後だった。あまりの怪我人に対処が追い付かなくなって来た時、それは起こった。

死亡した患者の目を閉じさせ、医師が次の患者に取り掛かろうとした次の瞬間、患者が起き上がり、医師に噛み付いたのだ。その患者は医師を噛み殺すと、近くにいたテレビ局のリポーターに襲い掛かった。

後は阿鼻叫喚の大惨劇が起きるだけだった。噛み殺された医師が起き上がり、逃げ遅れた看護師を襲い、先に運び込まれていた患者

が同じように死した後、起き上がり医師に襲い掛かる。ネズミ算式に増えた感染者は、瞬く間に病院内に溢れ帰った。

里緒達が何とか食堂に逃げ込めたのは、奇跡に近かった。たまたま切れた注射針を取りに行って戻った里緒は、医師が襲われたのを見て、逃げ出したのだ。それが返って彼女を助けた。

あまりの患者数に、入院している中でも動ける者を移動させていた看護師達と合流でき、事情を説明し食堂に篭ったのだ。もちろん看護師の中には里緒の意見に反発し、助けに行くと息巻いて待合所に向かった者もいた。それを見てどうするべきか迷っていた者もいたが、しばらくして待合所に向かった看護師の悲鳴を聞いて篭城を決めた。

里緒もそうだったが、他の者達もすぐに救助が来ると思っていた。だが、二日目にテレビが映らなくなり、ラジオもノイズしか走らなくなった辺りで、救助は見込めない事に気付いた。それでも何人かは救助が来ると信じていたようだが、五日目にもなるともはや誰もそんな希望は言わなくなった。

（このままここで死ぬのかな……）

里緒に頭を預けるようにして寝ている同期の看護師――笹山こずえを起こさないようにしながら、彼女の寝顔を見た。

こずえは見た目は地味な女性だった。どこにでもいる普通の顔立ちに、肩で切り揃えた黒髪と同色の瞳。中肉中背で高くもなく、低くもない背丈。

そんなどこにでもいる女性だが、里緒は何故か彼女に姉と同じ雰囲気を感じた。この病院に看護師として就職し、唯一プライベートでも付き合いのあるのがこずえだった。

（他はどうでもいい……こずえだけは……失いたくない）

そんな考えが頭に浮かんだ瞬間、廊下に続くドアが叩かれた。また感染者がやって来たのか、と皆が眉根を寄せた。

「な、何!?」

ドアを叩く音に驚いたこずえが目を覚ました。どうせ感染者だと

思っていた里緒は宥めようとした。だが、何かを言う前にドアの向こうの『誰か』が声を上げた。

「た、助けてくれ！！」

今の所あの奇病に冒された者は、唸るような声は上げるものの、言葉を話す者はいなかった。それはつまり、今ドアの外にいる者が生存者である事を示していた。

「あ、開けてくれ！　息子がいるんだ！！」

「お父さん、来たよ！」

変声期前の男の子の声が聞こえた。どうやら息子がいるというのは嘘ではないらしい。しかも、男の声を聞き付けた感染者がやって来ているらしい。

「い、今開けます！」

こずえがいち早く反応して、シャッターの開閉装置に向かった。それを阻むように、食堂内に散らばっていた生き残った者達が開閉装置の前に集まった。

「ど、どいてください！　早くしないと彼らが！！」

「駄目だ、ここを開ければ外にいる化け物が入って来るかもしれない。あんたらもそう思うだろう？」

生き残った者達の中で一番年老いた男性が、開閉装置に集まらなかった里緒と男性医師に向けてそう言った。こずえは信じられないものを見たような表情で里緒達に顔を向ける。

医師は苦虫を噛んだような表情で俯き、里緒もどう答えていいか分からない表情で立ち尽くしていた。

「早く開けてくれ！！　せめて息子だけでも中に入れてくれ！！」

切羽詰まった男の声が食堂に響く。

「早くそこをどいて！　貴方達は自分が助かればそれでいいの！？」

こずえの言及に誰も答えない。ただ俯いたり、視線を逸らしたりしているだけだった。

「早く！！」

いよいよ危機迫った様子の男が、一際強くドアを叩く。

（……皆の視線はこずえに集まっている……今だ！）

感づかれないためにゆっくりと壁際まで移動していた里緒は、生き残った者達の意識が完全にこずえに向いているのを確認すると、開閉装置に向けて一気に走った。数メートルの距離だがやけに長く感じる。

「こずえ、早く！」

生き残った者達が反応する前に開閉装置に飛び付き、里緒は『開』のボタンを押した。里緒の動きに気付いたこずえは、ドアに向かって走り出す。

「この隙間から早く中に！！」

素早くドアを開け、少しだけ上がったシャッターの隙間から手を差し出す。

「優太、先に行きなさい！」

「でも……お父さんは？」

「後から行くから早く行きなさい！！」

シャッターを向こうでの親子のやり取りを聞きながら、里緒は焦っていた。シャッターは、大人でも俯せになったらギリギリ通れるくらいで止めてある。それ以上開けば、感染者が入って来るまでに閉められない可能性があるからである。

シャッターの隙間から見える感染者達は、男のすぐ背後まで迫っていた。優太と呼ばれた男の子がシャッターを潜り、こずえが抱き抱える。

「お父さんも早く！」

「駄目です！　私が通っている間に奴らがたどり着いてしまう。それだとせっかく助けていただいた優太が危険になる……閉めてください！」

「だ、駄目です！　早く中に！！」

「早く閉めて！　妻だけでなく息子まで失いたくない！！」

里緒は、足を潰されたのか、元々怪我していたのか分からないが、元は中年男性であったろう床を這って進む感染者の存在に気付き、

『閉』のボタンを押した。軋んだ音を立ててシャッターが降りていく。

「里緒！？」

「床を這っている奴がいたの、このままだと潜り込まれる……」

「でもっ！」

こずえがそれ以上何かを言う前に、シャッターが一際大きな音を立てて閉まった。

「ありがとうございます。優太……強く生きろ！」

「お父さん！！」

「来るなら来い！　うおぉぉぉぉぉ！！」

掛け声と友に、シャッターの向こうから何かを叩き潰すような音が数度響いた。やがて、その音も無くなり、生々しい咀嚼音が聞こえてくるだけになった。

父親は最後まで悲鳴を上げなかった。それは息子に恐怖を与えないためだったのかもしれない。優太もそれが分かっているのか、こずえに抱きしめられたまま、涙を流しながらじっとシャッターを見詰めていた。

「……」

その場にいた誰一人として、喋る者も動く者もいなかった。

やがて、再びシャッターが叩かれ始め、ようやく皆が思い思い集まり座り込んだ。里緒は気まずさを感じながらも、ドアを施錠して、優太を抱いたまま窓際に座ったこずえの傍に腰を下ろした。

こずえは静かに泣く優太を宥めていたが、しばらくすると寝息が聞こえて来た。

「……ありがとう」

「え？」

「里緒がシャッターを開けてくれなければこの子すら助けられなかった」

「……そんな、私は父親を見殺しにした……」

「確かにそうだけど……この子には悪いけど、私は一人でも救えて

よかったと思う……もちろん父親を救えなかった事は納得は出来ないんだけどね」

そう言い、こずえは涙を流したまま微笑んだ。その姿に里緒は涙を流した。

「ごめんなさい……」

「謝らないでよ……私だって一人なら何も出来なかった。里緒がいてくれたから、今も正気でいられるんだから」

「……私もこずえがいるから――」

里緒の返事を遮るように、けたたましい電子音が食堂内に響いた。

「こ、これって……もしもし……そ、そうか無事なのか!?　あ、ああ……こっちは病院で立て篭もってるんだ……ああ、ああ……絶対に帰るから……待っててくれ……ああ、愛してるよ」

右腕にギブスを巻いた男が、涙を流しながら携帯電話を切った。

「お、おい、繋がったのか!?」

「ああ、妻が……家で立て篭もって待ってるって」

「で、電話を貸してくれ！　家にかけてみる!!」

生き残った者達がそれぞれ携帯電話を取り出しながら電話をかけ始める。理由は分からないが、回線がパンク状態で繋がらなかったはずの電話がかかって来たらしい。

病院は非常電源を確保してあったため、立て篭もった後、数日だが電気は確保できた。その間に、たまたま充電器を持っていた者に、規格が合う携帯電話を持っていた者が充電させてもらっていた。そのため、ギブスの男や里緒を含めた数人は、まだ携帯電話を使える状態にあった。

「里緒、かけないの？」

「……」

里緒は誰にかけるか迷っていた。母親はすでに他界し、姉である未果もいない。ちらりとある男性の影がちらついたが、頭を振って掻き消した。

（あの人には頼りたくない……）

しばらく迷って、里緒は高校時代から付き合いがあり、家がこの近くの友人に電話をかける事にした。

第２０話　目覚めと後悔（後書き）

ご意見ご感想いただければ幸いです。

いきなり、新キャラ登場です。
ちなみに、今更なのですが、登場人物紹介は必要でしょうか？
ご要望があれば載せたいと思います。

次回の更新ですが、十二月末までには更新したいと思います。
では、また。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4672p/

失われた世界で得た絆

2011年11月30日23時57分発行